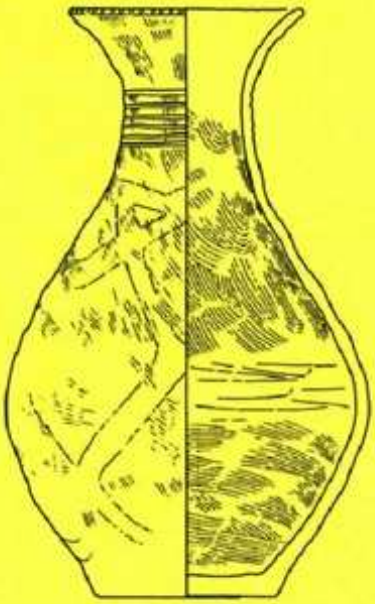
松本市文化財調査報告No.108

MOMOSE

# 松本市百瀬遺跡 II

## ——緊急発掘調査報告書——



1993・3

松本市教育委員会

*MOMOSE*

# 松本市百瀬遺跡 II

## ——緊急発掘調査報告書——

1993・3

松本市教育委員会

# 序

松本市南部に位置する寿地区は、近年宅地開発に伴う発掘調査が行われており、広範囲にわたる遺跡の分布が知られていました。このたび百瀬地籍にも土地区画整理事業が及ぶことになりました。百瀬遺跡は考古学上、重要な標式遺跡でもあり、文化財の保護を図るため、松本市が寿百瀬土地整理組合より委託を受け、松本市教育委員会が事業に先立って発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を行ったわけです。

発掘調査は市教育委員会の委託を受けた㈶松本市教育文化振興財団によって組織された調査団により、平成4年9月から同年11月にかけて行われました。作業は残暑・乾燥・強風に悩まされましたが、参加者の皆様の御尽力により無事終了することができました。その結果、弥生時代・古墳時代の竪穴住居址のほか、縄文時代、中・近世と見られる遺構を発見し、また同時期の遺物を得ました。特に弥生時代の竪穴住居址を確認できたことは注目するところでしょう。これらは今後地域の歴史解明に大変役立つ資料となることと思います。

しかしながら開発事業に先立って行われる発掘調査は記録保存という遺跡の破壊を前提とする側面があることも事実であります。私たちの生活が豊かになるための開発とそれによって失われる歴史遺産という矛盾のなかで、文化財保護に携わる者の苦悩は絶えません。本書を通して、文化財保護へのご理解を深めて頂ければ、この上なく幸いに存じます。

最後になりましたが、苛酷な状況のなか発掘作業に御協力頂いた参加者の皆様、また調査の実施に際して、多大な御理解を頂いた寿百瀬土地区画整理組合の方々、地元関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成5年3月

松本市教育委員会　教育長　守　屋　立　秋

# 例　　言

1．本書は平成４年９月１日から11月11日にかけて行われた松本市百瀬遺跡の緊急発掘調査報告書である。百瀬遺跡は松本市寿豊丘1346-4番地他に所在する。

2．本調査は、松本市寿百瀬土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査であり、松本市寿百瀬土地整理組合より委託を受け、松本市教育委員会が実施したものである。

3．本書の作成は、松本市より委託を受けた㈱松本市教育文化振興財団が行った。

4．本書の執筆は第１章：事務局、第２章第１節：太田守夫、第３章第３節１．(1)：竹原　学、(2)(3)：直井雅尚、２．：関沢　聡、３．：木下　守、その他：三村竜一が行った。

5．本書作成にあたっての作業分担は、次に掲げる通りである。

トレース：竹原久子、松尾明恵、横山真理、三村孝子、開嶋八重子、中村朝香、平出貴史、MIN AUNG THWE、村山牧枝、上條尚美、高山一恵、竹原　学、直井雅尚、今村　克

遺構図整理：赤羽包子、石合英子

図版作成：今村　克、林　和子、竹原久子、石合英子、上條尚美、村山牧枝、堤加代子、倉科祥恵、高山一恵、竹原　学、竹内靖長

遺物復原：五十嵐周子、内田和子、大角けさ子、村松恵美子、横山真理

遺物実測：竹原久子、松尾明恵、横山真理、三村孝子、上條尚美、村山牧枝、吉沢克彦、久根下三枝子、平出貴史、直井雅尚、関沢　聡、竹原　学、竹内靖長、今村　克

遺構写真：今村　克、三村竜一

遺物写真：宮嶋洋一、市川　温

一覧表作成：今村　克、林　和子、赤羽包子、高山一恵

6．本文中の遺構名は下記のように略した。

第○号竪穴住居址 → ○住　　第○号竪穴状遺構 → ○竪

第○号建物址 → ○建　　第○号土坑 → ○土

7．遺構図中の濃い網目（スクリーントーン）は焼土、薄い網目は柱痕を示す。

8．本書の編集は三村竜一が行った。

9．委託契約書、作業日誌等の事業経緯を示す書類は調査結果の記載を重視したために、本書から割愛したが、出土遺物、図類と共に松本市教育委員会が保管している。

# 目　　次

序

例　言

目　次

第1章　調査の経緯

第1節　調査に至る経過……4

第2節　調査体制……4

第2章　遺跡の環境

第1節　遺跡の立地と地形・地質……5

第2節　歴史的環境……8

第3節　周辺遺跡……9

第3章　調査結果

第1節　調査の概要……11

第2節　遺　　構

1．住居址……15

2．竪穴状遺構……17

3．掘立柱建物址……18

4．土　坑

(1)縄文時代早期……19　(2)縄文時代後期……19

(3)弥生時代……20　(4)平安時代……20

(5)中世以降……20

5．その他……21

第3節　遺　　物

1．土器・陶器

(1)縄文時代の土器……36　(2)弥生時代の土器……37

(3)古墳時代の土器……39　(4)平安時代の土器・陶器……40

(5)中世以降の陶器・陶磁器……40

2．石　器……41

3．金属製品

(1)鉄器……44　(2)銭貨……44

第4章　調査のまとめ……59

# 図 目 次


第１図　遺跡の位置と周辺遺跡……3
第２図　調査地略図……7
第３図　地層概念図……7
第４図　調査地の範囲……10
第５図　調査地基本土層……12
第６図　遺構配置（第１検出面）……13
第７図　遺構配置（第２検出面）……14
第８図　第２号住居址……23
第９図　第３・５号住居址……24
第10図　第４・６号住居址……25
第11図　第７・８号住居址……26
第12図　第１・５・２号竪穴状遺構……27
第13図　第３・４号竪穴状遺構……28
第14図　第６・７号竪穴状遺構……29
第15図　第１号掘立柱建物址……30
第16図　第２号掘立柱建物址……31
第17図　土坑(1)……32
第18図　土坑(2)……33
第19図　土坑(3)……34
第20図　土坑(4)……35
第21図　土器実測図(1)……47
第22図　土器拓影(1)……48
第23図　土器実測図(2)……49
第24図　土器実測図(3)……50
第25図　土器実測図(4)……51
第26図　土器実測図(5)・土器拓影(2)……52
第27図　土器拓影(3)・土器実測図(6)……53
第28図　土器実測図(7)……54
第29図　石器実測図(1)……55
第30図　石器実測図(2)……56
第31図　石器実測図(3)……57
第32図　鉄製品実測図・銭貨拓影……58


# 表 目 次


第１表　遺構一覧表……22
第２表　石器一覧表……45
第３表　銭貨一覧表……46

●印　調査地点

1．百瀬遺跡
2．小塚遺跡
3．高畑遺跡
4．村井遺跡
5．吉田川西遺跡
6．小池遺跡
7．北原遺跡
8．小赤遺跡
9．石行遺跡
10．横山城遺跡
11．赤木山遺跡
12．寿木下遺跡
13．前田遺跡
14．白神場遺跡
15．宮の下遺跡
16．雨堀遺跡
17．砂原遺跡
18．清心遺跡
19．釈迦堂遺跡
20．長泉寺遺跡
21．くねの内遺跡
22．八幡原遺跡
23．エリ穴遺跡

縮尺　1：25,000

第1図　遺跡の位置と周辺遺跡

# 第１章　調査の経緯

## 第１節　調査に至る経過

百瀬遺跡は、昭和26～27年にかけて藤沢宗平氏によって松本平で初めて発掘調査された弥生時代の遺跡として著名である。この時、住居址から出土した土器群は『百瀬式土器』として設定され、本遺跡は弥生時代中期末の標式遺跡とされている。今回、百瀬遺跡の南西部が松本市寿百瀬土地区画整理事業用地に含まれ、破壊される恐れが生じた。そこで松本市教育委員会は、財団法人松本市開発公社・松本市寿百瀬土地区画整理組合と、埋蔵文化財保護協議を重ねた。協議の結果、松本市教育委員会は平成４年度に百瀬遺跡の第Ⅴ次発掘調査を実施して、記録保存を行うことにした。

## 第２節　調査体制

**【発掘調査】**

**調査団長**：守屋立秋（松本市教育長）

**調査担当者**：三村竜一、今村　克（社会教育課）

**調　査　員**：太田守夫、森　義直、西沢寿晃、三村　肇

**協　力　者**：青木雅志、赤羽包子、朝倉敬二、五十嵐周子、石合英子、石川末四郎、内澤紀代子、大谷成嘉、大谷房夫、大月みや子、大月八十喜、神田栄次、小島茂富、坂口ふみ代、須藤　弐、袖山勝美、高橋登喜雄、鶴川　登、林　昭雄、林　和子、林　雄一、藤本利子、丸山久司、丸山隆香、魏　國成、横山　仁、横山真理、吉田　勝

**［信州大学］**：荒木　龍、内山美紀、岡崎祐司、岡部俊顕、香取朋代、神田　徹、坂下義視、下谷亜希子、中村朝香、服部　寛、林　和男、林原和彦、原田賢一、平出貴史、本荘健一、松居浩二、松本洋子、萬川晶子、三浦祐成、三宅康司、明神　功、MIN AUNG THWE、依田幸浩

**【報告書作成】**

**教育委員会事務局**：島村昌代（社会教育課長）、田口　勝（課長補佐）、窪田雅之（主任）

**財団法人松本市教育文化振興財団**

**事務局**：深澤　豊（事務局長）、牟禮　弘（事務局次長）、青木孝文（事務局次長補佐）

**松本市立考古博物館**：神澤昌二郎（館長）、直井雅尚、関沢　聡（主任）、久保田剛（主事）、藤原美智子

# 第２章　遺跡の環境

## 第１節　遺跡の立地と地形・地質

**位置と地形の概観**　本遺跡は松本市大字寿豊丘百瀬集落（標高620～625 m）の西縁に沿う畑地に広がっている。百瀬集落は東方からの牛伏川扇状地の末端（扇端）に属するとともに、西方（現河床との距離250 m）を北流する田川の右岸段丘の縁辺にもあたっている。即ち、牛伏川扇状地の扇端がかつて田川の浸食を受け段丘化したもので、百瀬集落の立地する地形面は双方の性格をもっていることになる。この状態は、寿地区のほとんどが牛伏川扇状地上にあるため、扇端に立地する小池集落から百瀬にわたり、田川の沖積面（平均傾斜約0.5° S-N）との間に、段差のみられる地形面として、また沖積面へ下る傾斜面としておよそ２ kmにわたって観察される。前者は段丘崖として開析されたものであり、後者は度々起こった扇状地の氾濫による扇端での堆積で、段丘を覆ったり破壊したりしている。沖積面と段丘面の比高はおよそ2.5～４ m位である。牛伏川の現河床は、現在百瀬集落とおよそ1.5 km離れた、東ないし北東の扇状地最右の側扇を流れている。このため百瀬集落への直接の流れはなく、扇頂での氾濫の影響だけである。扇頂からの距離は３ km、扇央の平均傾斜は約2.9°（百瀬集落付近2.2°）である。本遺跡はこのような地形と田川の沖積地の間にできた傾斜地に広がり、地層の上では扇状地との連続性がみられ、田川の堆積は見つかっていない。発掘では牛伏川の分流によるものと考えられる開析谷や埋没が発見され、古い扇状地層、新しい扇状地層、段丘地形など複雑な相互関係が観察される。扇状地層の砂礫はほとんどが石英閃緑岩・玢岩・玢岩のホルンフェルスで、いずれも牛伏川上流の鉢伏山地起源のものである。

**調査地の地層**　地層調査の第一の目的は、遺跡・遺物の包含層を決めることである。百瀬遺跡は既に第Ⅰ～Ⅳ次の調査が行われていて、その報告書等からも地層の概要を知ることが出来るが、扇状地性の堆積であるため、僅かな距離でも変化が著しく、地層の連続性をみつけることが難しい。今回と前回の調査地間の距離は、第Ⅰ・Ⅱ次は北へ100 m、第Ⅲ次は北へ10数 mと推定される。地形図の比高は第Ⅰ・Ⅱ次は今回よりやや低く、第Ⅲ次は今回につながるものとみられる。たまたま今回の調査は、段丘面も扇状地性の面も含めた広い範囲であったため、各所の試掘から始めたが、まず南端（第２図A・B・C）では第３図A・B・Cの堆積層が観察できた。ここで注目されたのは、厚さ２ mを超える新鮮な砂層角礫層の交錯層と互層（砂層角礫層とよぶ）、およびその下部の遺物を包含した１ mを超える黒褐色土層である。特に砂層角礫層は新鮮なうえ、他の層にみない角礫からなり、上下層と堆積環境や時期を異にしていることが分かった。一方第２図のD付近を東西に割った試掘では、薄い砂層角礫層とその下部の黒褐色土層が観察された（第３図D）。このDとA・B・

Cの対比の結果、砂層角礫層はその層厚や深度から、既に形成されていた黒褐色土層を表層とする起伏面（南北性）の谷（東西性）を埋めて堆積したことが分かった。更に発掘が進むにつれ、第2図Gにおいて第3図Gの断面が得られ、砂層角礫層の堆積の中心と縁辺を知る事が出来た（第2図破線）。また住居跡の全容がみられるころには、黒褐色土層および黄褐色土層の傾斜方向や傾斜度（第2図）も明らかとなり、砂層角礫層による埋没谷の状態がはっきりしてきた。この砂層角礫層は多数の角礫の混在、乱れた堆積、下層に浸食の影響がないなどから、流れを中心としたものではなく、最初に砂層による水平層、次に盛り上がりをみせるほどの角礫混じり砂層が、氾濫性の押し出しとなって、一気に堆積したものと考えられる。

次に黒褐色土層とその下部の黄褐色土層は被覆層の砂層角礫層と違い、中礫を中心とした亜円礫や亜角礫を含み、最も連続性をもつ土層である。また黒褐色土層は腐植質を含み、特に埋没谷の底の土層では、腐植質や黒土の部分が厚く、埋没以前の自然環境（湿地性の植生）が想像される。従ってこの土層は、遺跡・遺物の包含層としての生活面であるうえ、原地形の起伏面として重要な地層（鍵層）である。

住居址の多くは下部の黄褐色土層まで及んでいるが、黒褐色土層と黄褐色土層との関係は腐植質による漸移層か、堆積時を異にする層かは判断がついていない。おそらく漸移層であろう。一般に黄褐色土層は礫が少なく土層の部分が多い。なお黄褐色土層の下部のローム質黄褐色砂礫土層は、現在みられる最下部層で礫中に鉢伏山～横峰間の山頂平坦面付近に分布する礫岩・泥岩の亜円礫を含んでいるので、黄褐色土層と堆積時を異にしているものと考えられる。

**地形の形成**　以上、牛伏川の扇状地形成に伴う堆積層や堆積状況、更に遺跡・遺物の出土状況からみて、調査地の地形の形成は、次のような順序で行われたと考えられる。

①ローム質黄褐色砂礫土層の堆積は、牛伏川の頭部浸食が行われ、鉢伏山地上部の礫岩泥岩が混入して、扇状地面に堆積。

②黄褐色土層（黒褐色土層）の堆積は、牛伏川の中腹部・山麓部（石英閃緑岩地帯）の浸食が行われ、扇状地面に石英閃緑岩・玢岩・玢岩のホルンフェルスの礫が堆積。

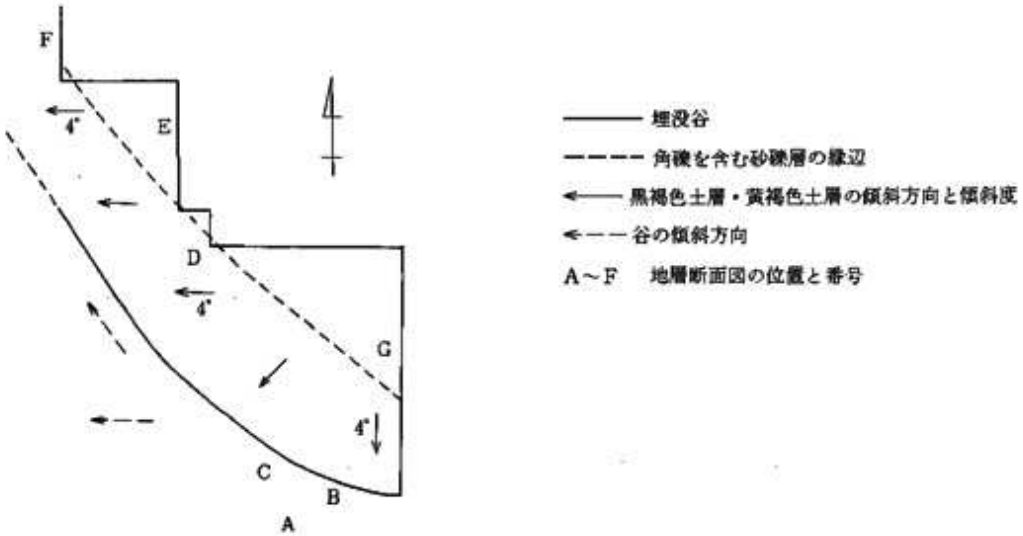
③黄褐色土層（黒褐色土層）が、牛伏川の開析を受け、南北性の起伏面（東西性の谷）が出来る。

④この起伏面に、古代の生活が始められまた腐植性の土層が生まれた。この期間は、次の砂層角礫層の堆積するまでの地表面で、この長期間に埋没谷底に流れや湧水があり、湿性の植物があった。扇状地末端には湧水もみられた（桜清水など）。

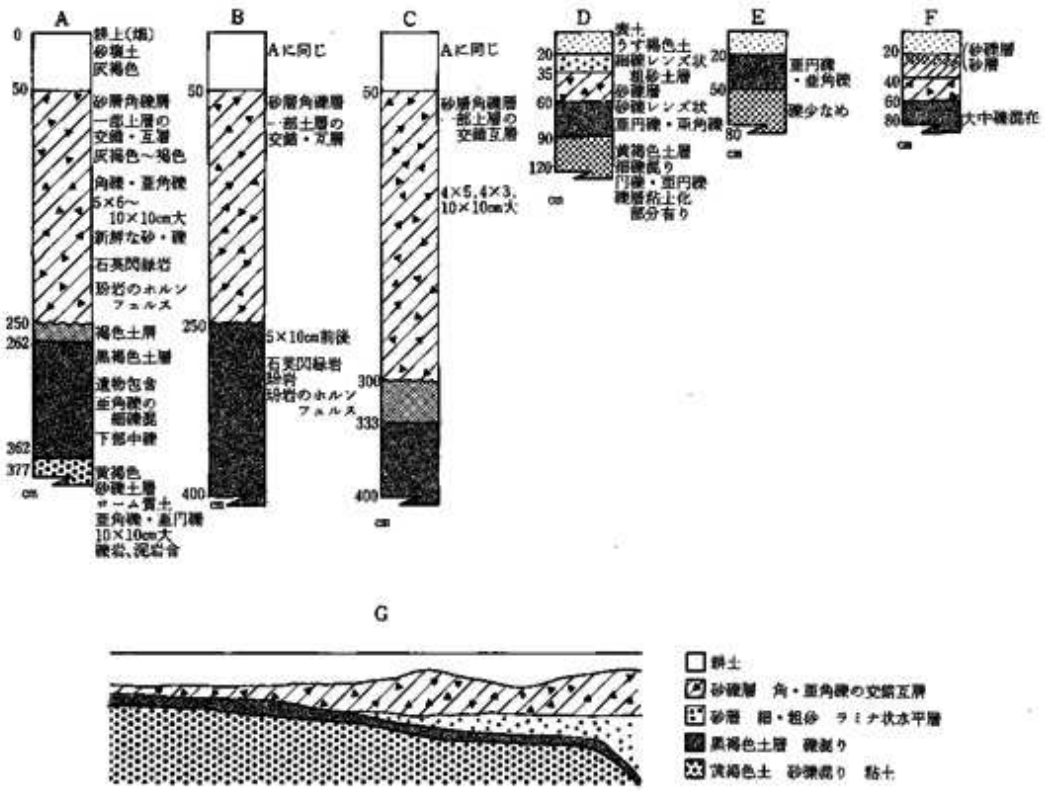
⑤田川による河岸段丘の形成は、③と④の間かそれ以前か現在決め手がない。

⑥砂層角礫層が起伏面の谷を埋める。この堆積時代はこの層の下に中世の遺構が発見されているため、近世以後と考えられる。宝暦13年の大氾濫など。

⑦表土（耕土）層の堆積は上記の地層と同様に、牛伏川の度々の氾濫の影響を受けている。




第2図　調査地略図




第3図　地層概念図

## 第2節　歴史的環境

百瀬遺跡のある松本市寿百瀬地籍には本遺跡の他にも耳塚古墳、正念寺等の史跡があり、地元では寿史談会、百瀬遺跡保存会が文化財の保護・研究に取り組んでいる。ここでは本遺跡の第Ⅰ～Ⅳ次調査の概要と百瀬地籍の史跡について時代別に簡単に述べていきたい。

**①弥生時代**

百瀬遺跡の第Ⅰ～Ⅳ次調査は昭和26～27年にかけて藤沢宗平氏により行われた。弥生時代の遺跡としては松本平で初めての調査である。第Ⅰ～Ⅱ次調査地点は正念寺の北側及び西側の畑地、第Ⅲ次調査地は箱清水とよばれる井戸の南側である。第Ⅳ次調査地は明確でないが、第Ⅲ次調査地の西と思われる。遺構は竪穴住居址1軒等を第Ⅰ～Ⅱ次調査地点において検出している。遺物についてはこの竪穴状遺構住居址に伴うものかは明確ではないが、土器には壺・甕・鉢・高杯等の器種がある。これらの土器群は中期後半の良好な組成をもち、中南信地方における弥生中期末土器編年の標式として「百瀬式土器」が設定されている。また、石器についても太形蛤刃石斧・磨製石包丁・石斧等があり、これらが一括把握された例は少なく貴重である。

**②古墳時代**

寿百瀬1130-イ番地には耳塚とよばれる古墳がある。ところが明治時代の住宅建設の際に破壊されてしまい、遺物の所在さえわからない。今では古墳の伝承が語り継がれるだけで実体は不明である。現在、後に建立された社とともに百瀬遺跡の発掘・耳塚の由緒が刻まれた石碑が建っている。

**③江戸時代**

百瀬遺跡の範囲内に含まれる寿百瀬1318番地には正念寺がある。弾誓木食宗の寺院で、享保9年（1724）に建立された。弾誓上人開祖による木食戒の伝承等によると、慶長年間には既に念仏堂の堂照庵があったらしい。また正念寺の墓地西方より五輪塔が出土しており、寺史は更に溯る可能性もある。この五輪塔は現在本堂内に安置されている。正念寺の本尊は阿弥陀如来座像であり、脇侍の観世音菩薩（左）勢至菩薩（右）、延命地蔵とともに松本市重要文化財に指定されている。

百瀬地区は牛伏川扇状地の末端に位置するため湧水に恵まれ、百瀬三清水とよばれる古泉がある。このうちの一つの箱清水からは黄金製の観世音菩薩が掘り出されたという観音伝承がある。かつて箱清水の脇にはこの観音の模作仏を安置した箱清水観音堂があり、巡礼による寺院巡拝が流行したこの時代には「松本三十三番札所中の十一番」並びに「信濃百番札所中の三十三番」の霊場として多くの巡礼者が訪れていたという。箱清水の井戸は現在も残り、脇には御詠歌碑が建てられている。

**参考文献**

藤沢宗平　1951　「長野県東筑摩郡寿村百瀬弥生式遺跡調査概報」『信濃』Ⅲ・3－8

桐原　健　1983　「百瀬遺跡」『長野県史』考古資料編1　(3)主要遺跡（中信）

仏信山正念寺　1989　「仏信山正念寺沿革」

## 第3節　周辺遺跡

百瀬遺跡は松本市の南部、寿地区豊丘にある。地形的には牛伏川扇状地末端を田川が開析することで、形成されている。以下周辺遺跡の分布概要を記述する。

**縄文時代**　鉢伏山西麓から流れる河川によって形成された複合扇状地の緩斜面と、寿赤木に所在する独立した赤木山に多数が分布する。早期では本遺跡の南東内田に釈迦堂・五斗林遺跡、寿の北原遺跡から押型文土器が出土している。前期では南に隣接する塩尻市の山麓に多くの遺跡があり、松本市内では白神場・北原・清心・五斗林遺跡が知られる。中期になると遺跡数は急増し、雨堀・宮の下・長泉寺・くねの内・前田木下遺跡等がある。特に内田の雨堀遺跡では昭和55～56年の調査で、中期初頭～末の住居址19軒・土坑・集石・土器一括廃棄遺構が検出され、中期の大集落であることが確認された。後・晩期になると、晩期前半の土器・土製品を多量に出土したエリ穴遺跡、晩期末の土器・石器がおびただしく出土した石行遺跡が著名である。

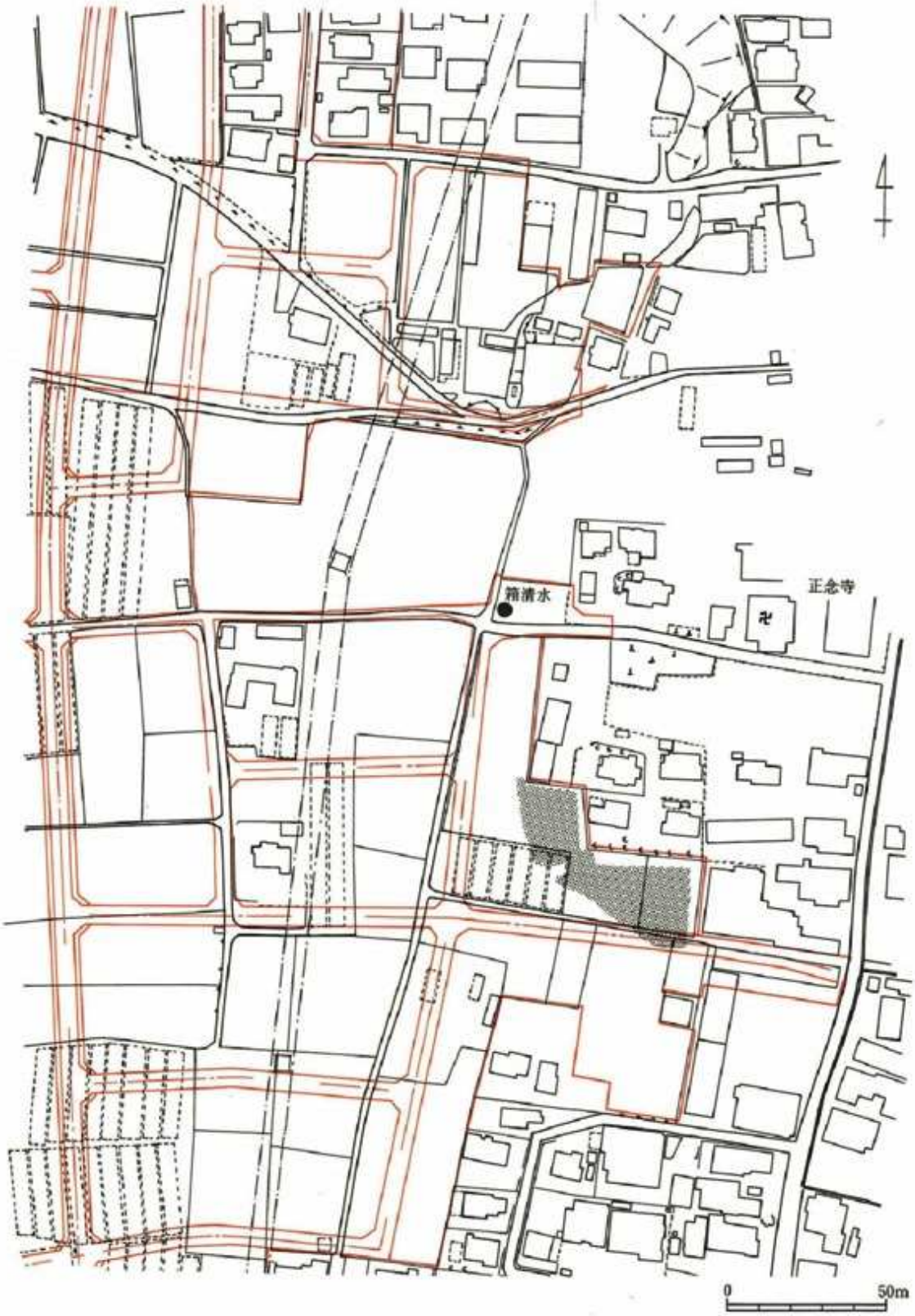
**弥生時代**　横山城遺跡で中期末、前田木下遺跡で後期の住居址が確認され、白神場遺跡では方形周溝墓を検出している。

**古墳時代**　石行遺跡の前期住居址群、白神場遺跡の前期・中期住居址等がある。

**奈良・平安時代**　多数の遺跡が知られているが、小原・小池・本郷遺跡等では多数の住居址が検出された。塩尻市の吉田川西遺跡では奈良～平安時代の大集落が確認され、土坑内より緑釉陶器等の多数の遺物が出土している。

**参考文献**


(財)長野県埋蔵文化財センター　1989　「中央自動車道長野線　埋蔵文化財発掘調査報告書3」
松本市教育委員会　1981　『松本市内田雨堀遺跡』
松本市教育委員会　1982　『松本市内田雨堀遺跡』
松本市教育委員会　1983　『松本市寿小赤遺跡』
松本市教育委員会　1984　『松本市前田木下遺跡』
松本市教育委員会　1985　『松本市赤木山遺跡群Ⅰ』
松本市教育委員会　1987　『松本市高畑遺跡』
松本市教育委員会　1988　『松本市宮の下遺跡』




第4図　調査地の範囲

# 第３章　調査結果

## 第１節　調査の概要

### １．調査方法

本遺跡は松本市の南部、寿豊丘に所在する。今回の調査地点は寿1346-4番地他である。昭和26～27年に藤沢宗平氏が行った第Ⅰ～Ⅳ次調査のうち第Ⅰ・Ⅱ次調査地点の南方約100ｍにあたる。

本調査に先立ち平成３年12月には区画整理事業予定地内における遺跡とその範囲を確認する為に人力による試掘坑を設け、その結果今回の調査地周辺に遺物包含層と遺構を確認している。

本調査では、検出面までの堆積土は重機によって除去した。調査面積は1,211㎡である。本遺跡の基本土層は場所により差異があるが概ね、Ⅰ層：耕作土、Ⅱ層：褐色土、Ⅲ層：礫層、Ⅳ層：暗褐色土、Ⅴ層：褐色土(小礫少量混入)、Ⅵ層：黒褐色土、Ⅶ層：黄褐色土である。このうちのⅥ層中から縄文～近世の遺構が掘り込まれていた。このため第１検出面をⅥ層中に設定し、地表面から50～180 cm を除去した。続いて第１検出面の調査終了後に更に10～40 cm を除去し、Ⅶ層上面を第２検出面として第１検出面での確認が困難であった遺構（土坑・建物址等）を再検出し調査した。

### ２．調査結果

①遺構　今回の調査で確認された遺構は下記の通りである。

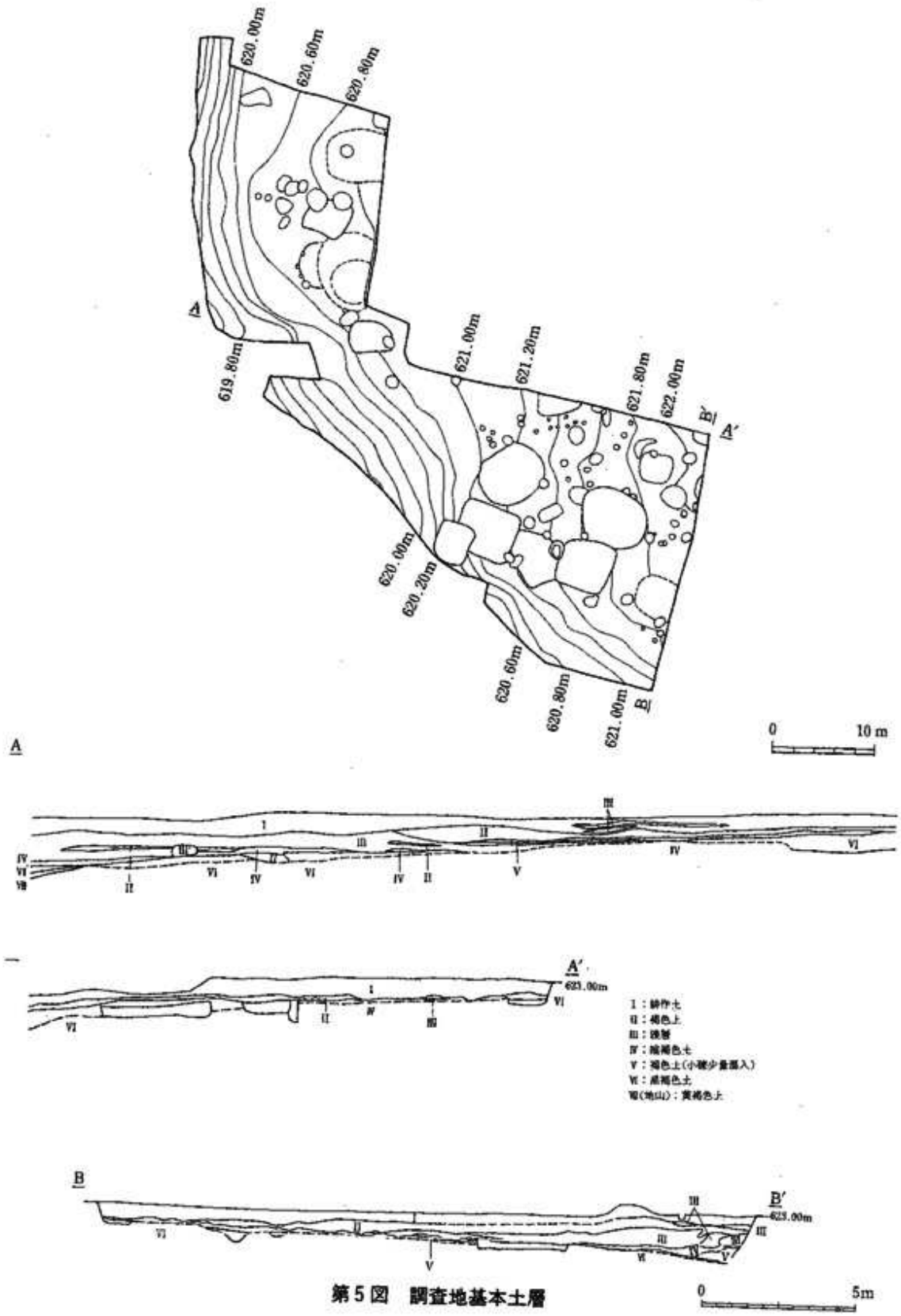
- 住居址　　６軒（弥生時代中期４、弥生時代後期１、古墳時代後期１）
- 竪穴状遺構　７個（弥生時代中期６、中世以降１）
- 掘立柱建物址　２棟（時期不明）
- 土　坑　　87個（縄文時代早期１、縄文時代後期２、平安時代３、中世以降約30）
- ピット　　75個（縄文～中世以降）

②遺物　各種遺構、遺構包含層から土器、石器、金属製品等が出土している。

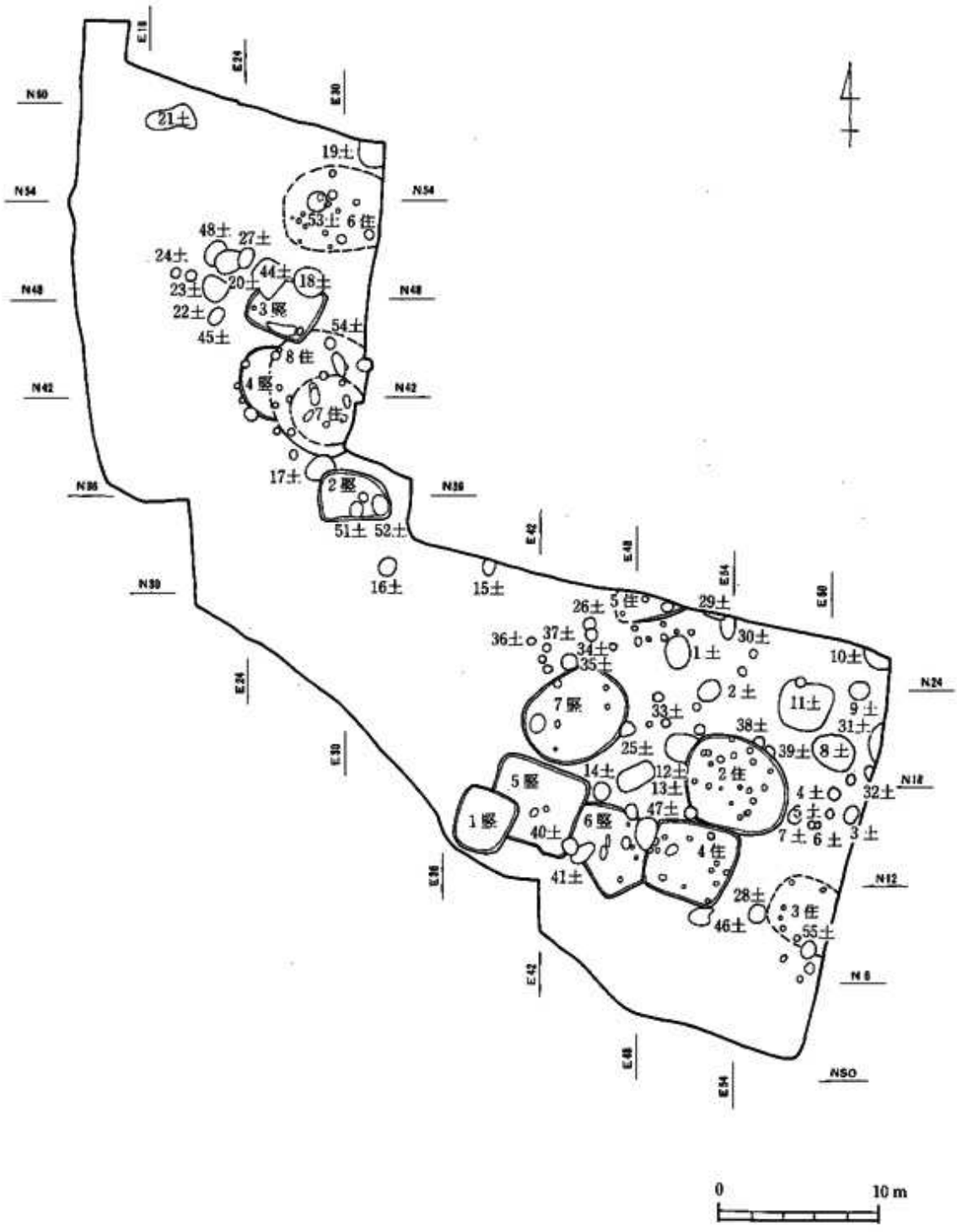
- 縄文土器（早期～後期）・弥生土器（中期～後期）・土師器（古墳時代後期、平安時代）
- 陶器　・陶磁器　・石器　・金属製品

③調査の成果

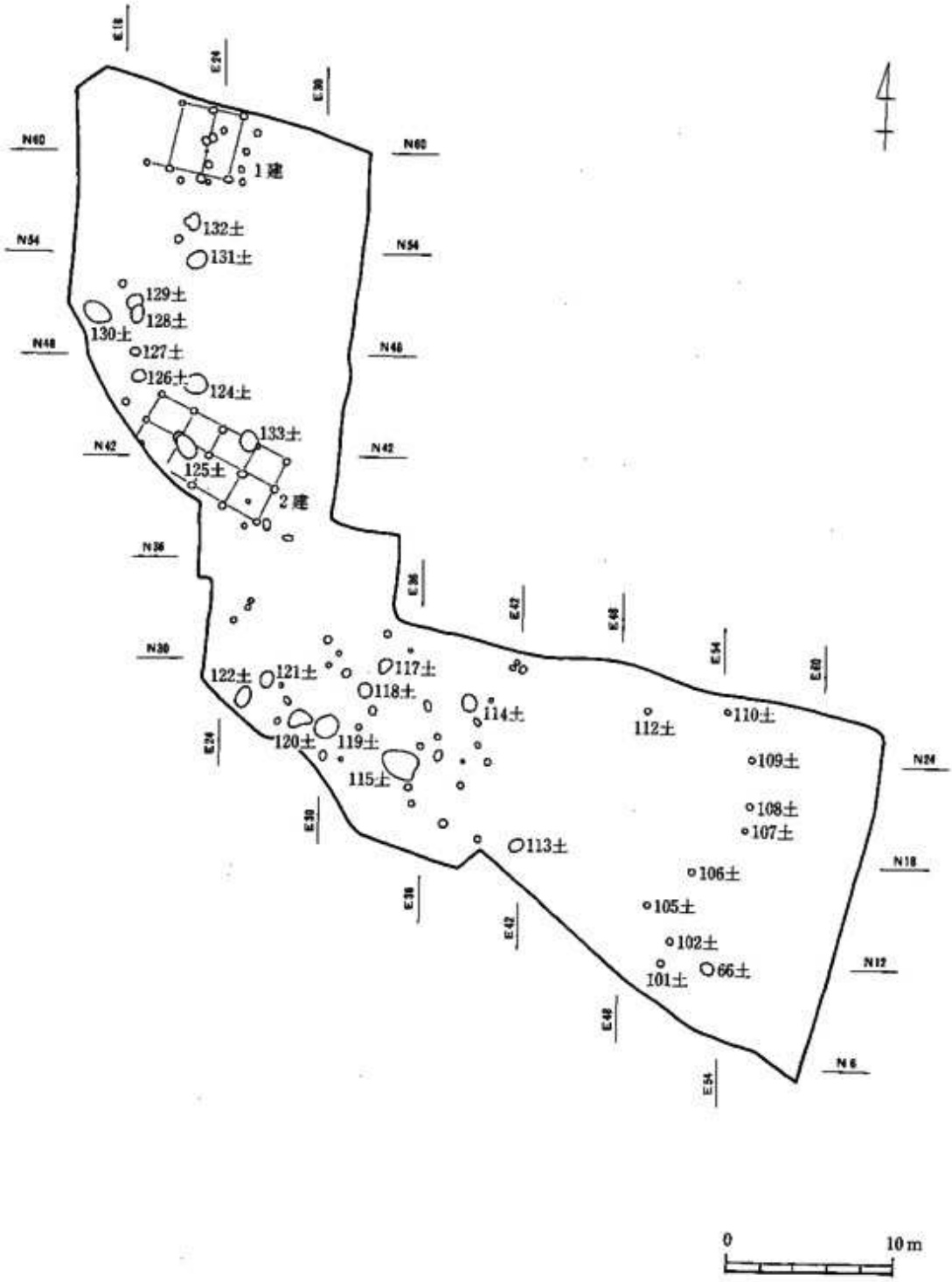
- 牛伏川の氾濫の痕跡と、それ以前の地形が把握できたこと。
- 縄文時代早期、後期の土坑を調査したこと。
- 弥生中期末の集落の一部を検出し、同時にその南限・西限が判明したこと。
- 古墳時代後期の住居址を調査したこと。
- 中世以降の墓址を調査したこと。


620.00m
620.60m
620.80m
A
619.80m
621.00m
621.20m
621.80m
622.00m
B'
A'
620.00m
620.20m
620.60m
620.80m
621.00m
B
0
10 m
A
A'
623.00m
I：耕作土
II：褐色土
III：漂層
IV：暗褐色土
V：褐色土(小礫少量混入)
VI：黒褐色土
VII(地山)：黄褐色土
B
B'
623.00m
0
5m

第5図　調査地基本土層




第6図　遺構配置(第1検出面)




第7図　遺構配置(第2検出面)

# 第2節　遺　　構

## 1．住居址

### ①第2号住居址（第8図）

**遺構**　本址は調査区の南東部、N 16～21・E 51～58に位置し、12・29・38土を切り、P 28に切られる。暗褐色土層中に炭化物を少量混入した黒褐色土の落ち込みとして、明瞭に検出できた。規模は7.0×5.9 m を測る楕円形を呈している。床面は砂質の黄褐色土で、礫が露出していた。ピットは $P_1$～$P_{20}$まで総数20個あり、このうち $P_5$・$P_{11}$・$P_{16}$と $P_8$～$P_{10}$のいずれか1つが位置・規模からみて、主柱穴と考えたい。炉は検出できなかった。しかし地山の砂質黄褐色土は、本遺跡の他の遺構をみても焼土の検出は難しく、あるいは見落としてしまった可能性もある。覆土にはコナラの炭化材(1)小片が検出面～底面にかけてみられることから、本址は焼失家屋の可能性がある。また東壁際には、10 cm 大の礫が10数個みられた。

**遺物**　土器と石器がある。検出面～床面にかけて全面に比較的多く出土した。土器には壺・甕・鉢、石器には磨製石鏃・打製石斧・打製石包丁・砥石等がある。遺物よりみて本址の時期は弥生時代中期末と考えたい。

註(1)：炭化材の材質については森義直氏に調査と鑑定をしていただいた。

### ②第3号住居址（第9図）

**遺構**　本址は調査地南東隅、N 8～13・E 57～62に位置し、東側は調査区域外へ続く。55土に南壁を破壊されている。検出時は2つの遺構の切り合いと考えていたが、掘り下げが進むにつれ、1軒の住居址と判明した。プランは東西に4.2×（4.0）m の長軸をもつ楕円形を推定する。炉は検出できなかった。床面はやや起伏があり北から南へ傾きをもつ。礫を含まない黄褐色土で、ピットは $P_1$～$P_6$があり、$P_1$・$P_2$・$P_3$・$P_4$は主柱穴の可能性がある。覆土は暗褐色土の単一の覆土で自然堆積であろう。

**遺物**　非常に少なく、弥生土器がある。遺物より所属時期は弥生時代中期末と考えたい。

### ③第4号住居址（第10図）

**遺構**　本址はN 11～17・E 49～55に位置し、2住の南側にある。西壁北側を47・50土に切られ、北側ではP 104に切られる。第1検出面の暗褐色土中に、わずかに礫・遺物が混入している範囲があり、サブトレンチを設定して本プランを推定した。規模は5.0×4.7 m を測り、隅丸方形のプランを呈する。床面は礫を多量に露出する黄褐色土で、起伏があり、北→南へ傾きをもつ。本址に伴う施設はピットが総数13個が検出された。いずれも掘り込みは比較的浅く、主柱穴とは考え難い。また焼土の拡がり等も認められなかった。覆土は礫が多量に混入する暗褐色土の単層であった。

**遺物**　非常に少ないが、弥生時代中期の土器があり、本址の所属時期もそこに求めたい。

④第5号住居址（第9図）

**遺構**　調査地中央東、N 29～31・E 47～52に位置し、北側は区域外へ続いている。黒褐色土中に同色だが、小礫・黄褐色土粒が少量混入する拡がりがあり、サブトレンチを設定してプランを推定した。平面形は方形を呈すると思われ、規模は東西4.3 m 以上、南北1.5 m 以上である。床面は黄褐色土で、礫はほとんど含まない。平坦・堅固で良好な状況であった。調査範囲内ではカマドは確認されなかった。ピットは3個検出されたが、その性格は不明である。覆土は暗褐色土、黒褐色土の順で堆積しており、小礫が混入していた。遺物は南西隅の床面上より壺等が出土している。

**遺物**　比較的多くの土師器が出土している。土師器には小形の甕、壺等がある。遺物よりみて本址の所属時期は古墳時代後期である。

⑤第6号住居址（第10図）

**遺構**　調査区の北端、N 50～56・E 27～33に位置し、東側は区域外に続く。西側を53土に床面下迄切られる。サブトレンチを設定し、黒褐色土中に小礫を少量混入する暗褐色土の落ち込みとしてプランを推定した。規模は東西8.9 m 以上、南北5.0 m を測り、平面形は楕円形を呈する。床面は黒褐色土で軟らかく、やや起伏がある。ピットは総数15個を確認した。$P_{3,7,14}$の3個は深さが30 cm 以上あるが、位置的に主柱穴とは考え難い。炉は床面中央北側に隣接して、炉1～3の3個を確認した。いずれも地床炉で、円～楕円形を呈している。浅く掘り込まれており、焼土が堆積していた。それぞれの新旧関係については不明である。遺物の出土状況については、5～10 cm 大の礫と共に、壺・甕等の土器片が西側床面上に散乱していた。

**遺物**　比較的多く、土器片を中心に石器も出土している。遺物よりみて本址の所属時期は弥生時代中期である。

⑥第7号住居址（第11図）

**遺構**　調査区の北側、N 39～44・E 27～32に位置し、東側は調査区域外へ続く。8住の覆土中にすっぽり掘り込まれている。当初はそれとは気付かず1軒の住居址として掘り下げてしまった。規模は南北4.7 m、東西4.1 m 以上を測り、平面形は円形を呈す。床面は礫を含まない黄褐色土で、平坦・堅固な状況であり、8住とほぼ同じ深さ迄掘り込まれている。本址の床面の範囲には8個のピットがあるが、7・8住いずれの住居址に伴うピットなのかは、覆土の違い等からは判断できなかった。このため7・8住のピットについては通し番号を付けてある。炉は確認できなかったが、中央西寄り直径20 cm 程の焼土の拡がりが認められた。覆土下層～床面にかけては多量の土器片が散乱していた。本址は主柱穴、炉が確認されず、あるいは竪穴状遺構として据えるべきなのかもしれない。

**遺物**　弥生土器と石器がある。遺物よりみて本址は弥生時代後期に属すると思われる。

⑦第8号住居址（第11図）

**遺構**　N 38～46・E 26～32に位置し、東側は区域外へ続く。他遺構との新旧関係は7住、17・42・54土、P 29・31～33に切られている。規模は南北7.7 m、東西5.8 m 以上を測り、平面は楕円形を呈

する。底面は礫を含まない黄褐色土で、平坦だが堅固な状況であった。覆土は褐色～暗褐色土が堆積していた。遺物は土器を中心に床面上に多くみられ、東側では壺（第25図—68）が正位で出土している。

**遺物**　弥生土器と石器がある。弥生土器は壺・甕・鉢等、石器には打製石鏃・磨製石鏃・砥石がある。本址は遺物よりみて弥生時代中期に属する。

## 2．竪穴状遺構

①第1号竪穴状遺構（第12図）

**遺構**　調査地南端、N 14～19・E 38～42に位置する。北東部で5竪を切っている。南北3.9 m、東西3.4 m を測り、平面形は隅丸長方形を呈する。長軸方向はN-15°-E を指す。旧自然地形は周辺から南西方向に傾斜しており、本址の底面も同じ傾きをもつ。覆土の黒褐色土には多量の礫が混入していた。

**遺物**　非常に少ないが内耳鍋等が出土している。遺物よりみて本址は中世以降に属するものだろう。

②第2号竪穴状遺構（第12図）

**遺構**　調査地中央、N 35～38・E 29～34に位置し、51・52土を貼る。東西4.6 m、南北3.1 m を測り、平面形はやや不整な隅丸長方形を呈する。N-90°-E に長軸方向を指す。底面は礫を含まない黄褐色土で、平坦・堅固な状況であった。中央東寄りに $P_1$(64×48× 9 cm)があるが、性格はわからない。覆土は黒褐色土の単層であった。

**遺物**　少ないが、弥生土器・石器がある。遺物よりみて本址は弥生時代中期と考えられる。

③第3号竪穴状遺構（第13図）

**遺構**　調査区北側、N 46～50・E 24～30に位置し、18・44土、P 26に切られる。東西4.0 m、南北3.4 m を測り、不整な方形を呈する。黄褐色土の底面は礫を露出し、起伏がある。ピットは2個ある。南壁直下に比較的規模の大きい $P_1$ (192×64× 8 cm) があるが、その性格は不明である。覆土の暗褐色土中には礫が混入していた。

**遺物**　非常に少ない。弥生土器少量があり、本址の時期は弥生時代中期と考えられる。

④第4号竪穴状遺構（第13図）

**遺構**　調査区北側、N 41～45・E 24～26に位置し、8住に東側を切られるほか、西側の壁をP 106～108に切られている。本址は暗褐色土の地山に同色だがやや砂質の拡がりとして検出した。規模は東西4.0 m、南北2.0 m 以上を測り、平面形は円形と推定される。ピットは $P_1$ があるが性格はわからない。本址は竪穴状遺構として扱ったがあるいは人為的な遺構ではない可能性もある。

**遺物**　ほとんどないが弥生土器片がある。所属時期は新旧関係から弥生時代中期以前といえる。

⑤第5号竪穴状遺構（第12図）

**遺構**　調査区南側、N 14～21・E 40～46に位置し、南東隅を１竪、東壁を40土に切られる。地山の暗褐色土中に礫が多量に混入する拡がりがあり、サブトレンチを十文字に設定して、方形プランを推定した。規模は南北5.5 m、東西5.0 m を測る。暗黄褐色の底面には、多数の礫が露出している。ピットは中央に２個あるが性格はわからない。覆土は礫が多量に混入する暗褐色土の単層である。

**遺物**　弥生土器が少量出土している。遺物よりみて本址は弥生時代中期に属する。

⑥第６号竪穴状遺構（第14図）

**遺構**　調査区南側、N 12～18・E 44～49に位置し、大形の遺構では東側を４住、西側を５竪に切られ、小形のものでは40・41・47・50土とＰ13に切られている。旧自然地形では台地上の端部にあたる。地山の暗褐色土中にそれよりやや黒っぽい拡がりがあり、サブトレンチを設定し、不整形のプランを推定した。規模は南北5.8 m、東西4.5 m を測る。起伏のある黄褐色土の底面には、多量の礫が混入していた。ピットは７個検出したが、性格はわからない。暗褐色の覆土中には10～20 cm 大の礫が多量に含まれていた。

**遺物**　弥生土器少量が出土している。遺物よりみて本址の時期は弥生時代中期に属する。

⑦第７号竪穴状遺構（第14図）

**遺構**　調査区中央東、N 20～26・E 42～48に位置する。切り合い関係は25土に切られる。地山の暗褐色土中に黒褐色土の落ち込みがあり、サブトレンチを設定してプランを推定した。平面プランは楕円形を呈し、規模は長径6.4 m、短径5.3 m を測る。黄褐色土の底面は起伏があり、東から西へ傾きをもつ。ピットは６個あるが、柱痕が認められるものはなかった。焼土の拡がりも認められなかった。覆土北側は多量の10 cm 大の礫が底面に接した状態で認められ、土器は覆土上層に若干みられた。

**遺物**　非常に少ないが弥生土器がある。本址は遺物よりみて弥生時代中期に属する。

### ３．掘立柱建物址

①第１号掘立柱建物址（第15図）

調査区中央西 N 35～42・E 19～28に位置する。礫の混入する黄褐色土中に検出した。切り合い関係は125・133土に切られている。西側は調査区域外へ続くと思われる。東西４間（8.7 m）×南北２間（4.0 m）のかなり細長い長方形の総柱式建物で、長軸方向は N-63°-W を示す。柱間寸法は桁行2.1～2.2 m、梁行1.7～2.2 m を測る。ピットは総数12個確認された。掘り方の平面形はほとんどが直径40 cm 前後の円形を呈している。断面形は方形あるいは三角形を呈している。柱痕については確認することができなかった。遺物はほとんど出土しなかった。所属時期は不明である。

②第２号掘立柱建物址（第16図）

調査区北端西 N 54～60・E 19～25に位置し、切り合い関係ではＰ107にＰ８を切られている。東

西2間（3.7m）×南北1間（4.0m）のほぼ正方形を呈す。主軸方向はN-80°-Wを示す。ピットは総数8個認められた。中央にはP 8があるほか、南側梁の延長線上西側にP 7がある。掘り方は円形と楕円形を呈し、直径38～74 cmを測る。柱痕は検出されず、全てのピットに小礫が多量に混入する黒褐色土が堆積していた。遺物はほとんど出土しておらず、所属時期は不明である。

### 4．土坑（第17～20図）

今回の調査では第1検出面で54個、第2検出面で33個の土坑が確認された。出土した遺物から時期の推定される土坑は少ないが、(1)縄文時代早期(2)縄文時代後期(3)弥生時代(4)平安時代(5)中世以降に属するものが僅かではあるが認められた。以下、時期別に述べていきたい。

#### (1)縄文時代早期

①第1号土坑（第17図）

調査区中央東N 26～28・E 52～54に位置する。他遺構との切り合い関係はない。地山の暗褐色土中に小礫を伴う黒褐色土の落ち込みとして検出した。平面形は楕円形を呈し、南北212 cm、東西154 cmを測る。検出面からの掘り込みは25 cmである。壁はなだらかに掘り込まれ、壁と底の区別がつきにくい。底面は小礫の露出した黄褐色土で起伏があり、軟弱であった。遺物の出土状況は、多量の礫が底面に接して認められ、土器片は検出面～底面にかけて若干みられた。土器（第22図－7・9・10）は縄文時代早期のもので、所属時期もそこに求めたい。今回の調査で確認された唯一の縄文時代早期の遺構である。

#### (2)縄文時代後期

①第51号土坑（第19図）

調査区中央N 36～37・E 31～32に位置し、2竪の底面精査の際検出した。平面形は不整な楕円形を呈し、南北99 cm、東西82 cmを測り、2竪底面からの掘り込みは20 cmである。壁は傾きをもって掘り込まれ、黄褐色土の底面は中央に向かって徐々に深くなっている。底面には、細かく割れていたが原形を保った土器が、逆位に伏せた状況で確認された。又、10 cm大の礫3個もこの土器と共に出土している。土器（第21図－3）は後期に属するもので、出土状況から甕被葬土坑墓と考えられる。

②第52号土坑（第19図）

2竪の底面精査の際、51土の東50 cmに検出した。平面は円形を呈し、長径143 cm、短径108 cm、2竪底面からの掘り込みは43 cmを測る。掘り込みは北側では緩やかな傾斜があるが、南側はほぼ直に掘り込まれている。底面は平坦な黄褐色土であった。覆土は暗褐色土の単層で、検出面～底面直

上にかけて少量の炭化材が混入していた。遺物は5～10 cmの河原石が底面中央にあり、比較的多くの土器の破片が、覆土上層～底面直上にかけて出土した。遺物よりみて縄文時代後期のものと思われる。

### (3)弥生時代

①第21号土坑（第17図）

調査区北端、N 58～60・E 21～22に位置する。他遺構との切り合い関係はない。平面形は不整な楕円形を呈する。東西127 cm・南北283 cmを測り、検出面からの掘り込みは37 cmである。壁は傾きをもって掘り込まれ、断面は台形を呈す。底面は礫が多量に混入する黄褐色土で、起伏がある。遺物は非常に少ないが、弥生土器の壺の破片が出土している。同時期のものと思われる土坑は少ないが他に2土等がある。

### (4)平安時代

①第16号土坑（第17図）

調査地中央、N 32～33・E 36～37に位置する。礫が多量に混入する黄褐色土中に検出した。平面は120×110 cmの円形プランを呈し、検出面よりの掘り込みは22 cmを測る。断面は皿形を呈し、礫の多量に混入する黒褐色土が堆積していた。遺物は覆土の中層から土師器坏の破片が若干出土している。類似する平安時代の土坑には46土等がある。

### (5)中世以降

①第22号土坑（第18図）

調査区北側、N 49～50・E 22～24に位置する。他遺構の切り合い関係はない。平面形は不整円形を呈し、東西192 cm、南北166 cm、検出面からの掘り込みは27 cmを測る。礫の混入する黄褐色土中に掘り込まれ、断面は皿形を呈す。覆土は暗褐色土の単層で、10～30 cm大の河原石が底面上に認められた。遺物には銭貨3点（第32図－4～6）と、朱・漆の付着した陶器の山茶碗（第28図－135）が底面中央より出土した。遺物は副葬品で、本土坑は墓址と考えられる。

②第25号土坑（第18図）

調査区北側、N 23・E 48に位置し、7竪を貼っている。平面は三角形に近い感の円形を呈し、東西97 cm、南北94 cmを測る。断面形は舟形を呈し、中心が最も深くなっている。覆土には焼土、暗褐色土の順で堆積している。覆土中からは多量の骨片・炭化材とともに銭4点（第32図－7～10）が出土した。骨片は人間の頭骨の小片を含むほぼ全身の骨の細片であり、1個体分とみなされる(1)。これらのことより本土坑は中世以降の火葬墓と考えられる。

③第132号土坑（第20図）

調査区北側、N 53～55・E 24～26に位置する。平面形は長方形を呈し、長辺の西側中央に突出部がある。規模は南北193 cm、東西175 cm を測り、検出面からの掘り込みは37 cm である。壁は傾きをもって掘り込まれ、断面は三角形に近い。底面・床面はいずれも被熱が認められなかった。覆土は暗褐色土が堆積しており、多量の炭化物、骨片、少量の土器が底面よりかなり浮いて出土した。骨片は被熱した人骨で、頭骨、大腿骨、男性的な形態を示す長骨の厚い骨壁、腸骨の一部が認められた(2)。本土坑は平面形、遺物の出土状況等からみて、25土と同じく中世以降の火葬墓と考えられる。

註(1)(2)：骨片については信州大学の西沢寿晃氏に調査と鑑定をしていただいた。

## 5．その他

今回の調査では遺構の覆土と第1検出面が類似しており、その存在を明確にできなかった遺構があったと考えられる。掘り込みの浅い遺構は遺構の検出が容易な黄褐色土中まで掘られていなかった。そのため第1検出面での遺構検出は非常に難しく、プランの確定が困難な部分ではサブトレンチを設定して検出を試みたが、数箇所では遺構の種類・プラン等はわからずじまいだった。このうち第1検出面のE 30～48・N 24～33周辺では、黒褐色土中より比較的まとまった状態で遺物が出土している。出土遺物は土師器の坏・甕等（第28図—130～132）があり、遺物よりみて7～8期に属する住居址あるいは竪穴状遺構等の大型の遺構があったのであろう。

## 第1表　遺構一覧表

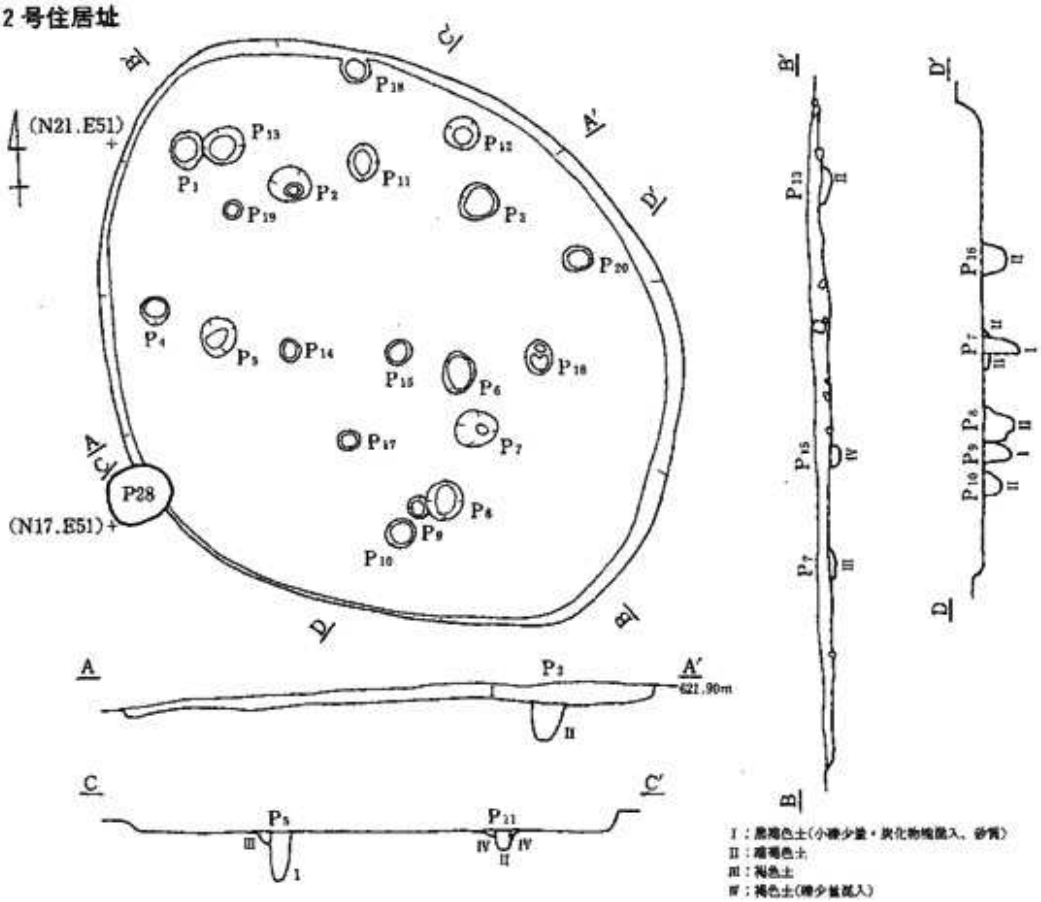
### 1．住居址

| 遺構No. | 図No. | 長軸方向 | 平面形 | 規模 長軸×短軸 m | 規模 深さ cm | 規模 床面積 m² | 所属時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 2 | 8 | 不　明 | 楕円形 | 7.0 × 5.9 | 17 | 30.0 | 弥生中期末 | 12・29・38土を切り、P28に切られる。炭化材多量出土 |
| 3 | 9 | 不　明 | 楕円形？ | 4.2 ×(4.0) | 14 | (15.0) | 弥生中期末 | 55土に切られ、東半分は区域外へ続く |
| 4 | 10 | 不　明 | 隅丸方形 | 5.0 × 4.7 | 16 | 22.9 | 弥生中期末 | 47・50土、P104に切られる |
| 5 | 9 | 不　明 | 方形？ | (4.3 × 1.5) | 14 | ( 5.5) | 古墳中期 | 北側大半は区域外へ続く |
| 6 | 10 | N-90°-E | 楕円形 | (8.9)× 5.0 | 9 | (26.4) | 弥生中期末 | 53土に切られる |
| 7 | 11 | 不　明 | 円　形 | 4.7 ×(4.1) | 20 | (15.2) | 弥生後期初 | 8住を切る |
| 8 | 11 | 不　明 | 楕円形 | 7.7 ×(5.8) | 30 | (36.4) | 弥生中期末 | 7住、17・42・54土、P29・31～33に切られる |

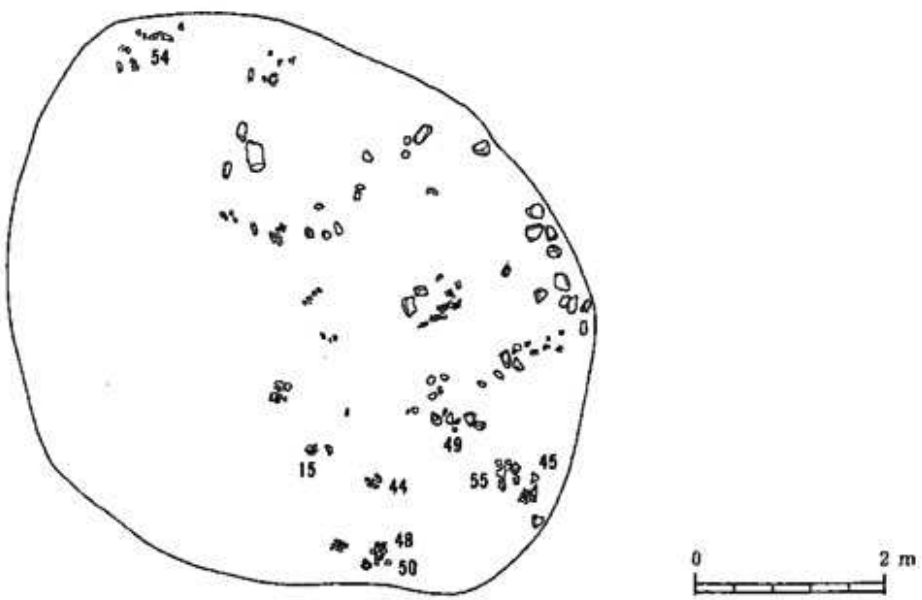
### 2．竪穴状遺構

| 遺構No. | 図No. | 長軸方向 | 平面形 | 規模 長軸×短軸 m | 規模 深さ cm | 規模 床面積 m² | 所属時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 12 | N-15°-E | 隅丸長方形 | 3.9 × 3.4 | 34 | 12.2 | 中世以降 | 5竪を切る |
| 2 | 12 | N-90°-E | 隅丸長方形 | 4.6 × 3.1 | 22 | 12.1 | 弥生中期 | 51・52土を貼る |
| 3 | 13 | N-67°-E | 不整方形 | 4.0 × 3.4 | 30 | 13.2 | 弥生中期 | 18・44土、P26に切られる |
| 4 | 13 | 不　明 | 円　形 | 4.0 ×(2.0) | 14 | ( 6.9) | 不　明 | 8住、P105～108に切られる |
| 5 | 12 | N-20°-E | 方　形 | 5.5 × 5.0 | 30 | (23.6) | 弥生中期 | 竪1、土40に切られる |
| 6 | 14 | 不　明 | 不　明 | 5.8 × 4.5 | 24 | (18.8) | 弥生中期 | 4住、5竪、40・41・47・50土、P13に切られる |
| 7 | 14 | N-65°-E | 隅丸長方形 | 6.4 × 5.3 | 32 | (28.2) | 弥生中期 | 25土に切られる |

第２号住居址

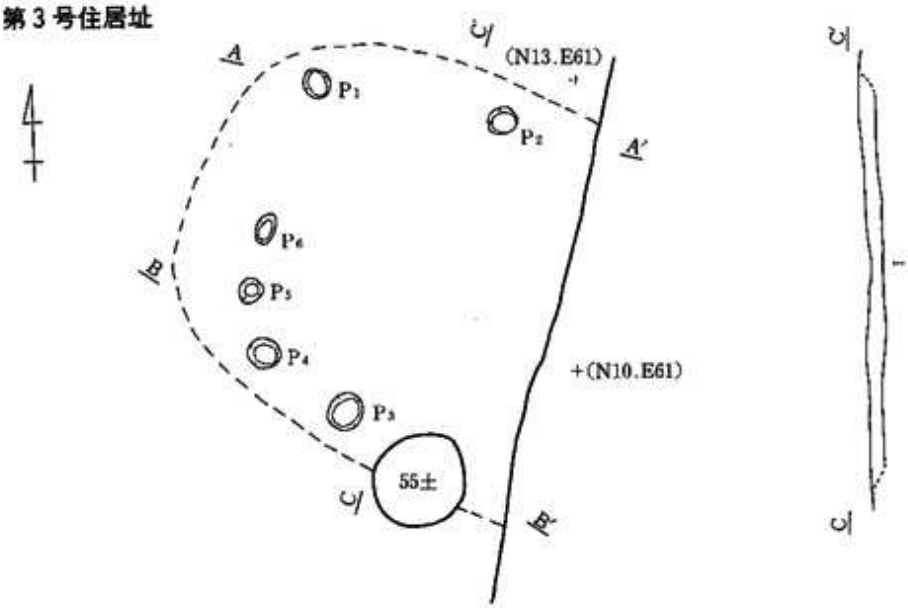



遺物出土状況

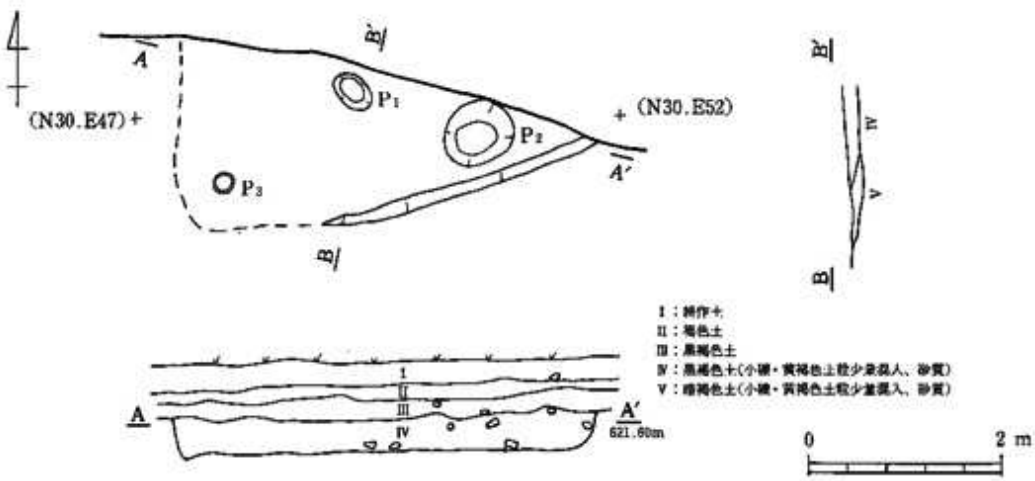



第８図　第２号住居址

第３号住居址

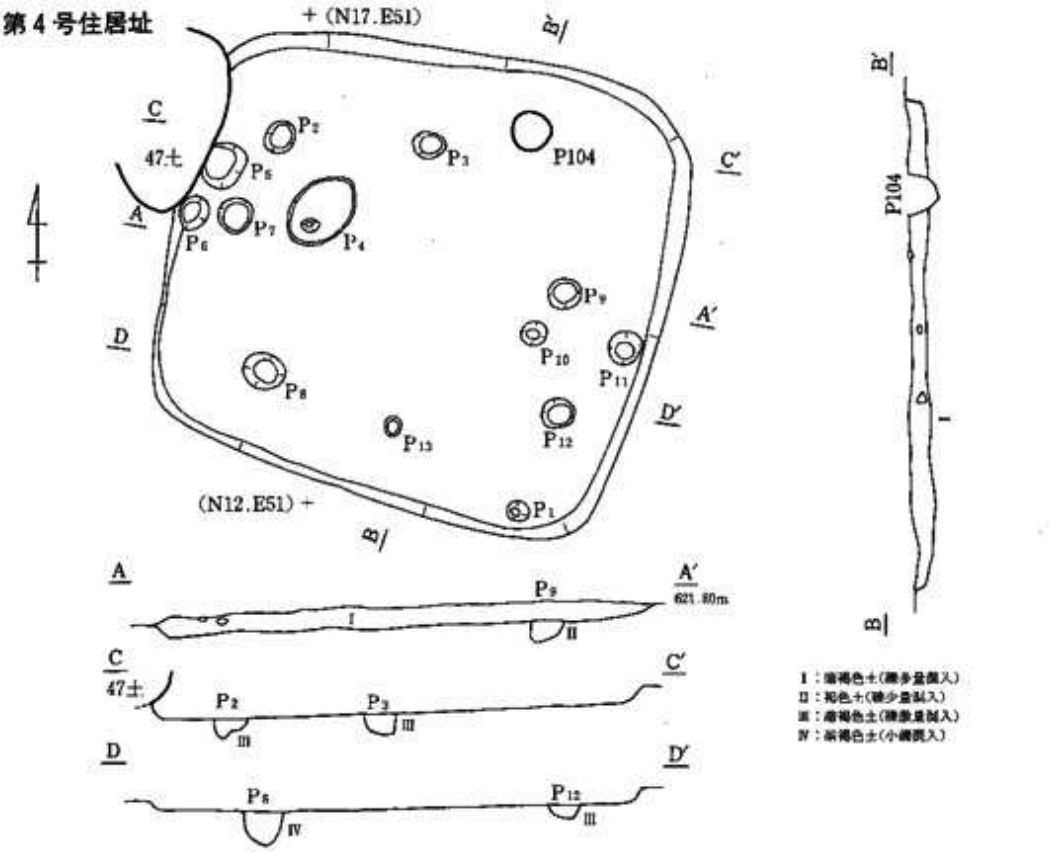



第５号住居址




第９図　第３・５号住居址

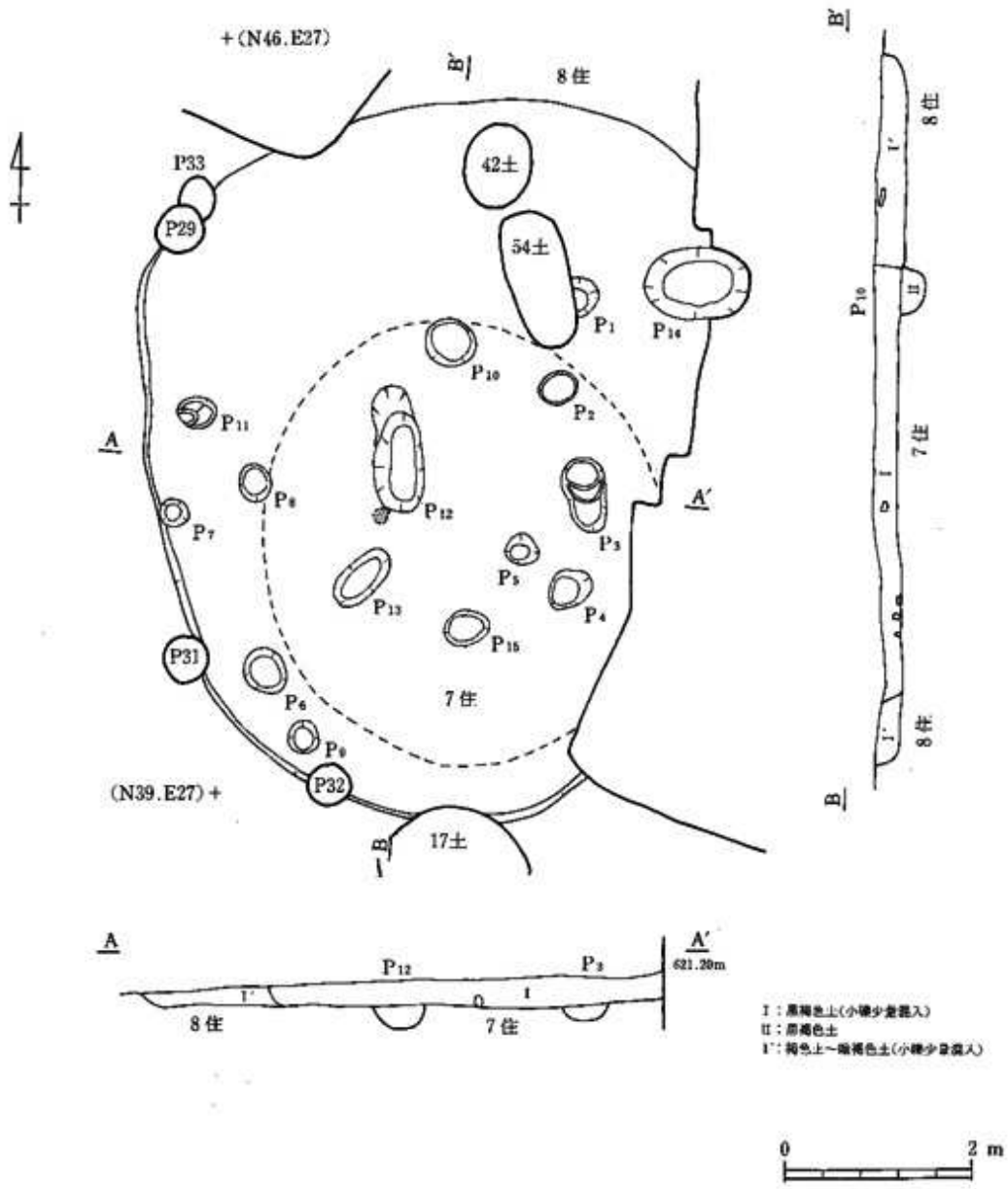
第4号住居址




第6号住居址

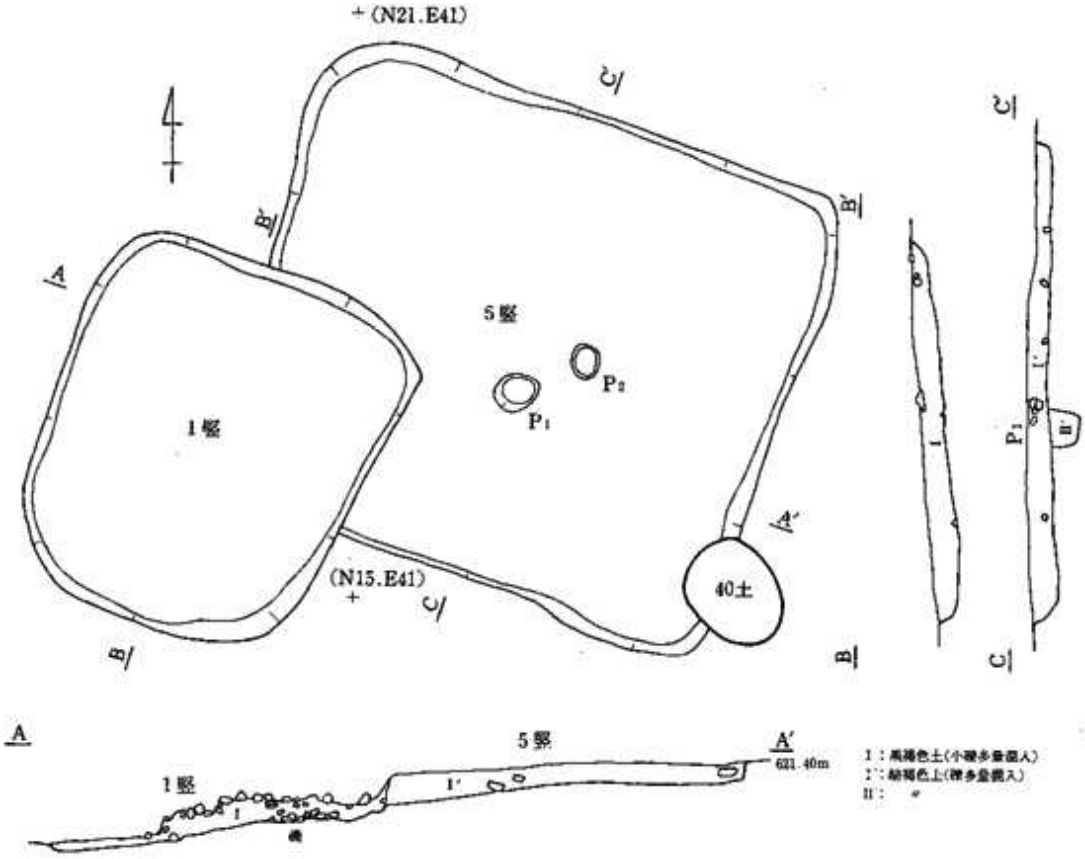
第10図　第4・6号住居址

## 第７・８号住居址

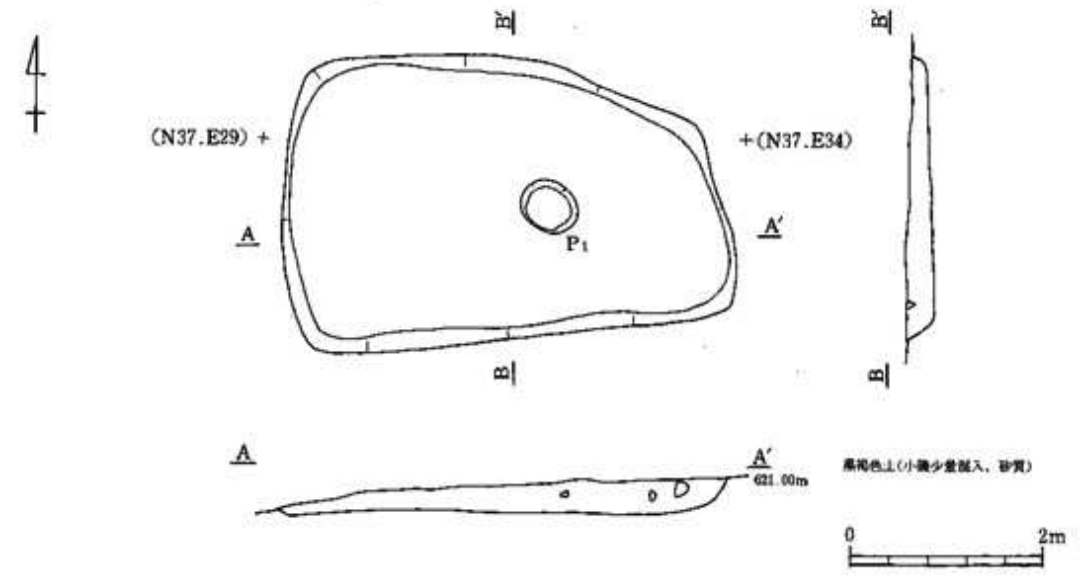



第11図　第７・８号住居址

**第１・５号竪穴状遺構**

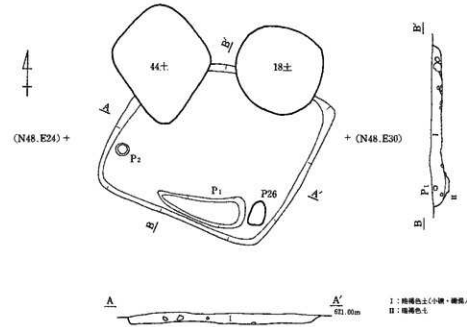



**第２号竪穴状遺構**

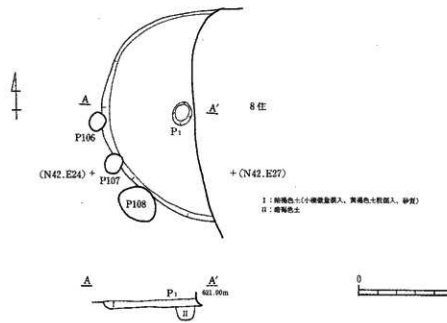



**第12図　第１・５・２号竪穴状遺構**

**第３号竪穴状遺構**

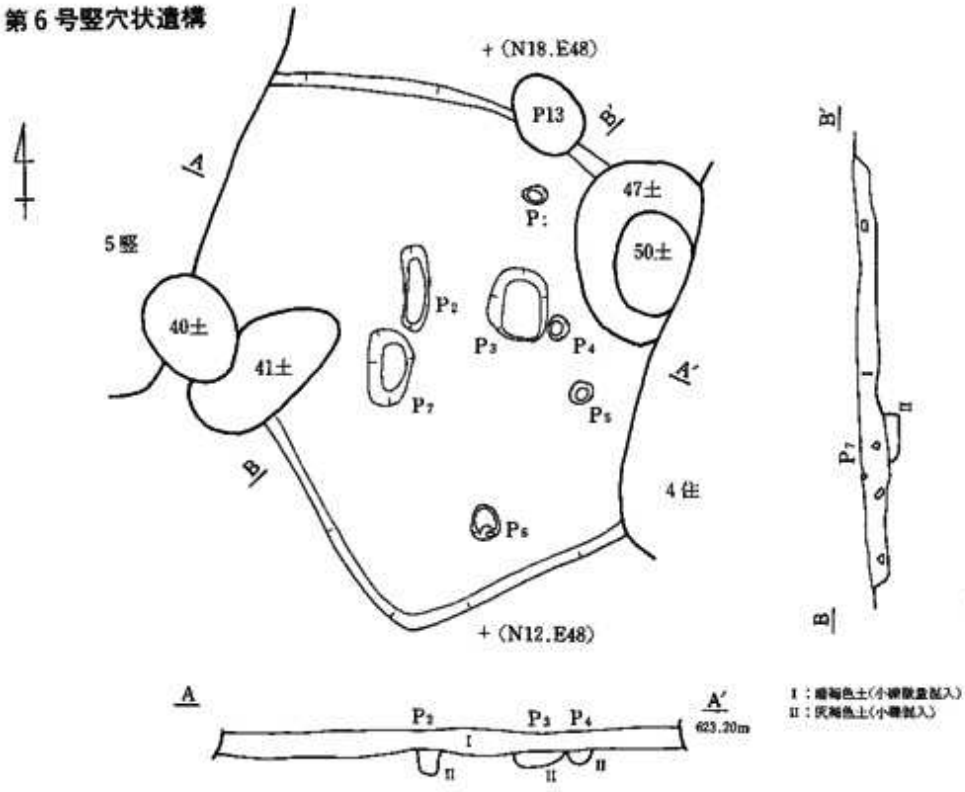



**第４号竪穴状遺構**

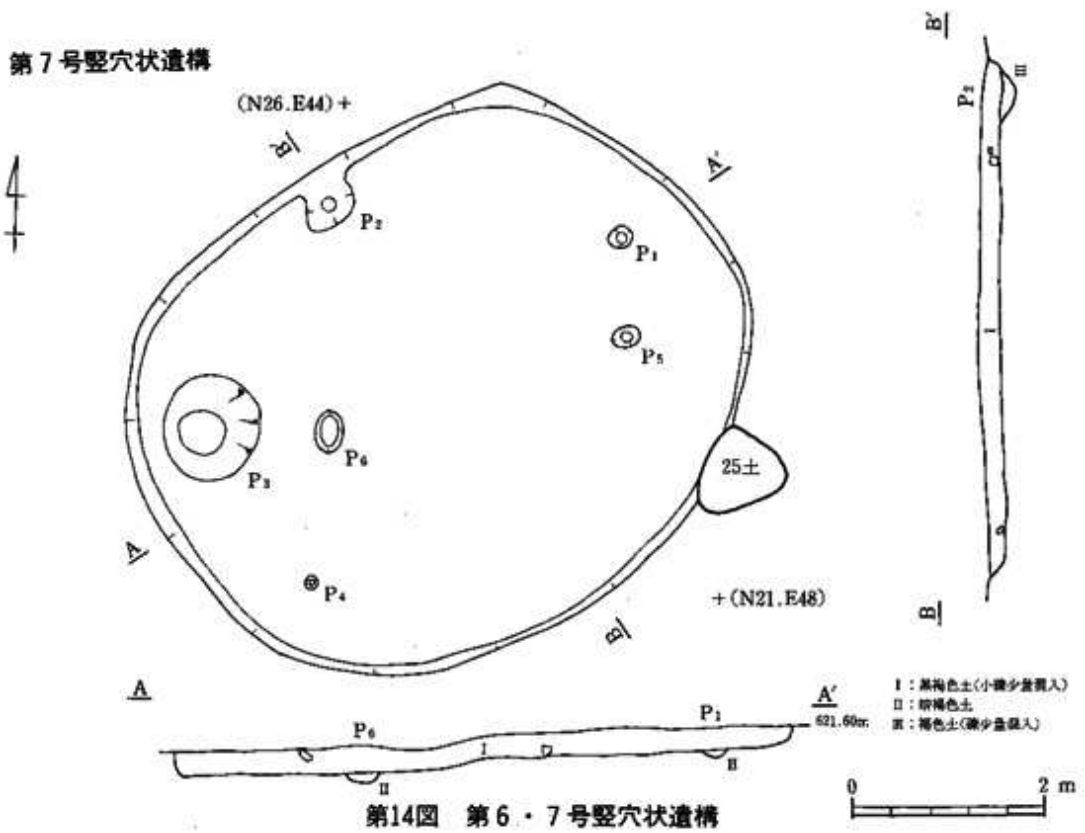



**第13図　第３・４号竪穴状遺構**

第６号竪穴状遺構

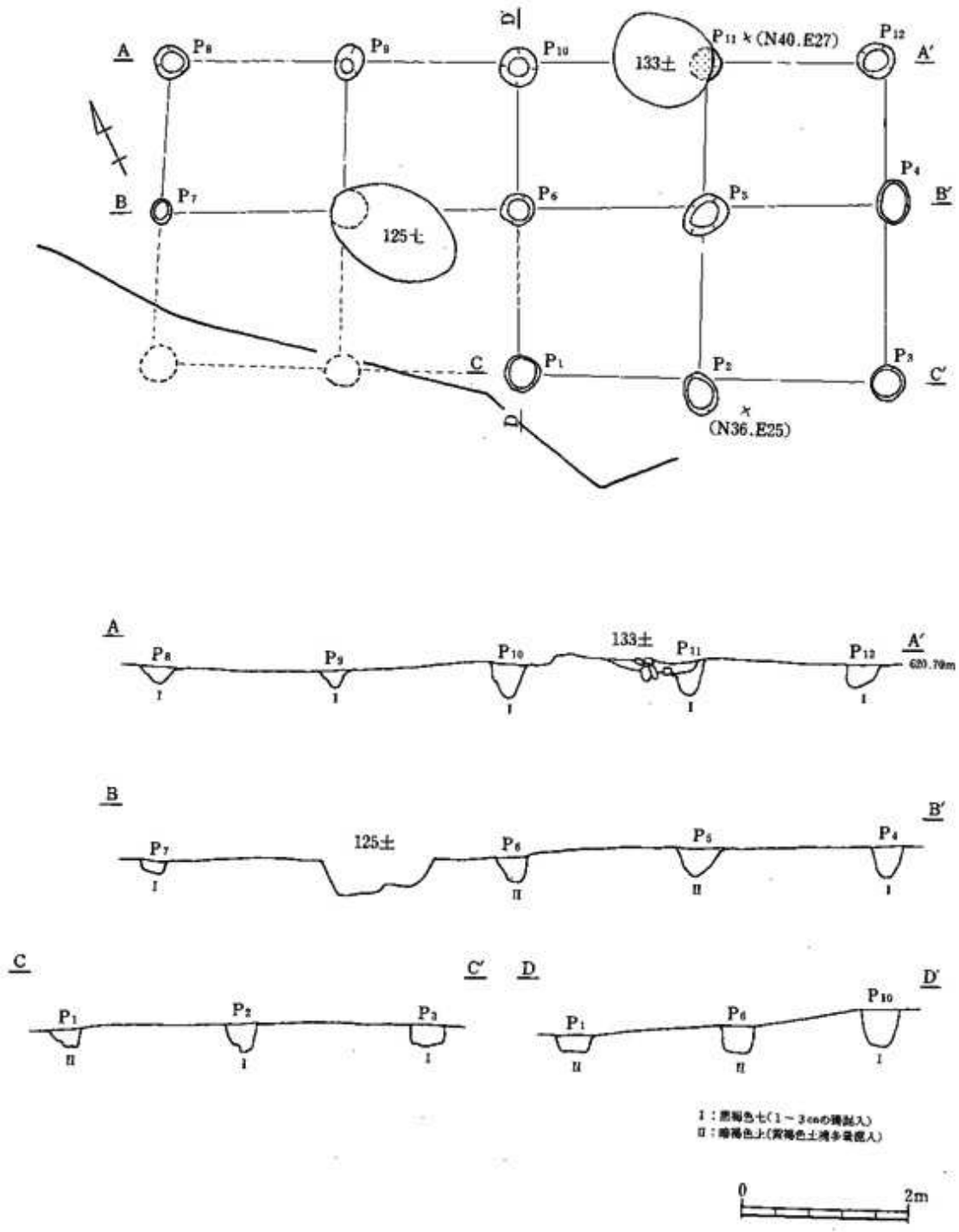



第７号竪穴状遺構



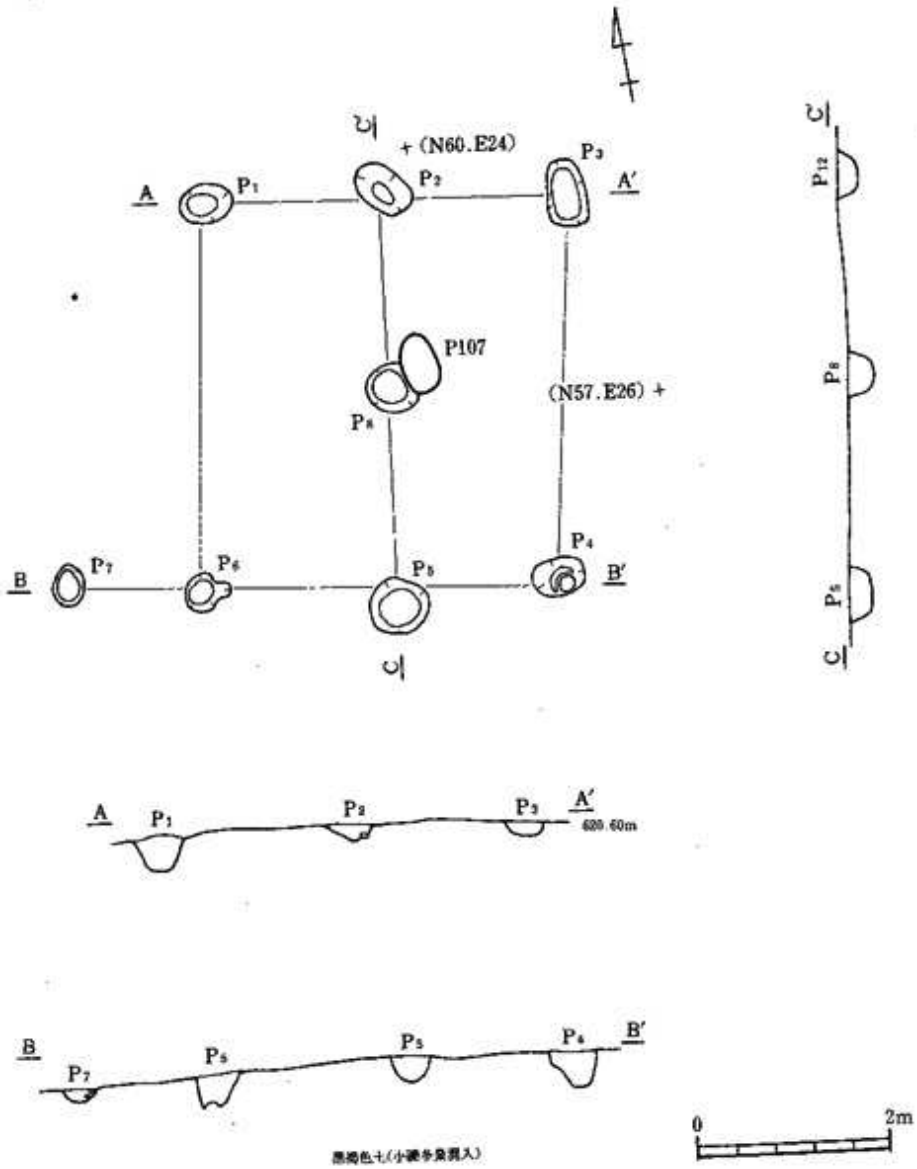

第14図　第６・７号竪穴状遺構

第１号掘立柱建物址



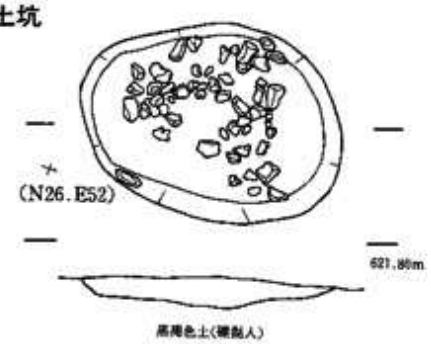

第15図　第１号掘立柱建物址

第２号掘立柱建物址

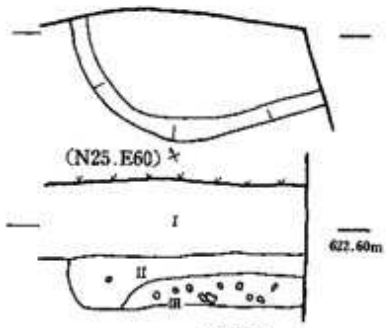



第16図　第２号掘立柱建物址

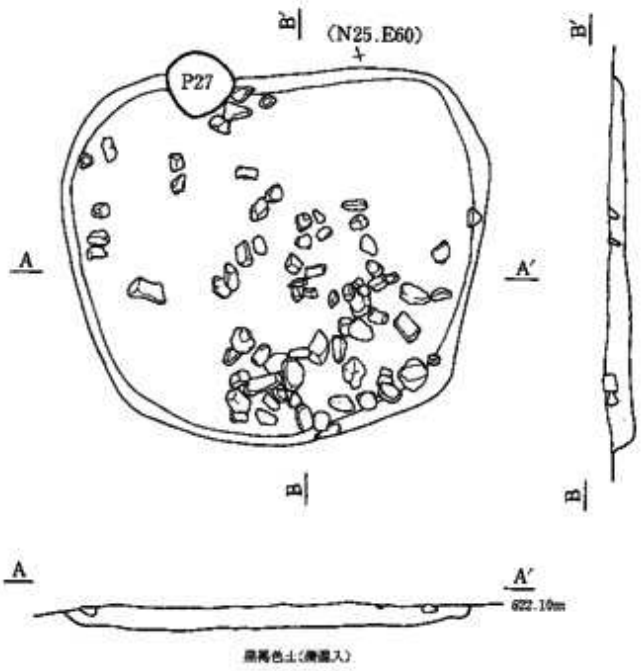
第１号土坑



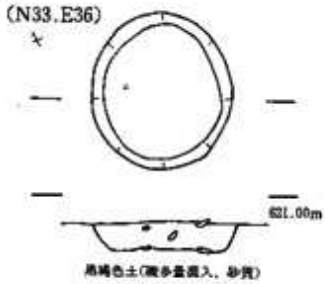

第10号土坑



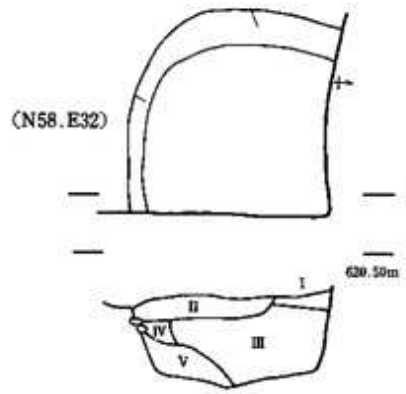

第11号土坑



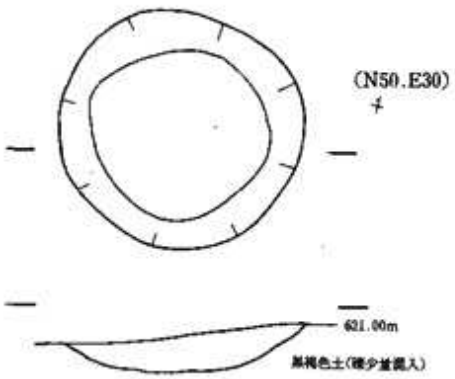

第16号土坑



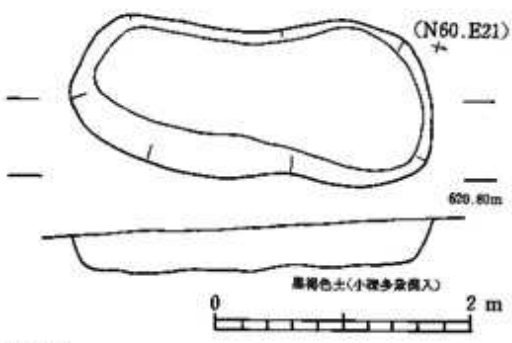

第19号土坑




第18号土坑

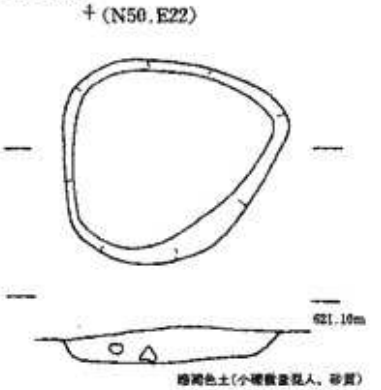



第21号土坑

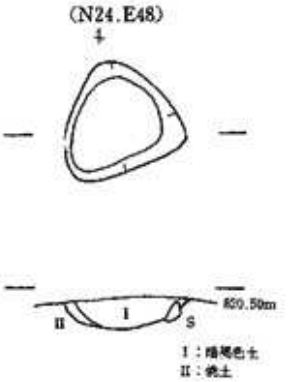



第17図　土坑(1)

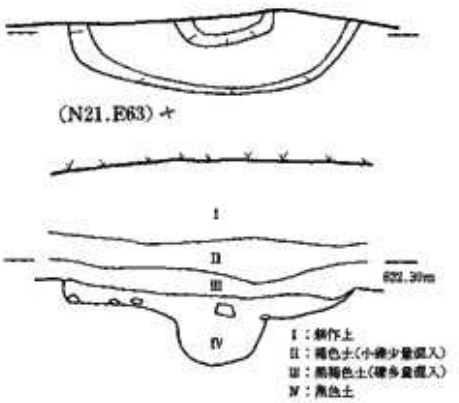
第22号土坑



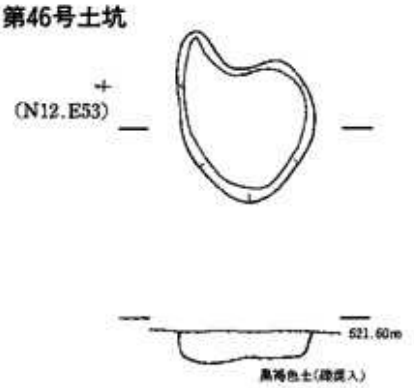

第25号土坑



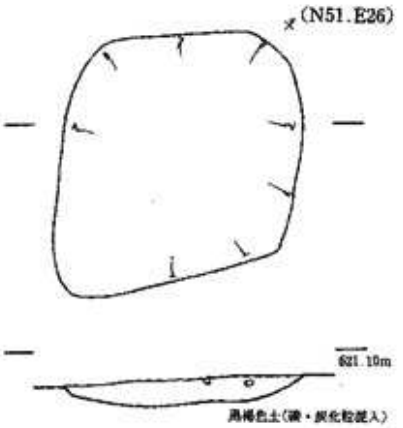

第31号土坑



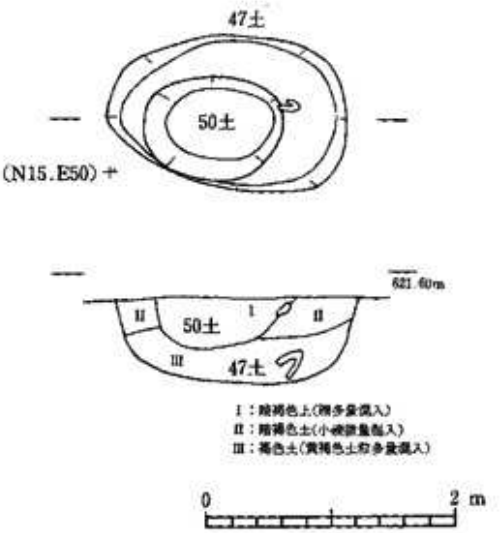

第46号土坑




第44号土坑

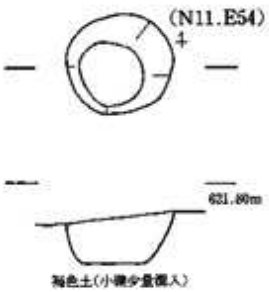



第47・50号土坑

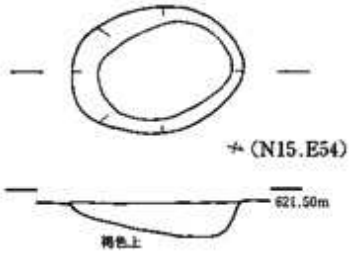



第18図　土坑(2)

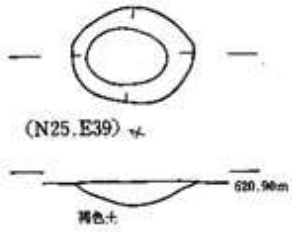
第104号土坑



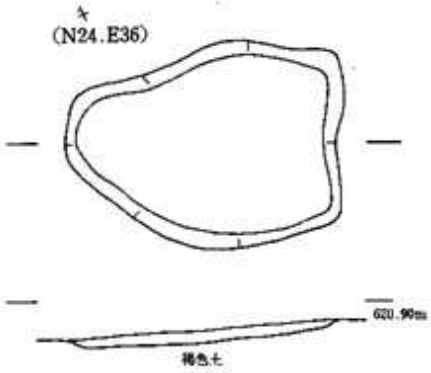

第105号土坑



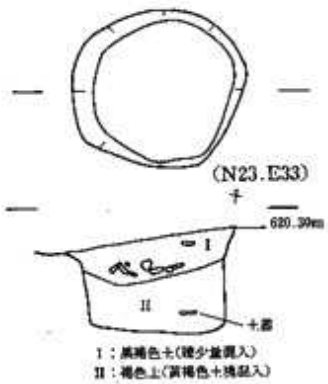

第114号土坑



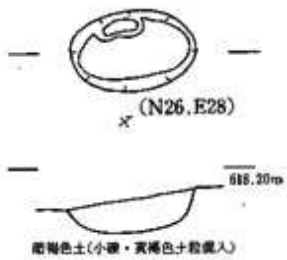

第115号土坑



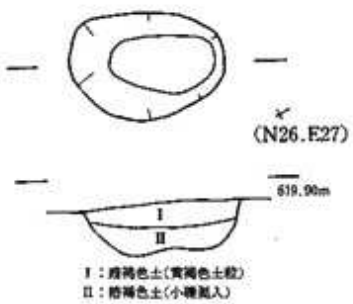

第119号土坑



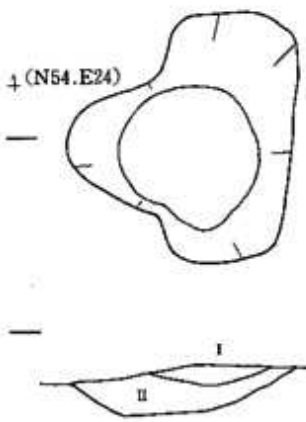

第121号土坑



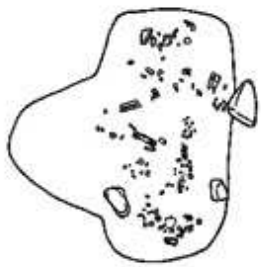

第122号土坑

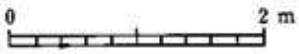



第132土坑




遺物出土状況






第20図　土坑(4)

## 第3節　遺　　物

### 1．土器・陶器

#### (1)縄文時代の土器（第21・22図）

今回の調査では縄文時代早期～晩期末の遺物が出土している。このうち早期および後期に帰属するものは大半が当該期の遺構に伴うものであり、他に比べて残存度が高い。晩期については遺構の検出こそないものの、量的にはややまとまっている。以下、時期毎にその概要について触れたい。

**①早期の土器（7～10）**

1土および51土から細久保式に比定される押型文土器が出土しており、4点を拓影にて示した。7は唯一器形の窺えるもので、上半部がゆるく外開する深鉢である。外面は幅3.6cmの楕円文原体を横位に密接施文する。残存部分では4段が確認され、下位から上位へ施文が行われる。器肉はやや厚く、口縁端部は面を有する。胎土は石英、長石の細粒を多く含む。8～10も楕円文を施す肉厚な深鉢体部の小片である。8・10は斜位、9は横位に回転押捺される。

**②中期の土器（11～13）**

3点を拓影で示した。13は中葉、11・12は後葉に位置付けられる深鉢の体部破片である。13は波状隆帯に沿う幅広の押引文、11は縦位の条線文、12は綾杉状沈線文を有する。

**③後期の土器（1～6、14～22）**

2竪、51・52土等から堀之内I式に帰属する土器類が出土している。精製土器では外開する口縁部、くの字状に内折する端部を有する深鉢が主としてみられる（1・4・5・14～20・22）。口縁部の無文帯、頸部の横走刻目隆帯と眼鏡状の貼付文、体部の縦位構成の磨消縄文を特徴とする。粗製土器では頸部のくびれるものとそうでないものが各1点出土した（2・3）。

**④晩期の土器（23～43）**

氷式に比定される一群が出土している。浮線文や細密条痕を有する在地系の土器群を主体とし、（23～34・36～39）、東海系胎土で貝殻条痕を施す外来系のものが少数伴う（35・40～43）。前者には浅鉢（23～27）、鉢（32）、深鉢（30）、甕（28・29・31～34）が見られ、後者には壺（35・40）、甕（41・42）がある。在地系土器の施文・調整には隆線文（26）、沈線文（28・30・32）、細密条痕等が見られる。27の体部施文は浮線文というよりむしろ沈線的である。東海系胎土の35は直開する口縁部の壺で、端部外面に貝殻による押圧を加える突帯を巡らせる。

⑵弥生時代の土器（第23～27図）

竪穴住居址、土坑、竪穴状遺構、検出面などから出土したが、量は余り多くない。時期は弥生時代中期後半から終末が主体だが、わずかに後期のものも含まれている。器種・器形別及び土器群の時期や特徴について概観したい。

①器種・器形

壺（52～54・59・61・62・65・67～72・81・85・86・97・99～101・103～105・114～116）

16点を図示、11点を拓影で示した。全形が分かるものは68の1点に過ぎない。器形や紋様の特徴がよく現れる口縁部・頸部が残存しているものを中心に観察してみる。

口縁端部は、直線的からわずかに外反するもの（68）と、内湾受け口状になるもの（65・115）の2種のみが見られる。69はおそらく前者に属するであろう。68の口縁部外面には紋様はなく、端部に棒状施文具によるキザミが行われるのみである。これに対し、115は外面と端部に縄紋をもち、65は外面に山形紋に近い1条の櫛描波状紋（2本歯）が右回りに巡らされ、口縁端部の施紋はない。特に注目すべきは69で、口縁部内面に棒状施紋具で上向きの鋸歯紋を描き、内部を同様横線で埋めている。97の内面もその可能性がある。

頸部紋様帯は、棒状施紋具による3～数条の横線を基本とするものと、櫛描簾状紋を巡らすものの2種に大別される。前者には同一工具による崩れた山形紋が横線間（53）やその下部（54）に巡らされるものや、横線間に刻み（100）や列点（101・116）をもつものがある。後者は、止めの位置を揃えた69・99と、横帯の間に隙間がある103等に代表されるが、104・105のように縦に切った沈線間を横線で埋める擬似簾状紋的なものもある。まれに櫛描波状紋（97）もみられる。また頸部紋様帯の下部に、下向きの鋸歯紋をもつものが2点みられ（52・69）、この施紋具は棒状よりやや細い、おそらく櫛歯状のものであろう。

胴部紋様帯は、69の胴部上半に大形の上向き鋸歯紋を横位に連ねて内部を赤彩したものと、114の縄紋地に棒状工具で横線と山形紋を描いたものの2点に観察できるのみである。68の胴部外面には土器を吊っていたと考えられる籠の編み目が二次焼成で転写されている。

赤彩は69の口縁部内面と胴部外面の鋸歯紋内部にみられるのみである。

62は後期に属する大形の個体で、頸部紋様帯に雑な櫛描T字紋が巡らされている。

甕（45～51・55・57・58・60・66・73～80・82～84・87～96・98・102・106～113・117～120）

台付甕を含め18点を図示、24点を拓影で示した。全形がわかるものは3点ある。

器形は、頸部のくびれが少なく深鉢形を呈すもの（48・51・83・84等）と、甕形（50・58・60・73等）に分かれ、口縁部に限っても、有稜（76・83・84）、受け口状（48・49・51・58）、外反（45・50・57・73）の3類型とその中間的なものがある。いずれも口縁端部に最大径をもつ。

規格はおよそ大・中・小の3類があるようだ。ほとんどが小形に属するが、大形には60・74、中形には55が相当しよう。

紋様構成はかなり類型化されており、口縁端部、口縁部、頸部、胴部の4紋様帯に分かれる。口縁端部には刻み（48・57・73・75・80・94・117）、縄紋（50・51・58・74・76・83・84・87・113）の2種があり、若干の無紋のものが伴う。口縁部紋様帯は最も省略されることが多く、櫛描波状紋（49・55・73・74・94・98）と縄紋（58・84）が見られる。頸部紋様帯は櫛描簾状紋と波状紋の2種で構成され、省略される例は少ない（49）。胴部紋様帯は、縦の櫛描羽状条痕紋（45・48・50・51・60・83・92・107・110・117・119）とそれが崩れた斜行条痕紋（55・58・73・84）と、横位の櫛描波状紋で構成されるもの（49・57・74・89・90・96・106・108・109）がある。胴部最上段に1条の櫛描波状紋を巡らし以下に条痕紋を配する例も1点（118・120：同一個体）見られる。

98は器形と紋様構成は甕だが、内外面に赤彩がみられる。

台付甕はいずれも小形品で、基本的な器形は甕と同様であり、短く外開する脚部を持つ。脚部のみのが残存する個体は、赤彩と甕部内面の器面調整で高杯と弁別した。紋様構成は甕と同様のもの（45）と、「コの字」重ね紋の系統（91・111）の2種がある。77の脚部は、外開の度合いが小さく短い特異な形態を呈し、紋様も縄紋が施される非常に珍しい例である。まったく異なった系統の土器型式の可能性がある。

**高杯（56）**

1点が確認されているのみで、しかも杯部を欠いている。外面に雑なミガキと赤彩が施されているが内面にはない。この時期の高杯は概して小形で、出土量も少ない。

**鉢（44・63・64）**

3点を図示できた。器形は、端部が外反する63と、内湾する44・64の2種類がある。器面調整はいずれも内外面ともに横方向のミガキだが、上半の方が丁寧に施される。63・64は内外面に赤彩色がある。64の端部外面には4単位で突起が付され、63の端部には2つの小貫通孔が1 cmほどの間隔をおいて横に並ぶ。

**②土器群の時期と特徴**

弥生土器は2・6・8住からまとまって出土している。しかしこれらの住居址自体の遺存状況が良いとはいえず、加えて土器の出土状況も廃棄の同時性・一括性を良好に示す状態ではなかった。このため同一住居址出土品をひとまとめにし、標式資料として扱うのは躊躇される。従ってここでは全体的な傾向について触れたい。

7住出土品の62の甕1点を除き、他はすべて弥生時代中期末に編年されている土器群に相似する。細かくみると、かつて松本市県町遺跡での資料を用いて行った段階設定（直井1991）の中で、県町16住段階に相当すると考えたい。主な理由は、壺・甕の受け口化と口縁端部紋様帯からの指頭圧痕の消滅、甕の胴部紋様における櫛描波状紋の採用などを共通して挙げうる。個別にみれば、拓影資料の壺の頸部紋様帯に残る刻みや刺突（100・101・116）は古い要素を示し、一方、69の壺の施紋が棒状施紋具より、むしろ櫛歯状原体の1本に近い、いくぶん細いものでなされていることなどは、

新しい傾向を表している。しかし全体的には先の考えに大きなズレは生じず、古い要素については資料の一括性の低さとして理解したい。新しい傾向については、当該する壺69を含む第8号住居址出土土器群が、他より若干新しい位置にある可能性を否定できないが、そうすると先に触れた松本市県町遺跡での段階設定で、県町16住段階に後続するとした県町8住段階との整合性にやや問題を残す。これは今後、胴部紋様帯に（上向き）鋸歯紋を有する地域の土器：北原式土器との比較も含めた範囲で解決が図られていく課題となろう。

**参考文献**

松本市教育委員会　1990　「松本市県町遺跡」

直井雅尚　1991　「松本平における百瀬式土器の実態」『長野県考古学会誌63号』

### (3)古墳時代の土器（第27図）

5住からまとまって出土している。3点を図化・提示できた。小形の甕1点(121)、壺が2点(122・123）である。いずれも古墳時代後期の所産と推定される。

小形の甕は頸部直下に僅かにミガキがみられるが、他部分の成形・調整は雑で器肉は厚い。122の壺は、球形に近い胴部から外反気味の口縁部が立ち上がる器形を呈し、口縁部と胴部の境界は強いヨコナデによって形成された稜が突出する。内面すべてと胴部の外面に横から斜めのミガキが密に施され、一方、口縁部外面には一定の間隔をおいて縦の長いミガキが印されて、一種の暗文状のものと判断される。123の壺は底部の一帯を欠くが、口径に対して頸部の開きが大きく、「く」の字に短く外反する口縁部などの器形は、122と好対照をなす。やはり頸部直下に強いヨコナデによる明瞭な稜を有し、器面調整は、胴部外面上端に横方向のミガキが僅かに窺える他は、胴部の内外面ともに、やや雑な縦のミガキとなっている。口縁部にはミガキはない。

122・123の2点の壺は、かつて『松本市千鹿頭北遺跡』の古墳時代後期土器分類（直井1989）の中で触れた「壺A」と「壺B1」に、それぞれ該当する。特に「壺A」については、千鹿頭北遺跡の例と比べて、より胴部が球形に近く、口縁部の縦の暗文状のミガキも初見である。この種の縦形の暗文は古墳時代中期の土師器に散見されることが多い点からみて、本遺跡例が千鹿頭北遺跡に先行する要素を有するものと考えたい。

**参考文献**

直井雅尚　1989　「第5章　調査のまとめ」『松本市千鹿頭北遺跡』松本市教育委員会

### (4)平安時代の土器・陶器（第28図）

今回の調査で出土した平安時代の土器は量的には少ない。土坑・ピット等の小形の遺構と、第1遺構検出面のE30～48・N24～33周辺から出土している。時期的には平安時代の様相を呈する。これらの土器の器種・器形・年代観は文献1を引用した。以下器種毎に個々の器形の概要を述べる。

**須恵器杯A**　130は口径12.1cm、底径5.2cm、器高4.4cmを測る。軟質須恵器で底部は回転糸切りである。内外面に黒斑がみられ、見込み部の指オサエが無い。

**黒色土器杯A**　124は口径13.2cm、底径6.3cm、器高4.0cmを測る。口縁内面から体部中位まで横方向、見込部中央から放射線状にミガキが見られる。胎土が緻密で丁寧に作られている。外面体部の下位に「酒坏」の墨書が見える。127は口径13.0cm、底径5.3cm、器高3.7cmを測る。底部は回転糸切りである。131は口径12.9cm、底径4.5cm、器高3.5cmを測る。口径に比して底径が小さく、体部は内湾して口縁部で広がる。外面体部の中位に「正」の墨書がみられる。

**土師器椀**　125は底部の破片で、底径7.4cmを測る。高台は「ハ」の字状に開く。126は口径14.2cm、底径6.4cm、器高5.0cmを測る。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部で外湾する。高台の外面に鈍い稜線がみられる。底部は回転糸切り、付け高台。

**灰釉陶器椀A**　128は口径15.3cm、底径8.4cm、器高4.9cmを測る。腰部から底部まで回転ケズリ調整をした後付け高台をして、ナデ調整を行っている。施釉方法は漬け掛けである。129は口径8.9cm、底径4.5cm、器高3.1cmを測る。単位は不明だが指ナデの輪花がみられる。

**土師器甕B**　133は口径20.0cmを測る。132は底径8.4cmを測る。

### (5)中世以降の陶器・陶磁器（第28図）

**山茶椀捏鉢**　134は口径31.1cmを測る。口縁部は玉縁状に仕上げられている。20土より出土した。

**山茶椀山皿**　135は口径8.0cm、底径4.5cm、器高1.9cmを測る。内面底部が偏平で中央にスリ消し痕がある。口縁は腰部から「ハ」の字状に直線的に立ち上がり、やや口唇部が外反する。底裏は回転糸切り痕、木目状痕が残る。内面見込み部に朱墨と漆、外面体部～底部に漆が付着している。時期は12C後半～13C前半と考えられる。22土より出土した。

**古瀬戸系陶器おろし皿**　136は口径13.3cm、底径5.8cm、器高3.6cmを測る。内外面に灰釉が施されている。底部は回転糸切り調整、内面にはヘラ状工具により、おろし目が施されている。

**青磁椀**　小破片の為図化していないが、2点の竜泉窯系の鎬蓮弁文の椀の腰部である。比較的幅の広い蓮弁文が外面に施されており、椀Ⅰ類（文献2）に分類できる。第1検出面からの出土である。


**参考文献**

文献1：長野県埋蔵文化財センター　1990　『中央自動車道長野線　埋蔵文化財発掘調査報告書4　総論編』

文献2：横田賢次郎・森田勉　1978　「太宰府出土の輸入陶磁器」『九州歴史資料館研究論集』4

## 2．石器（第29～31図）

今回の調査では総計36点の石器が出土している。このほかに、2次加工のある剥片、使用痕のある剥片、剥片、砕片等が出土している。百瀬遺跡の石器群を理解するためには、これらを含めた総合的な分析が必要であるが、後者については紙数の関係で割愛した。本調査では遺構の内外から石器が出土しているが、特に2・8住から比較的まとまって出土している。いずれも磨製石鏃の未製品と砥石が出土しており、県町遺跡同様に本遺跡でも磨製石器の生産が行われていたことがうかがえる。

整理にあたっては、定形的な石器のすべてを対象とし、実測図と一覧表を掲載している。なお、石質鑑定については太田守夫氏にご教示を受けている。

以下では、石器の種類別に概要を述べることにする。

### (1)打製石鏃（1～4）

有茎鏃が4点出土している。いずれも黒曜石製である。このうち1～3は8住からの出土である。1は成形剥離が粗いうえに、中央に素材剥片の大剥離面が残されていることから、製作途上の未製品の可能性が高い。基部の形状は2・4が凹基、3が平基である。側縁の下半部はすべて外湾しているが、3では上半部が内湾している。

### (2)磨製石鏃（5～8）

4点出土している。5は硅質岩製で、両端が破損している。両側縁は剥離調整によって三角形に成形され、片面には研磨が施されている。6は緑泥片岩製。不定形な剥片に粗い剥離を施して、長三角形に成形している。5と同様に片面の一部に研磨が施されている。7は片面に自然面を残す硬砂岩の横長剥片を素材にし、周縁に剥離調整を施している。自然面の一部に研磨が施されている。8は硬砂岩製で、剥片の末端に現存長3.5 cm にわたって0.1 cm 前後の幅の研磨面が認められる。石材と剥片の薄さから磨製石鏃の粗割工程の剥片と推定される。末端部分の研磨痕については擦切施溝によって生じた可能性が考えられる。

### (3)石錐（9・10）

2点出土している。9はチャート製の完形品である。自然面を一部に残す剥片を先細に成形している。錐部から頭部にかけて徐々に幅が増すため、棒状錐かつまみをもつ錐の区別はできない。錐部先端の剥離面の突出する稜は摩耗しており、使用痕と推定される。10は黒曜石製で、錐部の先端が破損している。剥離調整は全体に粗い。頭部は大きく、急速に幅を減じて錐部に至ることから、つまみをもつ錐と考えられる。錐部の両側縁は使用痕と考えられるつぶれが認められる。

### (4)ピエス・エスキーユ（11）

1点出土している。黒曜石製で、平面形は不整な長方形を呈する。両側縁は小さな剥離が施されているが、特に右側縁は剥離により内湾し、連続する微細な剥離痕が観察される。また、下縁には

つぶれが観察される。

⑸スクレイパー（12～15）

4点出土しており、いずれも黒曜石製である。12は剥片の縁辺部の2ヶ所に連続する剥離調整が施されている。13は両側縁に粗雑な剥離が施されているが、石鏃・石錐等の製作途上で放棄された2次加工の剥片の可能性もある。14・15は縦長剥片を素材にし、縁辺部に刃部をもつものである。刃部は、14は腹面（主要剥離面）側に、15は背面側に作り出されている。特に、15は両側縁に長い刃部が作り出され、刃つぶれ状の使用痕が観察される。

⑹打製石斧（16～20）

5点出土しており、すべて硬砂岩製である。16・17は撥形を呈するが、頭・刃部が破損している。18は撥形・円刃の完形品である。刃部は使用痕と考えられる摩耗痕が観察される。摩耗痕は縁部と両面に観察されるが、背面側が特に顕著である。また、頭部はV字状の抉りがあり、腹面側には着柄痕と考えられる摩耗が認められる。なお、着柄する場合は柄が石斧の長軸と平行になると抉りを利用した緊縛法は考えにくく、柄は石斧の長軸に直交していた可能性が高い。19は円刃を呈する刃部である。摩耗痕は縁部と片面に観察されるが、特に片側縁に顕著に認められる。20は撥形を呈するもので、刃部を破損している。成形のための剥離は大きく、幅の割りに肉厚の胴部を有している。

⑺打製石庖丁（21・22）

2点出土しており、いずれも硬砂岩製である。21は片側を破損しているが、平面形が長方形を呈すると推定される。短辺側よりも長辺側に細かな剥離調整が施され、身の薄い凸レンズ状を呈する点で、打製石斧とは区別される。背部は直線的に伸びているが、両面加工の刃部は僅かに外湾する。なお、表面の一部が被熱して黒色化している。22は短側辺に抉りをもつもので、片側を破損している。横長剥片を素材にし、剥離調整を施している。刃部は片刃を呈するが、両面加工で僅かに外湾する。刃端部の一部には使用痕と考えられる摩耗痕が観察される。

⑻磨石（23・24）

2点出土しており、いずれも完形品である。23は砂岩製で、不整円形の片面と側面の一部に磨面が認められる。24は石英閃緑岩製で、不整円形の礫の両面に磨面が認められる。また、両側には指頭大の浅いくぼみが研磨によって作り出されている。

⑼砥石（25～32）

8点出土しており、すべて砂岩製である。25は部分的な剥落等で片側を破損しているが、不整な直方体を呈する大形礫の4面に砥面が観察される。特に、長側辺の3面はよく研がれた結果、凹状を呈している。26は完形品で、偏平な楕円礫の両面に砥面が認められる。なお、研がれた部分は、礫の自然面とは色調を異にし、明瞭に区別される。27は完形品で、偏平な不整円形を呈する礫の片面に砥面が観察される。28は片側を破損しているが、断面が台形を呈する棒状礫の3面に砥面が認められる。特に、砥面の1つは光沢を帯びるほど研磨されている。29は両側を破損しており、素材

の形状は不明であるが、両面に砥面をもつ大形砥石である。砥面は凹・凸の2面があるが、前者の方がよく使用されている。30は両側を破損しているが、砥面は4面が認められ、本来は直方体を呈し6つの砥面があったと推定される。研ぎの線条痕は明瞭に観察されることから、荒砥か中砥であったと考えられる。研ぎは両面では主に長軸に対して斜方向に、側面ではすべて直行方向に行われている。他の砥石に比べて砂岩の粒子が細かいことや形態の点で他の砥石と大きく異なり、おそらくは平安時代・中世以降の鉄器用の砥石と考えられる。31は残片で、素材や形状は不明である。砥面は凹凸があるが、不定方向の粗い研磨痕が観察される。32は大形砥石の残片で、素材や形状は不明であるが、両面に砥面が観察される。

⑽台石（33）

1点出土している。砂岩製で、安定性の良い偏平な長楕円形を呈する大形礫を素材にし、両面の中央部に敲打痕が観察される。これは礫の上で対象物を叩く作業を行った結果、生じたものと考えられる。

⑾研磨礫（34）

1点出土している。砂岩製で、靴ベラ状を呈する。片端を除く全面に研磨が施されている。研磨は特に表面が光沢を帯びるほど入念に施されている。なお、本資料は片端が破損した後も継続使用された結果、破損面の稜は研磨によってつぶれが生じている。

⑿石棒（35）

1点出土している。蛇紋岩製で、両側を破損している。断面が偏平な凸レンズ状を呈する小形品であることから、後・晩期にみられる小形石棒と考えられる。

⒀不明石器（36）

36は硬砂岩（ホルンフェルス）製で、片面に自然面を残す2次加工の剥片である。自然面の一部に研磨面が、両側縁には摩耗痕が認められる。この研磨面は同一方向の線条痕が観察され、砥石が打製石斧の可能性が考えられる。特に、石質が硬砂岩であること、両側縁が摩耗している点では後者の可能性が高い。しかし、片側辺に剥離調整が認められない点で打製石斧とは特定できず、不明石器として扱った。

参考文献
松本市教育委員会　1981　『あがた遺跡』
松本市教育委員会　1990　『松本市県町遺跡』

## 3．金属製品

### (1)鉄器（第32図）

鉄器は47土出土の鋤頭をはじめ、楔２点、角釘２点、不明品２点の合計７点の出土を見ている。遺構からの出土は鋤頭と１竪出土の不明品１点のみで、１点を第２検出面から、残り４点は第１検出面から出土している。以下、器種別に概観する。

①鋤頭（１）

U字形鋤頭の完形品である。身長209 mm、身幅168 mm、刃先長70 mm を測る。木質装着部の深さは15 mm 程度で、先端部では底が6 mm 程の厚みを持つ。縁辺部のひび割れ、側部の木質装着部の底から２枚の鉄板を合わせ製造された様子が窺える。

②楔（２・３）

第２検出面から得た２は、短冊状で上端が折り返されている。幅22 mm、長さ80 mm を測り、厚さは5 mm と薄い。第１検出面から出土の３は上端の折り返し部分が27 mm と幅広になる。長さは52 mm、胴部幅は14 mm を測り、厚さは4 mm 弱とさらに薄い。

③釘（４・５）

２点とも角釘で第１検出面から得ている。４は先端を欠き、頂部にわずかに折り返された痕跡を残す。５は頂部を叩き潰して折り返しており、先端が折れ曲がっている。折れ曲がった箇所に錆により別個体の一部が付着している。

④不明品（６・７）

１竪および第１検出面からの出土で、２点とも同一形態をしている。６は完形、７は上端開口部を一部欠く。長さ40 mm 前後の鉛筆のキャップ状で、開口部の内径はともに9 mm を測る。６は内部が32 mm に達するが、７は20 mm と全長の半分程度である。用途は不明である。

### (2)銭貨（第32図）

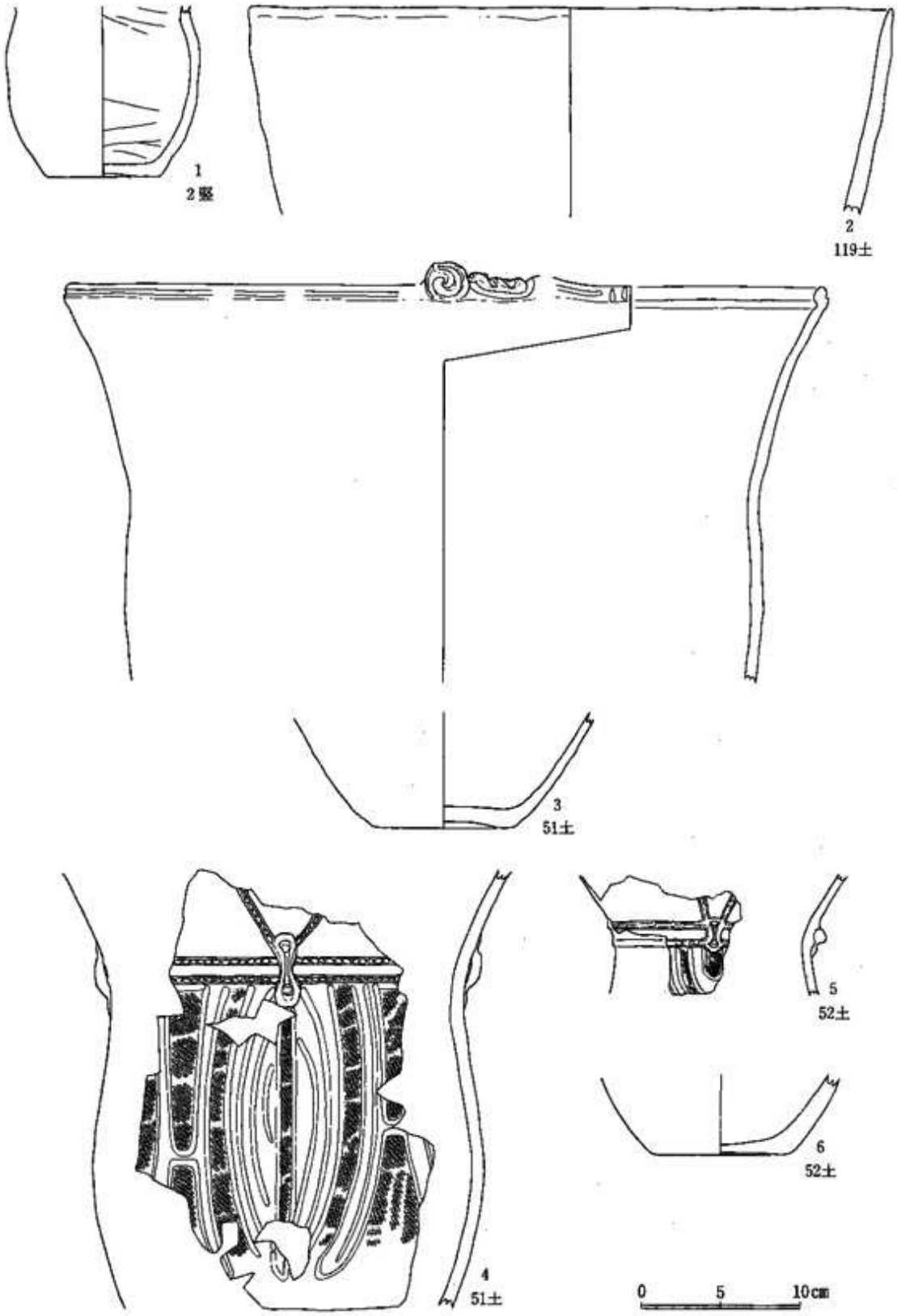
土坑(火葬墓)、住居址から合計16枚出土している。８住からの出土銭のうち２枚までは被熱痕が著しく、中世の火葬墓との切り合いも考える必要があろう。その他についてもすべてに被熱痕があり、六道銭と思われる６枚セットの出土が確認された25土・122土などは、火葬墓と考えられる。これらの墓址の時期は、ほとんどの出土銭が宋銭で、最も新しい25土から出土している「永楽通宝」が明朝銭と見られるため15Ｃ以降と考えられる。

## 第2表　石器一覧表

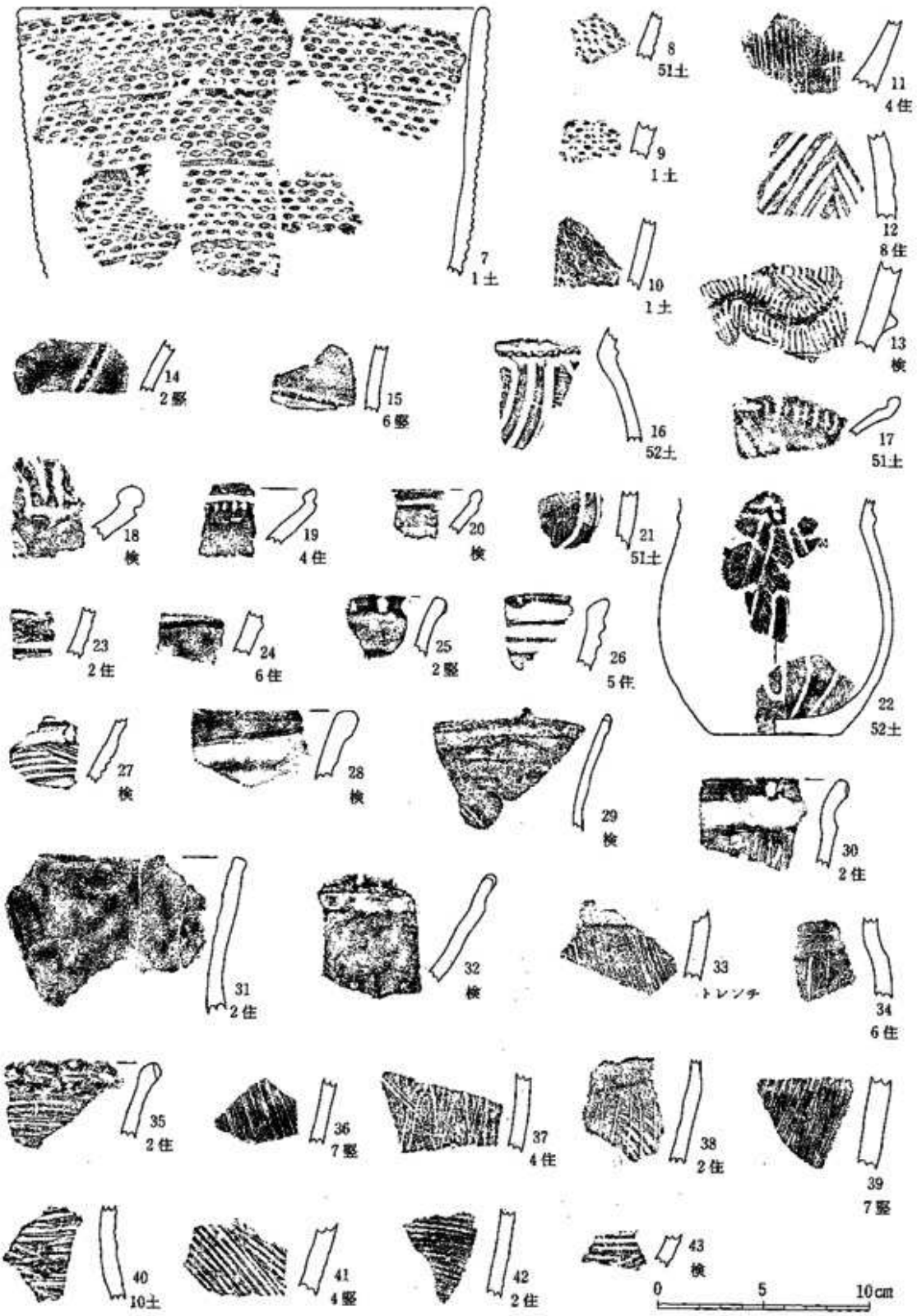
| No. | 図No. | 種　類 | 出土地点 | 長さ (cm) | 幅 (cm) | 厚さ (cm) | 重さ (g) | 石　質 | 破損状況 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 1 | 打製石鏃 | 8住 | 2.37 | ( 1.07) | 0.43 | ( 0.85) | 黒曜石 | 両脚欠 | 凹基有茎、未成品？ |
| 2 | 2 | 〃 | 〃 | ( 1.79) | 1.53 | 0.37 | ( 0.90) | 〃 | 先端・茎部欠 | 〃 |
| 3 | 3 | 〃 | 〃 | ( 2.13) | ( 1.27) | 0.31 | ( 0.55) | 〃 | 〃 ・片脚欠 | 〃 |
| 4 | 4 | 〃 | 1検 | ( 1.37) | ( 1.45) | 0.31 | ( 0.65) | 〃 | 先端・片脚・茎部欠 | 〃 |
| 5 | 5 | 磨製石鏃 | 2住 | ( 3.42) | ( 1.81) | ( 0.55) | ( 4.30) | 硅質岩(チャート？) | 両端欠 | 未成品（片面研磨） |
| 6 | 6 | 〃 | 〃 | 7.18 | 2.54 | 1.01 | 19.30 | 緑泥片岩 | 完　形 | 〃 （ 〃 ） |
| 7 | 7 | 〃 | 8住No.28 | 8.63 | 3.87 | 0.83 | 30.65 | 硬砂岩 | 〃 | 〃 （ 〃 ） |
| 8 | 8 | 〃 | 8住 | 5.63 | ( 6.61) | 0.71 | ( 27.20) | 〃 | 両側欠 | |
| 9 | 9 | 石　錐 | 1竪 | 3.08 | 1.30 | 0.73 | 3.25 | チャート | 完　形 | 錐部摩耗 |
| 10 | 10 | 〃 | 1検 | ( 3.52) | 2.30 | 1.17 | ( 7.80) | 黒曜石 | 錐部端欠 | 〃 |
| 11 | 11 | ピエス・エスキーユ | 5竪 | 2.06 | 1.71 | 0.60 | 1.65 | 〃 | 完　形 | |
| 12 | 12 | スクレイパー | 2住No.18 | 2.78 | 1.54 | 0.82 | 3.85 | 〃 | 完　形？ | |
| 13 | 13 | 〃 | 6住 | 2.80 | 1.73 | 0.72 | 3.30 | 〃 | 完　形 | |
| 14 | 14 | 〃 | 8住床 | 3.60 | 2.05 | 0.83 | 4.50 | 〃 | 〃 | |
| 15 | 15 | 〃 | 8住 | 5.08 | 1.75 | 1.10 | 6.75 | 〃 | 〃 | 使用痕 |
| 16 | 16 | 打製石斧 | 2住No.4 | ( 6.48) | ( 4.75) | ( 1.23) | ( 42.75) | 硬砂岩 | 頭・刃部欠 | 撥形・？ |
| 17 | 17 | 〃 | 〃 No.5 | ( 6.40) | ( 5.90) | ( 1.56) | ( 74.30) | 〃 | 〃 | 〃 ・？ |
| 18 | 18 | 〃 | 2竪No.1 | 13.20 | 5.04 | 1.63 | 139.33 | 〃 | 完　形 | 撥形・円刃、頭・刃部摩耗 |
| 19 | 19 | 〃 | 1検 | ( 7.32) | 6.09 | ( 1.52) | ( 77.05) | 〃 | 頭・胴部欠 | ？ ・円刃、刃部摩耗 |
| 20 | 20 | 〃 | 〃 | (11.60) | ( 4.53) | 2.00 | ( 107.45) | 〃 | 刃部欠 | 撥形・？ |
| 21 | 21 | 打製石包丁 | 2住No.2 | ( 9.38) | ( 4.96) | 1.32 | ( 82.66) | 〃 | 片側欠 | 被熱 |
| 22 | 22 | 〃 | 1検 | ( 5.49) | ( 4.42) | ( 0.77) | ( 27.50) | 〃 | 〃 | 刃部摩耗 |
| 23 | 23 | 磨　石 | 5住 | 9.4 | 8.6 | 4.6 | 495 | 砂　岩 | 完　形 | 磨面2 |
| 24 | 24 | 〃 | 2竪 | 7.0 | 5.9 | 4.5 | 275.7 | 石英閃緑岩 | 〃 | 磨面2、凹部2 |
| 25 | 25 | 砥　石 | 2住No.1 | (30.8 ) | 18.1 | 10.2 | (9400 ) | 砂　岩 | ほぼ完形 | 砥面4、被熱 |
| 26 | 26 | 〃 | 6住No.9 | 21.1 | 17.2 | 3.0 | 2000 | 〃 | 完　形 | 〃 2 |
| 27 | 27 | 〃 | 8住No.43 | 20.1 | 17.7 | 3.4 | 1400 | 〃 | 完　形 | 砥面1 |
| 28 | 28 | 〃 | 8住 | (14.0 ) | ( 5.5 ) | ( 3.8 ) | 420 | 〃 | 片側欠 | （〃 3） |
| 29 | 29 | 〃 | 18土No.1 | (19.9 ) | (16.4 ) | ( 8.0 ) | (4000 ) | 〃 | 両側欠 | （〃 2） |
| 30 | 30 | 〃 | P101 | (10.1 ) | ( 5.2 ) | ( 2.0 ) | ( 150 ) | 〃 | 2側辺欠 | （〃 4） |
| 31 | 31 | 〃 | 1検 | ( 7.8 ) | ( 2.6 ) | ( 0.7 ) | ( 18 ) | 〃 | 残　片 | （〃 1） |
| 32 | 32 | 〃 | 〃 | (14.0 ) | (15.2 ) | (10.6 ) | (3600 ) | 〃 | 〃 | （〃 2） |
| 33 | 33 | 台　石 | 6住No.8 | 29.7 | 17.0 | 3.8 | 2900 | 〃 | 完　形 | |
| 34 | 34 | 研磨穀 | 1検 | 7.69 | 3.34 | 1.38 | 55.70 | 〃 | 〃 | |
| 35 | 35 | 石　棒 | 5竪 | (10.10) | ( 3.61) | ( 2.54) | ( 170 ) | 蛇紋岩 | 両側欠 | |
| 36 | 36 | 不明石器 | 8住No.1 | ( 9.11) | ( 6.47) | ( 1.60) | ( 104 ) | 硬砂岩(ホルンフェルス) | 片側欠 | |

第3表　銭貨一覧表

| No. | 出土遺構 | 名　称 | 初鋳年 | 王朝名 | 径(mm) | 質量(g) | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 8住 | 政和通宝 | 1111 | 宋 | 24.4 | 3.10 | 混入品 |
| 2 | 8住 | 元豊通宝 | 1078 | 宋 | 24.2 | 2.56 | 混入品 |
| 3 | 8住 | 不　明 | | | 23.4 | 2.39 | □□通宝・混入品 |
| 4 | 22土 | 元祐通宝 | 1086 | 宋 | 23.7 | 2.67 | |
| 5 | 22土 | 天禧通宝 | 1017 | 宋 | 24.4 | 3.62 | |
| 6 | 22土 | 皇宋通宝 | 1039 | 宋 | 24.8 | 3.12 | |
| 7 | 25土 | 永楽通宝 | 1408 | 明 | 24.9 | 2.78 | 模鋳銭か |
| 8 | 25土 | 天聖元宝 | 1023 | 宋 | 24.6 | 2.77 | |
| 9 | 25土 | 皇宋通宝 | 1039 | 宋 | 24.4 | 2.43 | |
| 10 | 25土 | 不　明 | | | | | 3枚が焼付き灰が付着する |
| 11 | 122土 | 至和通宝 | 1054 | 宋 | 24.3 | 3.29 | |
| 12 | 122土 | 不　明 | | | 23.9 | 3.57 | |
| 13 | 122土 | 熙寧元宝 | 1068 | 宋 | (24.9) | (2.30) | 縁辺1部欠 |
| 14 | 122土 | 嘉祐元宝 | 1056 | 宋 | 24.0 | 3.78 | |
| 15 | 122土 | 淳化元宝 | 990 | 宋 | 24.3 | 2.49 | |
| 16 | 122土 | 熙寧元宝 | 1068 | 宋 | 24.4 | 2.21 | |

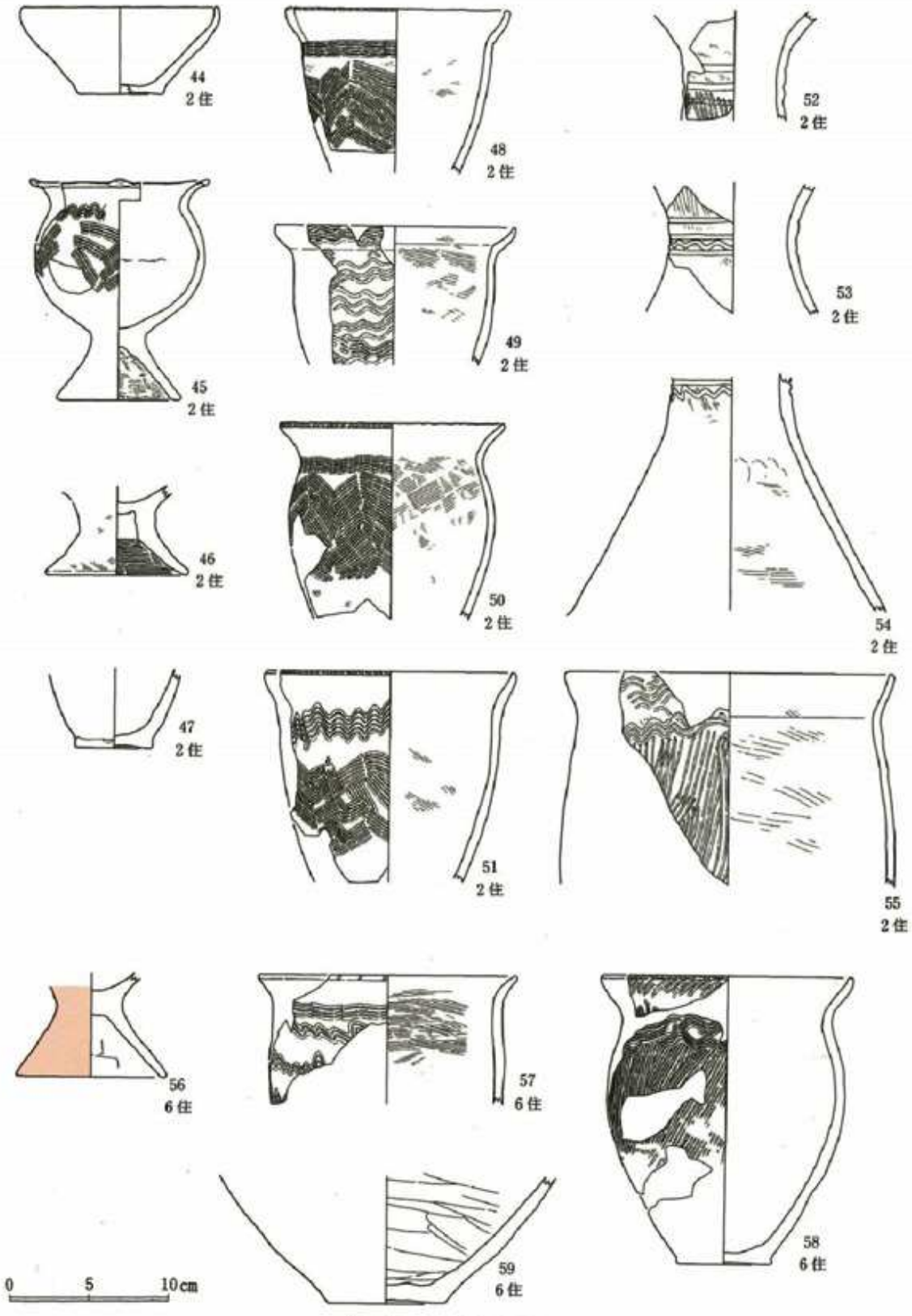



第21図　土器実測図(1)

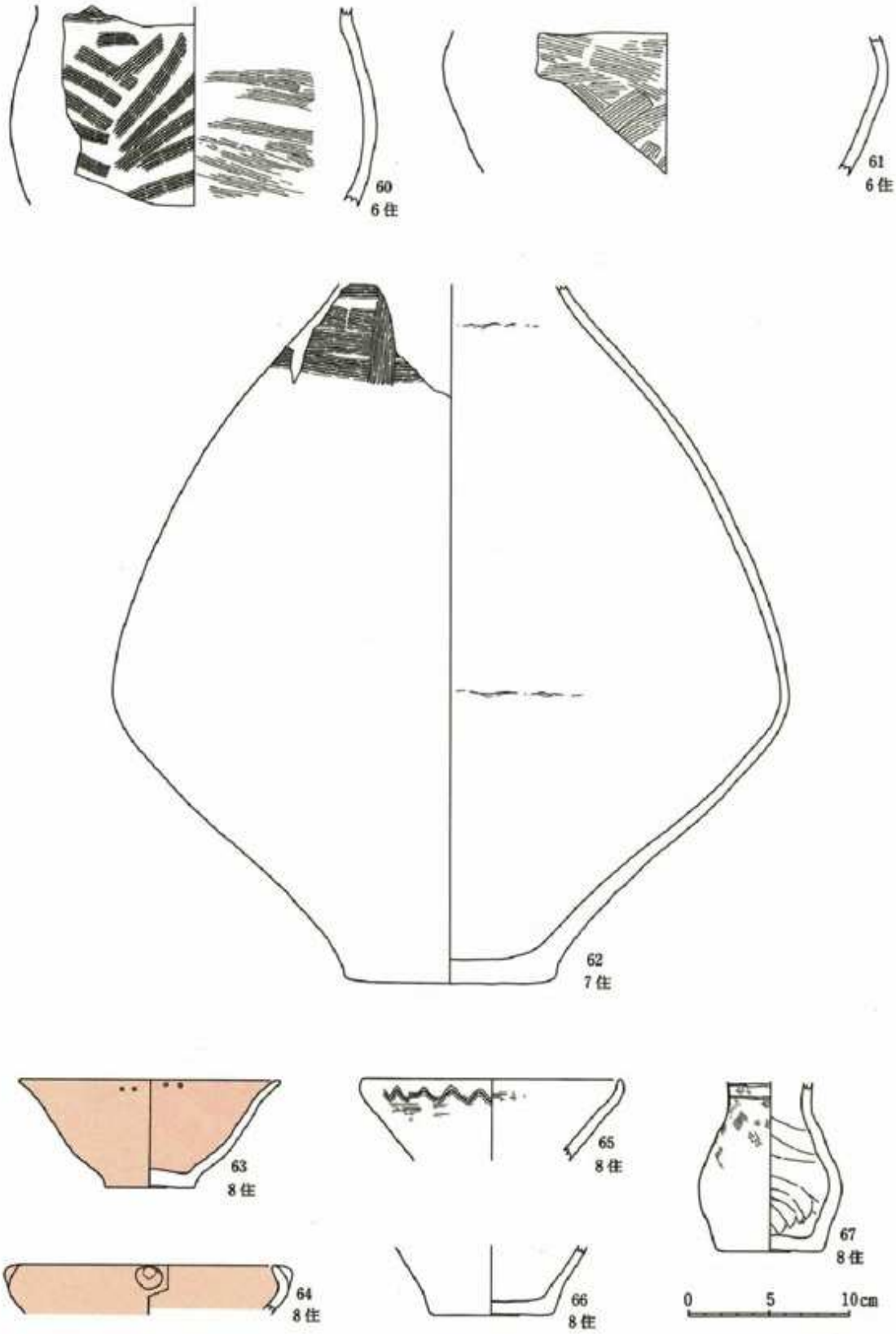

7
1土
8
51土
9
1土
10
1土
11
4住
12
8住
13
検
14
2竪
15
6竪
16
52土
17
51土
18
検
19
4住
20
検
21
51土
22
52土
23
2住
24
6住
25
2竪
26
5住
27
検
28
検
29
検
30
2住
31
2住
32
検
33
トレンチ
34
6住
35
2住
36
7竪
37
4住
38
2住
39
7竪
40
10土
41
4竪
42
2住
43
検
0
5
10cm

第22図　土器拓影(1)

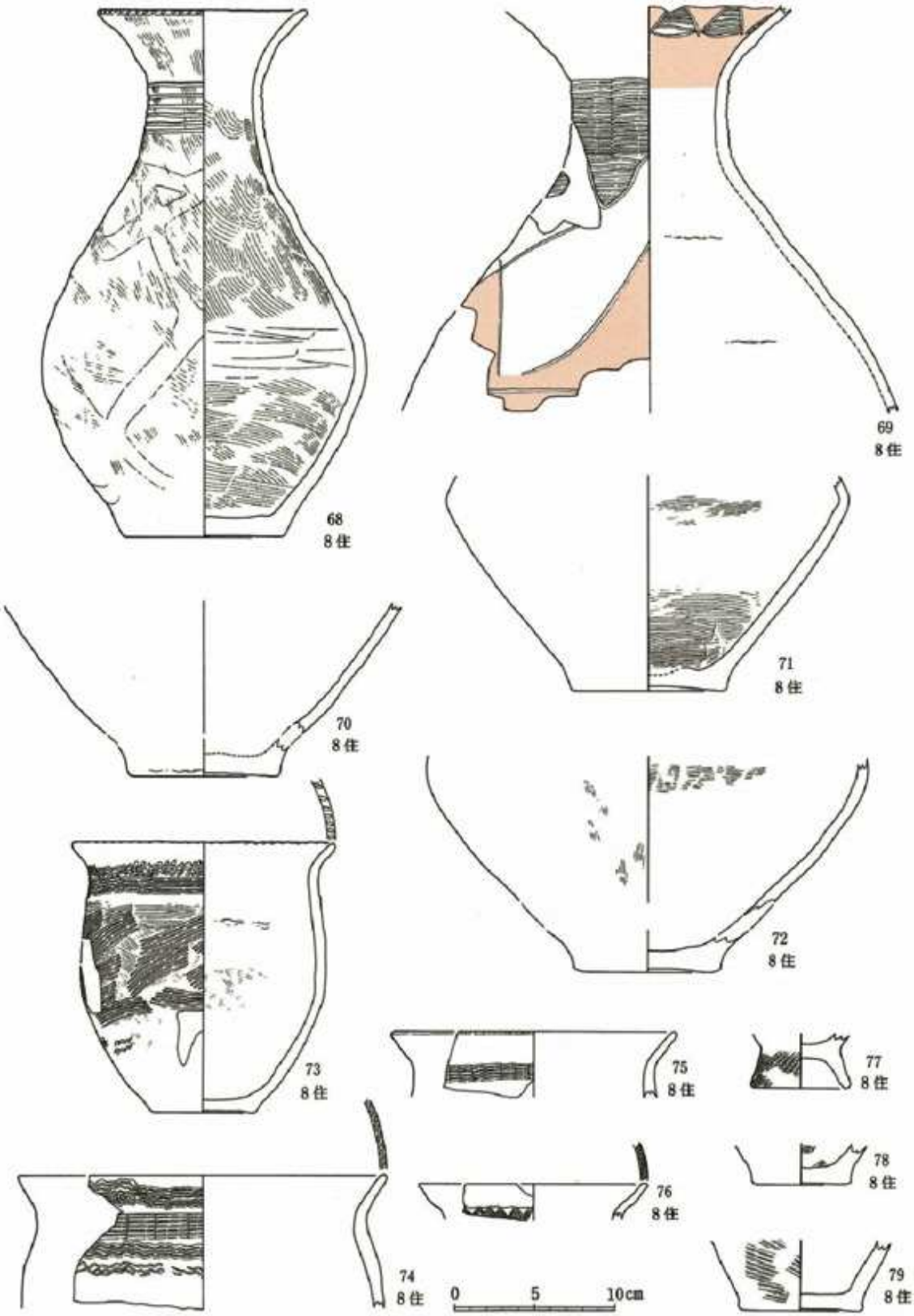
弥生時代



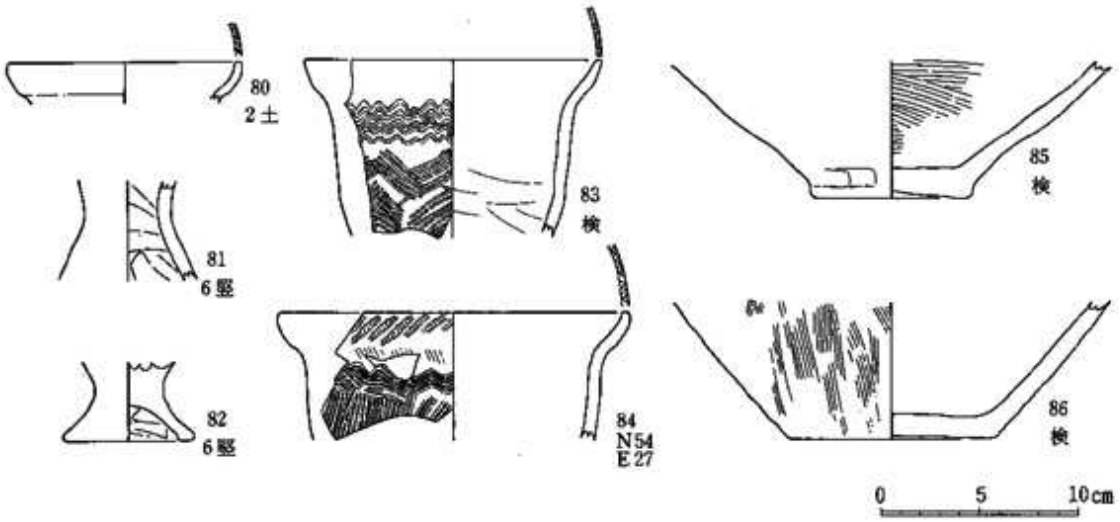

第23図　土器実測図(2)

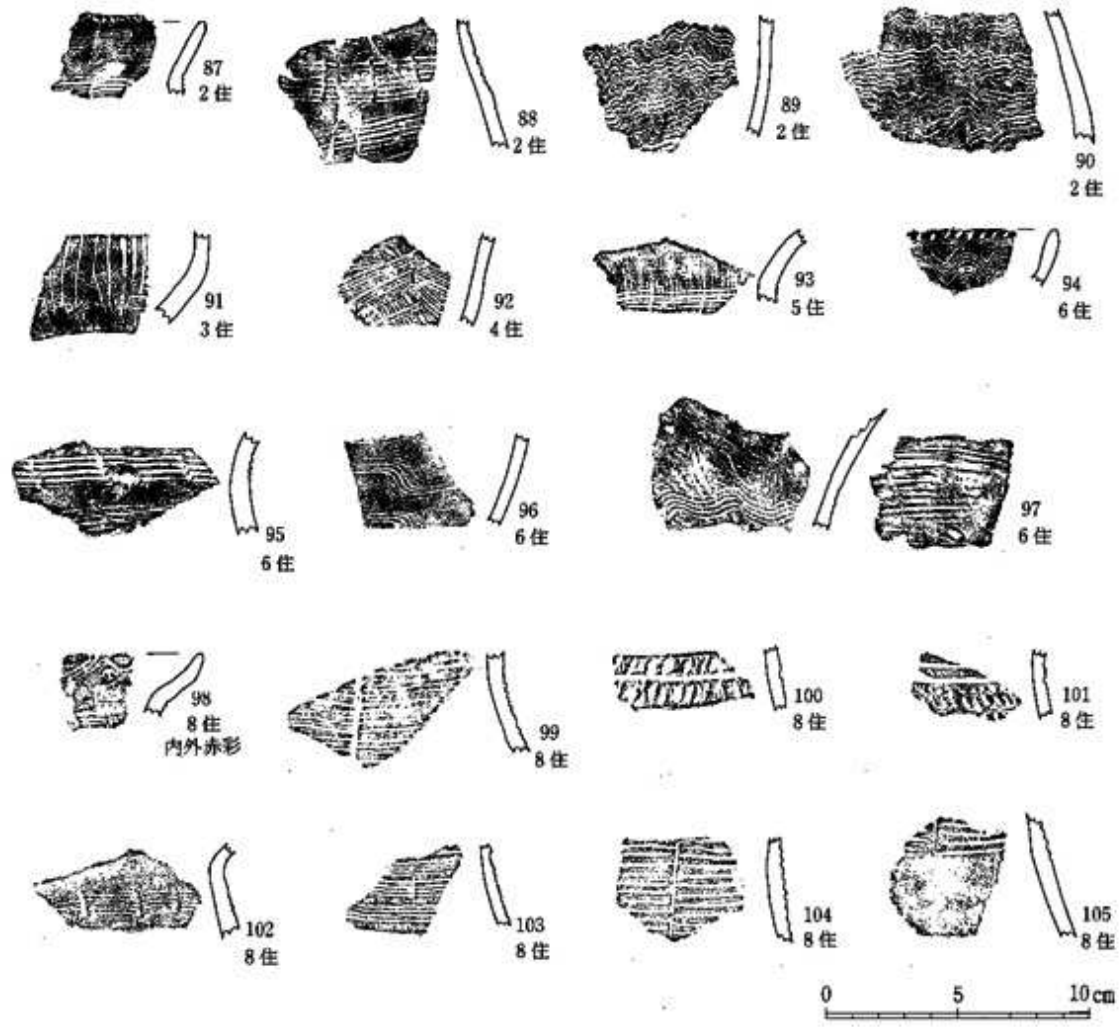



第24図　土器実測図(3)

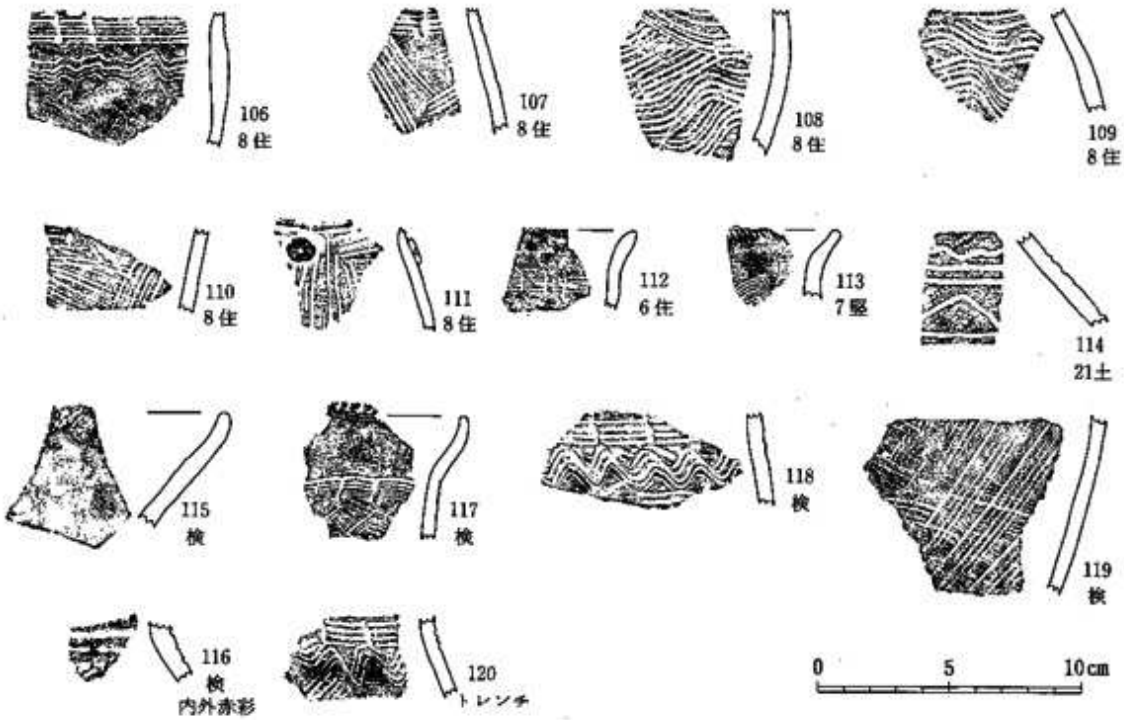

68
8住
69
8住
70
8住
71
8住
72
8住
73
8住
74
8住
75
8住
76
8住
77
8住
78
8住
79
8住
0
5
10cm

第25図　土器実測図(4)

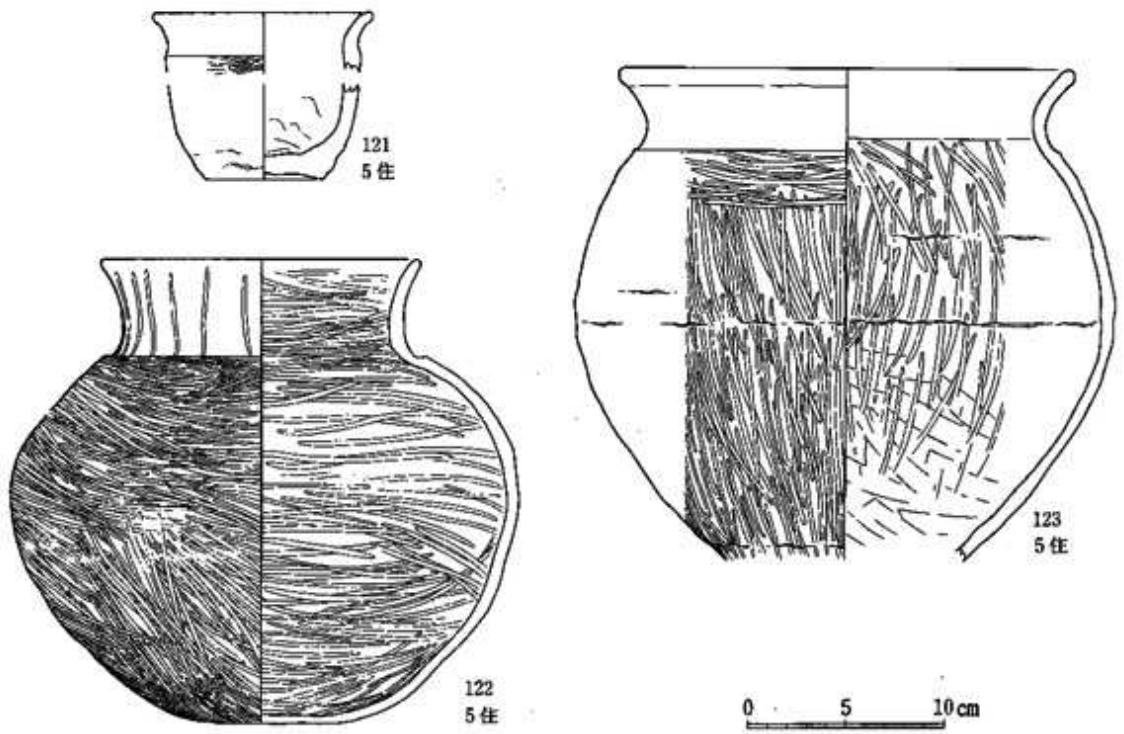



**第26図　土器実測図(5)'・土器拓影(2)**

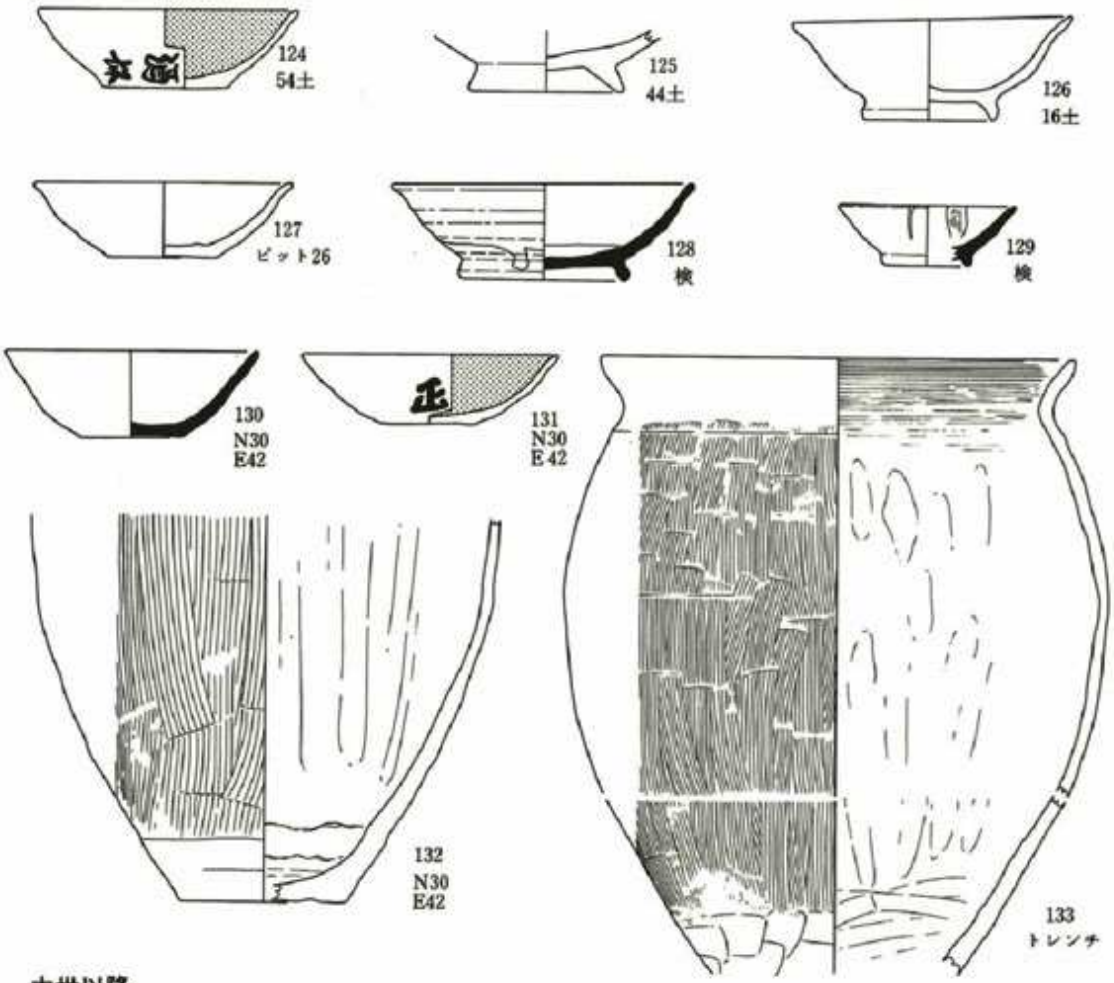



古墳時代

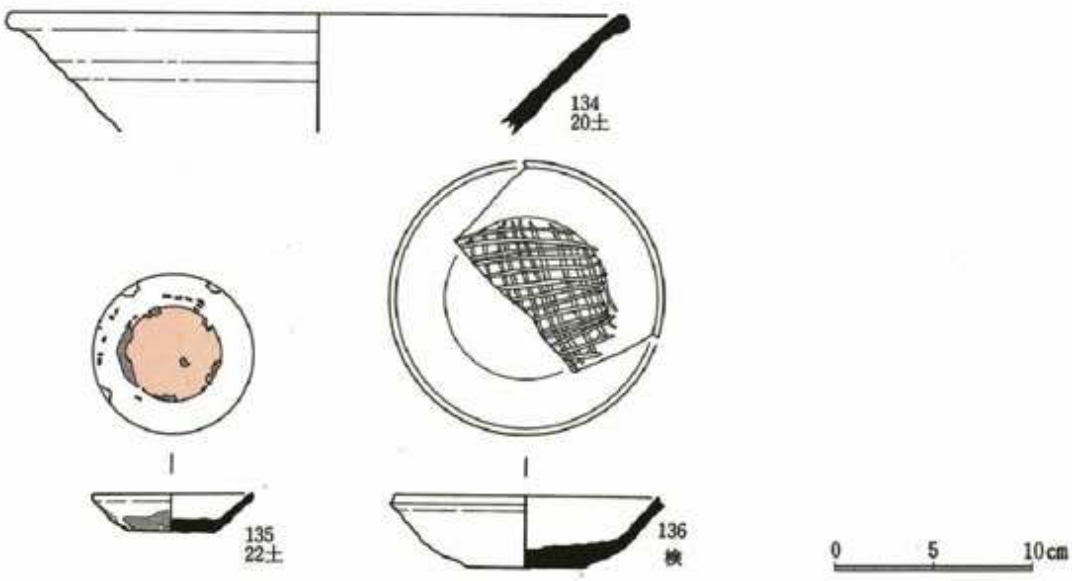



第27図　土器拓影(3)・土器実測図(6)

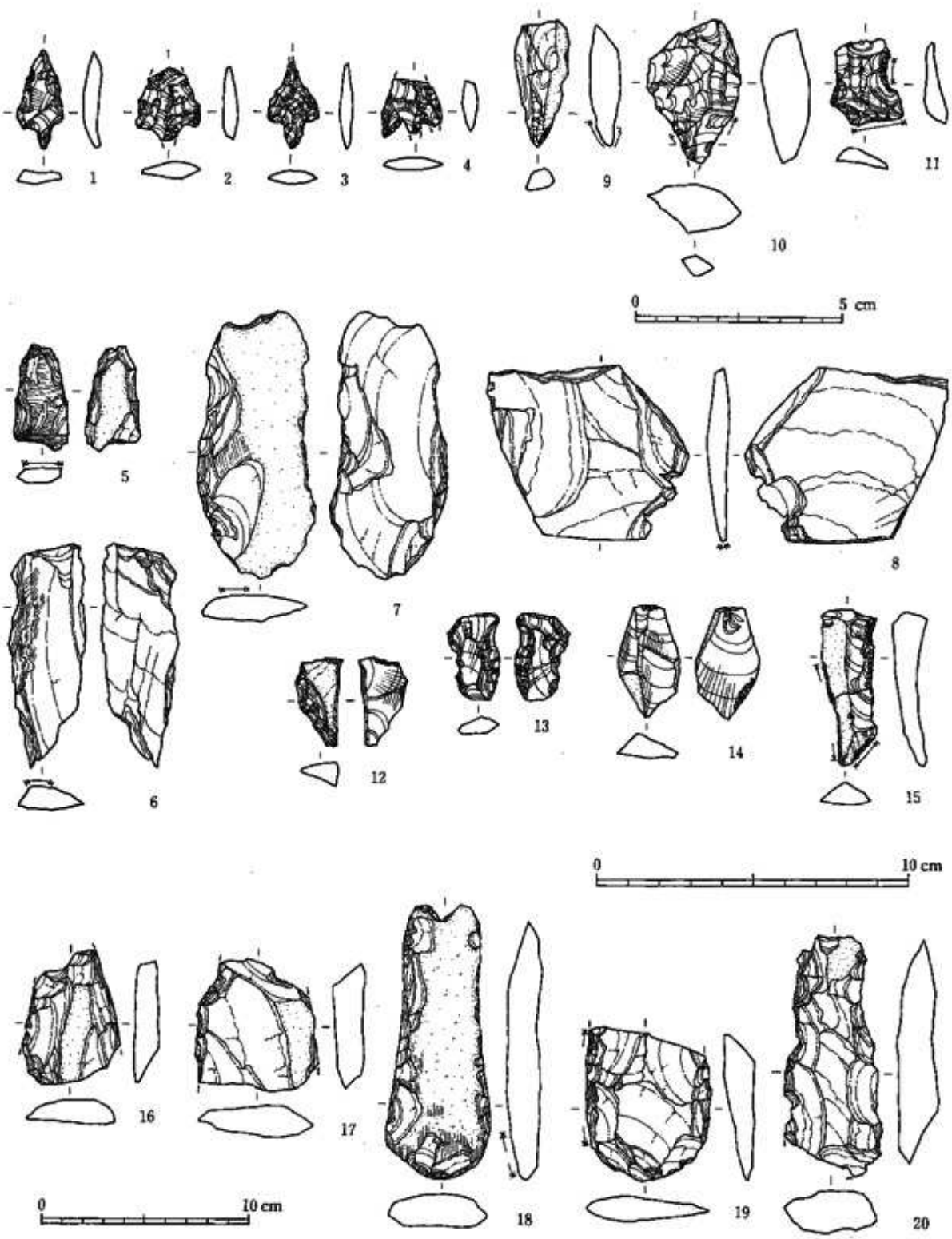
平安時代



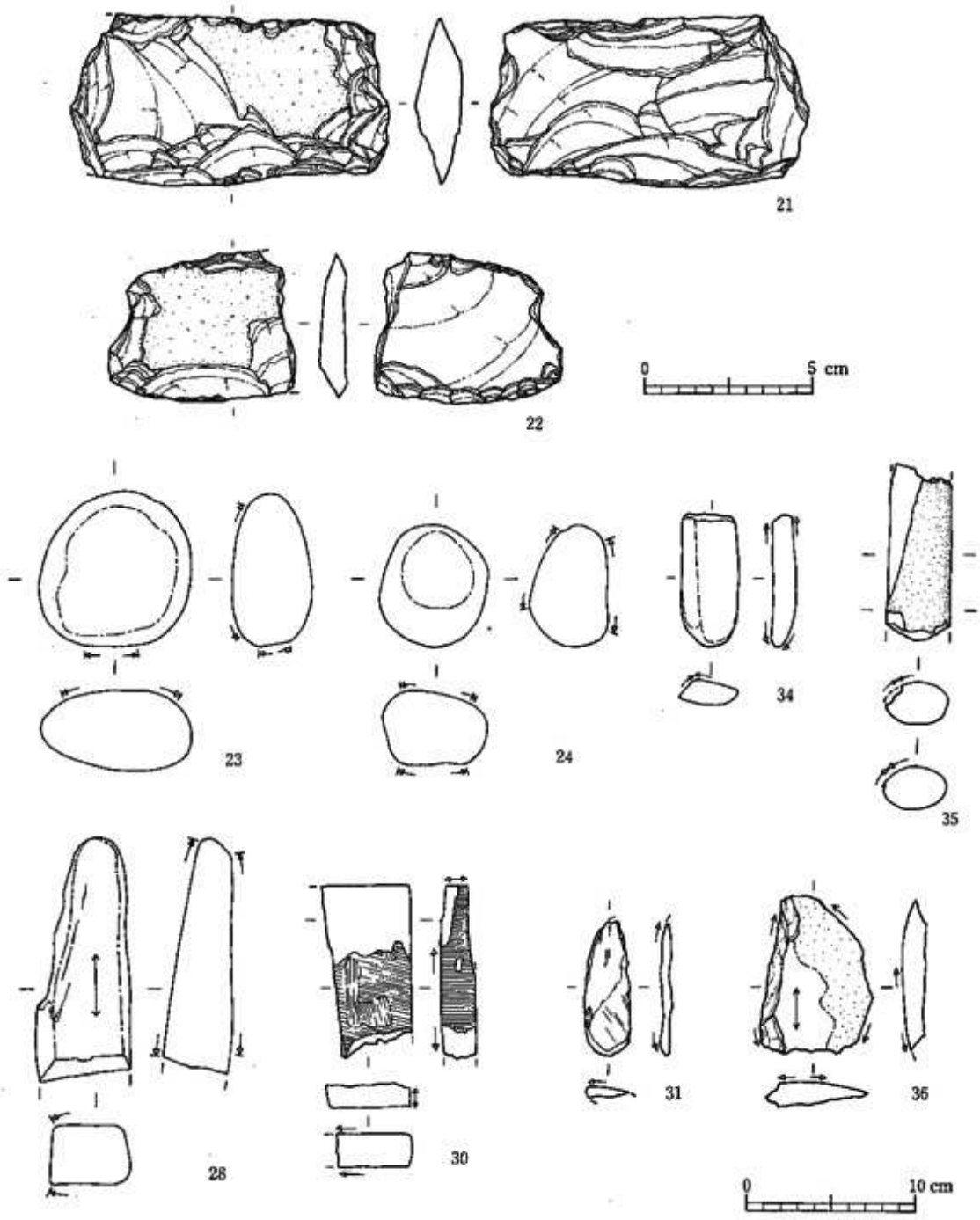

中世以降



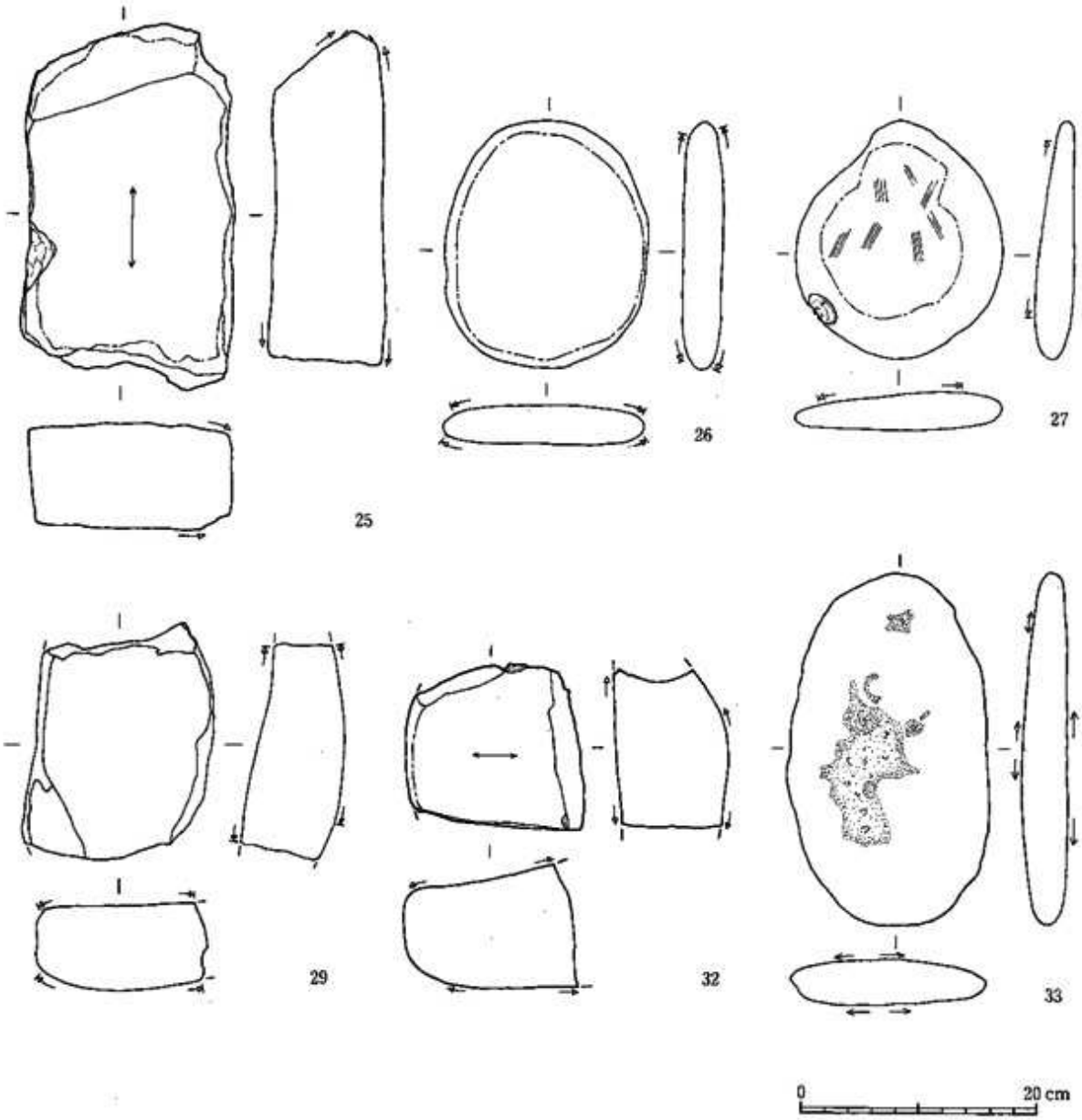

第28図　土器実測図(7)




第29図　石器実測図(1)

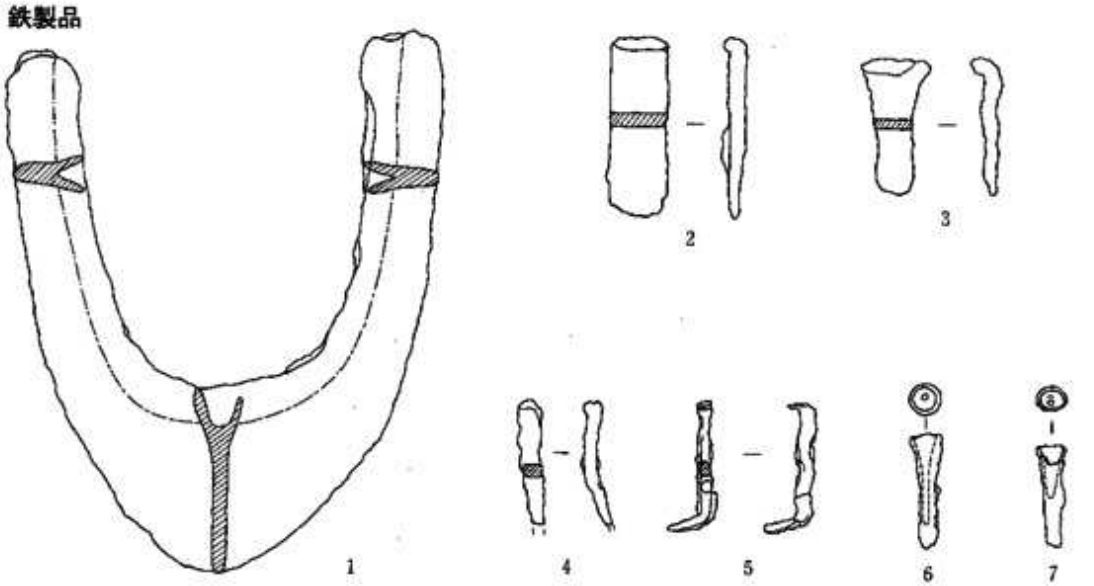



第30図　石器実測図(2)

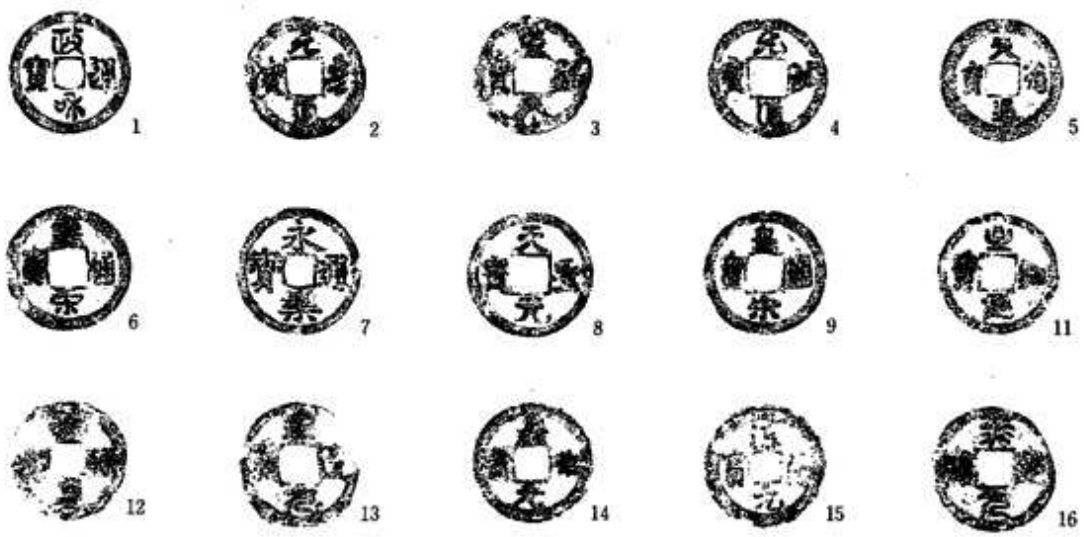



第31図　石器実測図(3)

鉄製品




銭貨




0 5 cm

第32図　鉄製品実測図・銭貨拓影

# 第4章　調査のまとめ

## 1．地形と地質について

牛伏川は鉢伏山横峰を源流として西流し、奈良井川支流の田川に合流する総延長9 kmの河川である。大雨の毎に絶えず崩壊する暴れ川で、鉢伏山の土砂岩石を押し出し、下流一帯の集落は被害を受けていた。牛伏川の洪水については、元禄3（1650）年から明治29（1896）年の間に18回の大洪水があったと記録に残っている。このうち明治29年の氾濫では旧寿村小池・白川・百瀬の田畑を流し、田川に迄流入した結果、田川西岸が決壊し、旧芳川村村井、旧松本村平田・野溝までを流失し、水は奈良井川まで達するという大災害であった。これらの牛伏川氾濫の被害は松本地区にとどまらず、最下流の信濃川河口にある新潟港に迄土砂を運び、徐々に埋めてしまう可能性があった。大洪水の理由については、江戸時代末期～明治時代にかけての森林伐採による禿山の拡大と考えられている。当時新潟港は軍港としても利用されており、明治政府は牛伏川氾濫を国家的問題と据えた。明治18（1885）年内務省（現在の建設省）は牛伏川を直轄工事として、堰堤建設・植林を開始した。堰堤工事は大正7年に完成した。その後も昭和46年に大型の砂防ダム、同52年にはダム上流堰堤が建設された。現在も国より砂防学習ゾーンモデル事業の指定を受けて砂防工事が続けられ、ダム上流に作られた牛伏川いこいの広場は森林に覆われた水と緑を親しむ場として整備されている。

今回の発掘調査に伴う地質調査では、既に遺跡の立地と地形・地質の項で詳しく述べているが、数多くの牛伏川の氾濫の痕跡と、氾濫以前の地形を捉えることができた。百瀬遺跡は牛伏川扇状地の末端にあり、田川の右岸段丘の縁辺に位置している。現在の調査地の地形は田川に向かって緩やかに傾斜する東斜面となっている。調査では表土と牛伏川氾濫による砂層・角礫層を取り除くと、縄文時代早期～中世以降の生活面と考えられる黒褐色土層が検出された。砂礫・角礫層の堆積は台地上で50 cm、谷状地形の部分では5 m以上に及んでいた。現在の地形からは全く想像できないが、牛伏川氾濫以前の調査地の地形は、台地の縁辺部にあたり、南～西側は深い谷状の地形となっていたと判った。また確認された遺構に伴う遺物により、氾濫は縄文時代早期～15C代の間には起こっていないことも判明した。

参考文献
長野県・牛伏川砂防堰堤期成同盟会　1986　『牛伏川砂防沿革史(3)』

## 2．遺構と遺物について

①縄文時代　縄文時代の遺構として確認されたものは、土坑3個のみである。1土からは残存度のよい押型文土器を得ており、早期に属する。また51・52土は後期に属するもので、51土は土器棺墓

と考えられる。松本地区では早期・後期に属する遺構の調査例は少なく、貴重な資料の追加となった。又、中期の遺物を遺物包含層より得ており、周囲に集落が営まれていた可能性もある。

②弥生時代　遺構としては、竪穴住居址6軒、竪穴状遺構6、土坑1を確認することができた。竪穴住居址はこのうち7住が後期に属するもので、他は中期に属する。遺構の分布は地形的には台地上の緩やかな斜面上にあたる。平面形については円形・楕円形・隅丸方形のものがあり、定まっていない。また遺存状況も悪く、炉址は6住に3個が検出されたのみで、他からは確認できなかった。主柱穴についても2住を除いて明確でない。遺物については、量的には少ないがほとんどが住居址からの出土であり、2・6・8住から比較的まとまってみられた。中期末に属すると考えられる土器群は、松本市県町遺跡での資料を用いた段階設定（文献1）の県町16住段階に相当するものであるが、より強く北原式の影響を受けている。百瀬遺跡はいわゆる栗林圏内にあり、解釈によってはその最終的な形態を示している。先学の指摘する実態として確認できたものといえよう。石器についても2・8住から比較的まとまって出土している。いずれも磨製石鏃が砥石と共に出土しており、県町遺跡、出川南遺跡、宮渕遺跡に続いて、松本市内でも4例目の貴重な調査例となった。

③古墳時代　遺構としては古墳時代後期に属する5住のみを調査した。百瀬地区は耳塚と呼ばれる古墳もあり、今回の調査地の北側と東側には古墳時代の集落が拡がっている可能性がある。

④平安時代　遺物包含層から「酒坏」の墨書がみられる土師器の杯が出土している。土器そのものの用途が書かれた土器は非常に稀であり、貴重な資料である。住居址は検出できなかったが、調査地北側の正念寺周辺の畑地でもこの時代の遺物が採集でき、集落の存在が推定できる。

**参考文献**

文献1：直井雅尚　1991　「松本平における百瀬式土器の実態」『長野県考古学会誌63号』

文献2：松本市教育委員会　1991　『松本市県町遺跡』

## 3．まとめ

以上のように調査面積は1,211 m²と小規模ではあったが、弥生時代を中心として、縄文時代早期～中世以降に亘る遺構と、それらに伴う遺物を得る事ができた。またこれらの埋蔵文化財の発掘調査の成果に加え、同時に行われた地質調査では、森林伐採を原因とした牛伏川の氾濫が、百瀬地区の地形そのものを変えてしまう程の大災害であったと確認できた。現在牛伏川は明治から続く砂防工事により清らかな流れを親しむ川に姿を変えている。私たちはこれからも災害を未然に防ぐとともに、自然環境の保護にも努めていかねばならない。

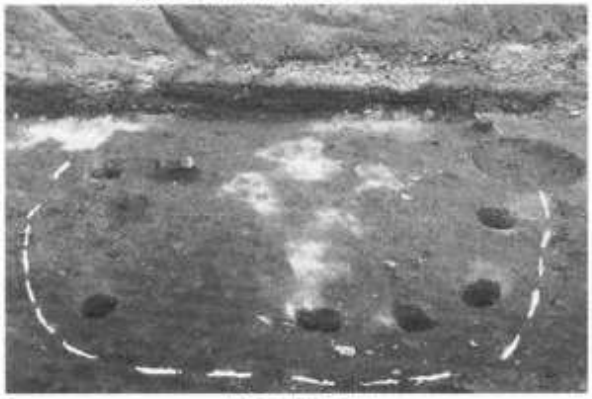
最後になりましたが残暑の中、発掘調査に参加して頂いた皆様、また調査の実施に際しては多大な御理解を頂いた松本市寿百瀬土地区画整理組合、寿史談会、百瀬遺跡保存会、正念寺総代会、百瀬町会の皆様には厚く御礼申し上げます。

調査開始前

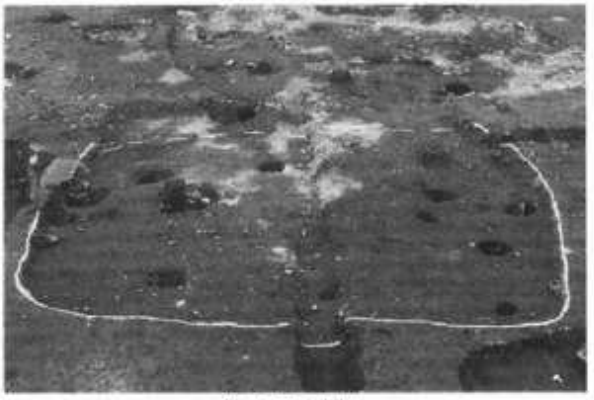
試掘坑

第2号住居址(遺物出土状況)

第2号住居址



第3号住居址



第4号住居址

第5号住居址

第6号住居址

**第1図版**

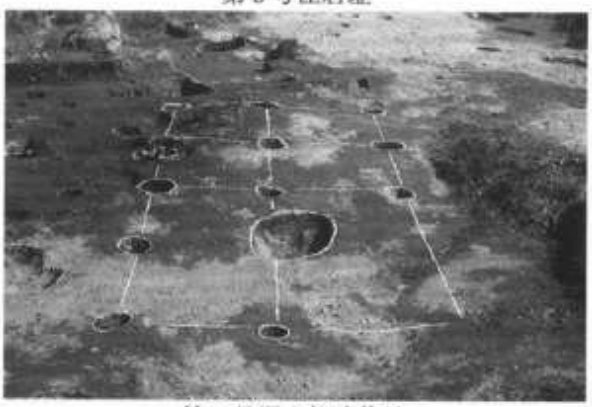
第8号住居址(遺物出土状況)

同

同

第8号住居址

第1号掘立柱建物址



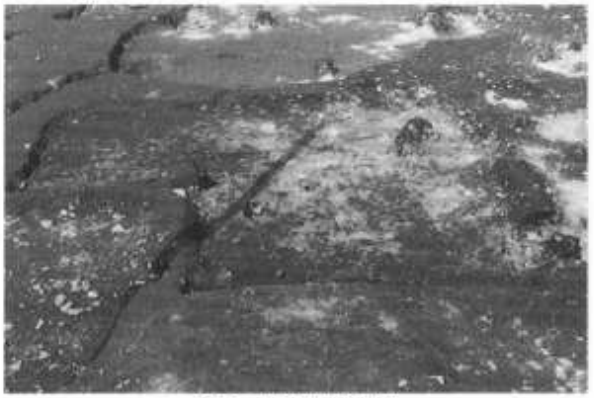
第2号掘立柱建物址

第1号竪穴状遺構(遺物出土状況)

第1号竪穴状遺構

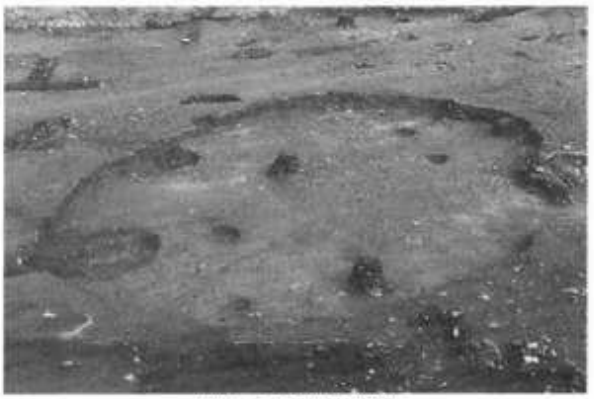
第2図版

第2号竪穴状遺構

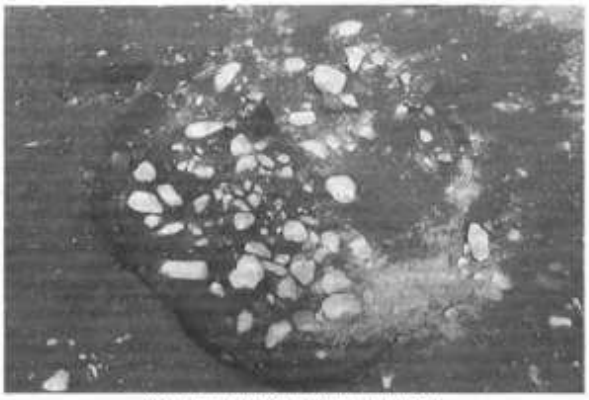


第5号竪穴状遺構

第6号竪穴状遺構

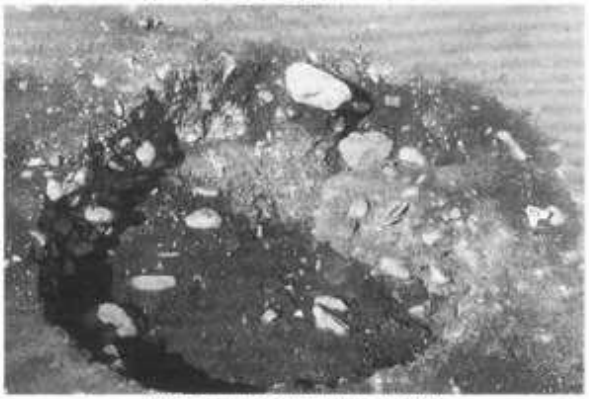


第7号竪穴状遺構

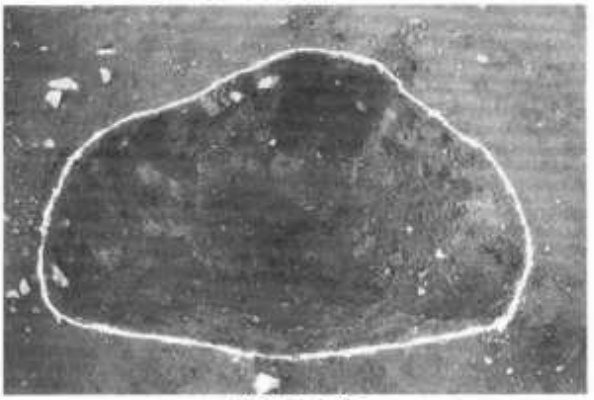


第1号土坑(遺物出土状況)

第51号土坑(遺物出土状況)



第16号土坑(遺物出土状況)



第17号土坑

第3図版

第47号土坑(遺物出土状況)

第132号土坑(遺物出土状況)

遺物包含層出土状況

作業風景

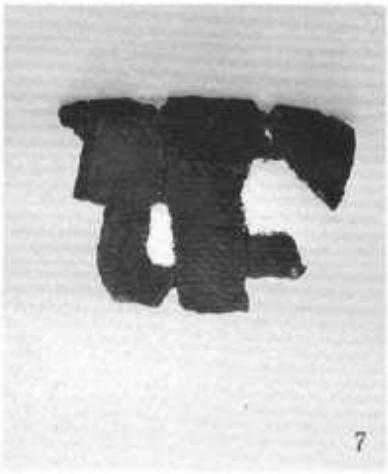
作業風景

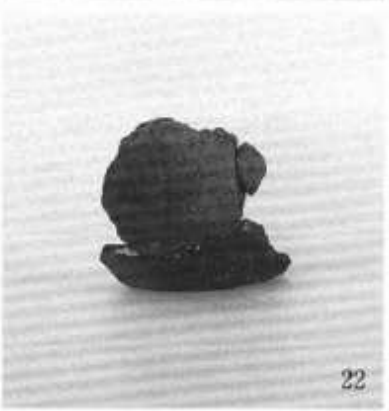
第1検出面調査終了

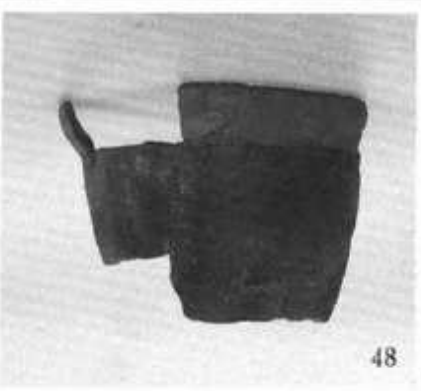
同

記念撮影(箱清水御詠歌碑前にて)

第4図版





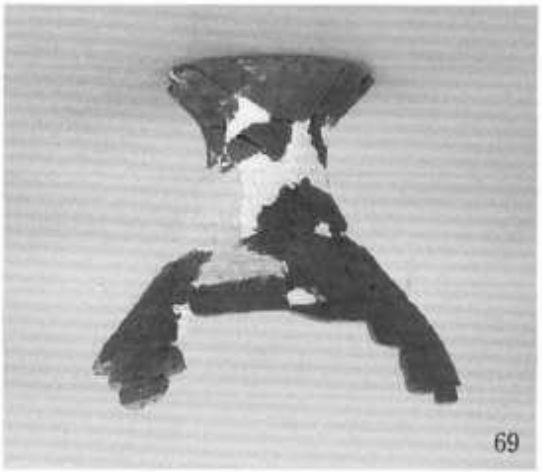


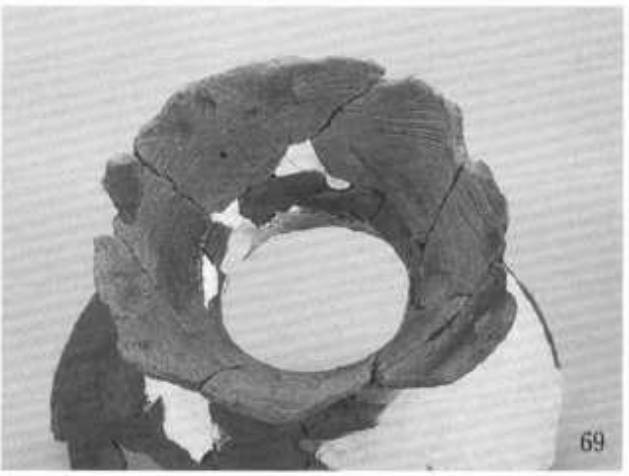
第 5 図版

58

73

68


69


69

122

123

131

124

第 6 図版

124

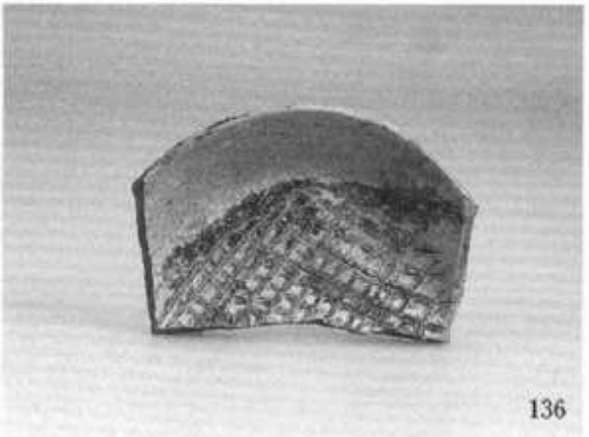
126

128

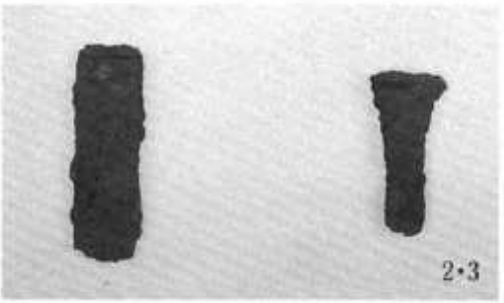
130

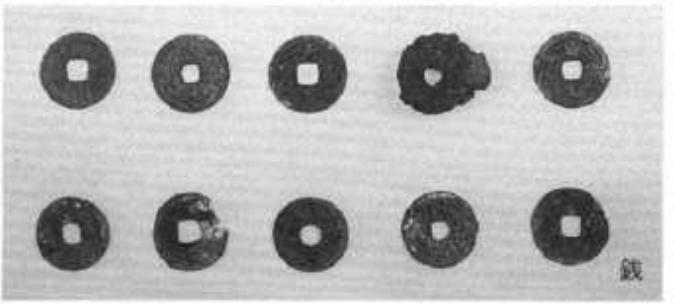
135

133

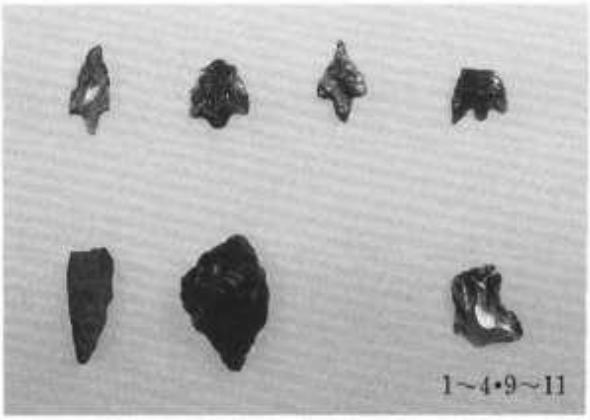

136

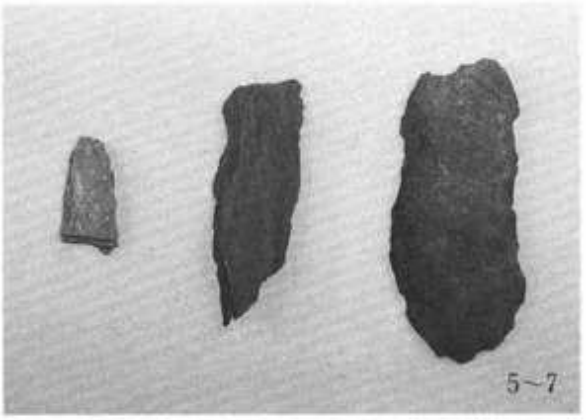
1

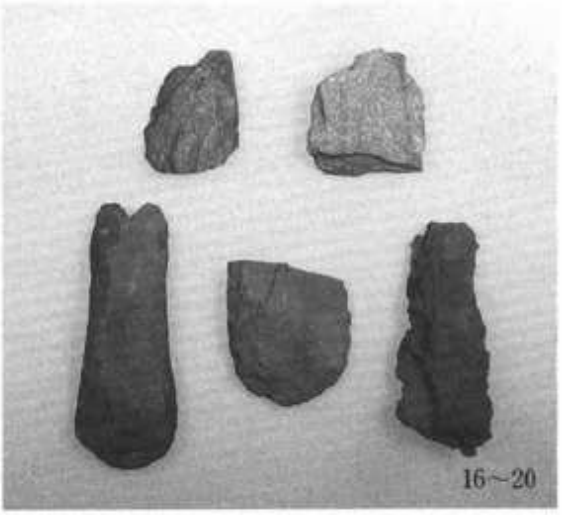

2·3

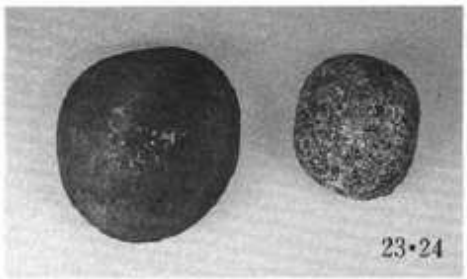

銭

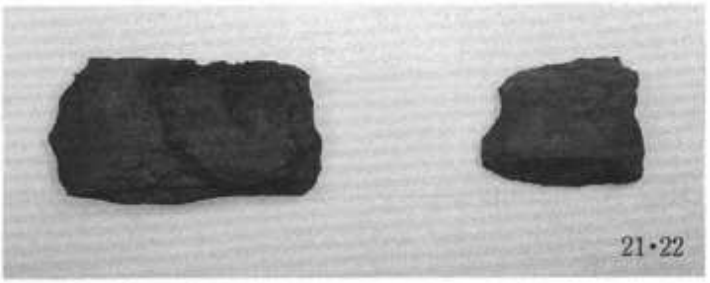
第 7 図版

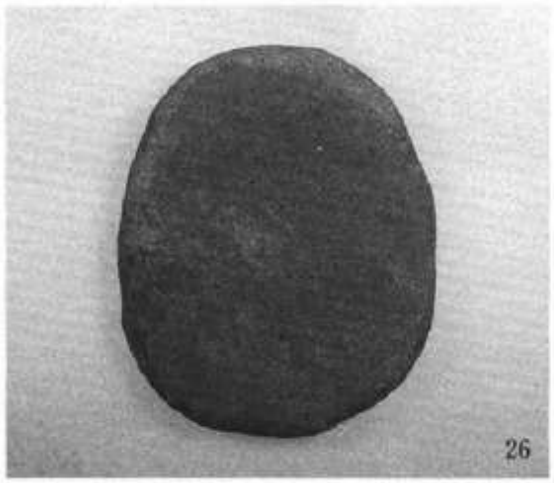


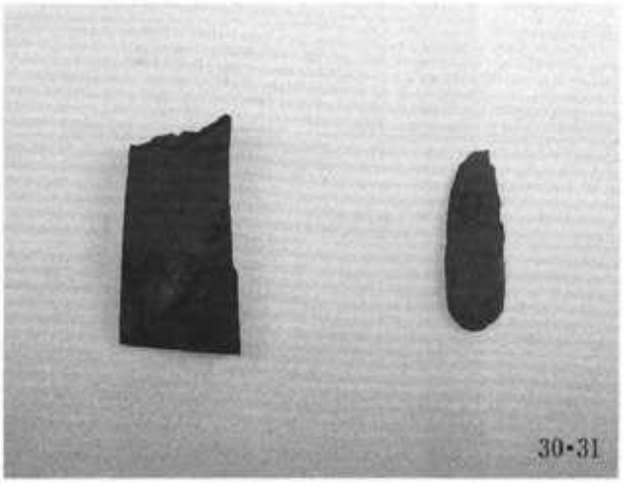






第 8 図版

松本市文化財調査報告　No.108
松本市百瀬遺跡II
平成5年3月22日　印刷
平成5年3月22日　発行
編　集　松本市教育委員会
〒390 長野県松本市丸の内3-7
TEL　0263（34）3000
発　行　松本市教育委員会
印　刷　電算印刷株式会社